もう一度――「女は黙っていなさい。そして従いなさい」

何が私を、コリント人への手紙第一14章34-35節の短いテキストをもう一度取り上げるように促すのでしょうか。それは、私が（ほかの多くの人々と同じように）この二つの節を真剣に受け止めているからです。とはいえ、本文批評上の問いも神学的な問いも含めて、多くの問いが残っています。そのうえ、この二つの節には計り知れないほどの影響史があります。私自身のために、何らかの誤った推論に従ってしまわないよう、このテーマにもう一度取り組み、考えを集め、それらをもう一度考え抜くことにします。

この文章は、そのまま印刷できる論文ではなく、作業と議論のための土台です。この二つの節についての資料を集めたもので、多くの引用から成っており、その大部分は英語から訳したものです。Logosのプログラム、インターネット上のさまざまなサイト、そして優れた翻訳プログラムwww.deepl.comのおかげで、この作業の手間は抑えられました。2026年10月に、この文章は見直され、修正されました。

短い導入とテキスト

今なお、女性の沈黙についてのパウロのことばを絶対的なものとする説教者、教師、指導者たちがいます。礼拝の集会において、宣教・説教にも、教えにも、祈りにも加わってはならない、というのです。そう望むなら、確かにそのように理解することもできるでしょう。とりわけブレザレン運動の諸サークルでは、右派から左派に至るまで、多くの姉妹たちがそれを受け入れています。時には――もしかすると想像以上に――内心の疑問や疑いを抱えながら。

そうだとすれば、これは広範囲に及ぶ、断定的で、非常に大きな影響力を持つ神の命令ということになるでしょう。これをそのように読み、あるいは理解し、実践するなら、そのことは、その人が聖書をどのように読んでいるかについて何かを示しています。この考察において、私は聖書を権威ある神のことばとして前提しています。しかしそれでも、私たちがそれを――とりわけ難しいテキストを――どのように解釈しなければならないのか、どのように解釈できるのか、あるいはどのように解釈すべきでないのか、という問題は残ります。

この論考で、私はこの問いを追究します。何人かの釈義家、言語の専門家、神学者あるいは聖書教師とその説明を集め、それらを引用します。そして、それらの解釈に私なりの論評を加えることをお許しいただきたいと思います。すべての解釈者にとっても、私自身にとっても、神の御前で、私たちは誤りうるものであり、しかも私たちの知ることは部分的なものにすぎない、ということが当てはまります。求められる謙遜と客観性をすべて備えていたとしても、なお、この問いははっきりしており、答えは開かれたままではありません。あるのはただ「はい」か「いいえ」だけです。絶対的な沈黙か、はいか、いいえか。語ることは、はいか、いいえか。この問いは今なお、もう一度考え抜かずに済ませるには、あまりにも重要です。たとえ多くの姉妹たちが沈黙する役割に満足しており、兄弟たちと同じように、そうすることで聖書に忠実であると考えているとしてもです。実際、そのような教会の礼拝はうまく機能しています。姉妹たちが語らなくても成り立ちますし、長い間そうしてきました。しかし、そのことは、この実践が正しいかどうかとい

う問いにとっては意味を持ちません。また、ここでは実際的な結果や影響を扱うつもりもありません。それはそれで非常に興味深いテーマではあるのですが。

以下に、問題となっているテキストを、文脈のゆえに31節から示します。

コリント人への手紙第一14章31-40節、Elberfelder Übersetzung（ドイツ語聖書翻訳）、CSV版による

31 あなたがたはみな、一人ずつ順番に預言することができるからです。それは、すべての人が学び、すべての人が励まされるためです。32 そして、預言者たちの霊は預言者たちに服従します。33 神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです。聖徒たちのすべての集会においてそうであるように。

34 女たちは集会において黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていないからです。

むしろ、律法も言っているように、従いなさい。

35 しかし、もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。

女が集会で語るのは恥ずべきことだからです。

36 それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。37 もしだれかが、自分は預言者である、あるいは霊の人であると思うなら、私があなたがたに書いていることが主の命令であることを認めなさい。38 しかし、もしだれかが無知であるなら、その人は無知のままでいなさい。39 ですから、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また、異言で語ることを妨げてはいけません。40 ただ、すべてのことを品位をもって、秩序正しく行いなさい。

規定：女たちは礼拝の集会において黙っていなければならない。

理由：（1）彼女たちは語ることを許されていない。

（2）むしろ、律法が言っているように、従わなければならない。

取り決め：もし学びたいと望むなら、家で自分の夫に尋ねなければならない。

根拠：女が集会で語るのは恥ずべきことである。

理性をクロークに預けてしまわないこと

絶対的な沈黙の命令を支持する兄弟たちの多くは、キリスト教信仰を、理性に反するものでも科学に敵対するものでもないものとして擁護しています。言い換えれば、自分の理性のスイッチを切ることなく、創造者と創造を信じ、あるいは復活と奇跡を信じることができる、というのです。この見解に、私は全面的に同意します。

しかし、この姿勢は聖書を読むことと聖書を理解することにも、同じように当てはまります。ですから私は、同じように綿密に、しかも同時に結果に対して開かれた態度で、聖書のテキストを研究しなければなりません。とりわけ、それが教会生活の実践に広範囲な影響を及ぼす場合には

そうです。その際、最初に申し上げておきますが、このみことばの内容を批判することは許されません。なぜなら私は、新約聖書を旧約聖書と同じく、霊感された、神の息吹による神のことばと見なしているからです。

ですから私は、何十年にもわたって激しく議論されてきた、この極めて論争の多いテキストに、もう一度取り組みます。私自身が多くの先入観、知識と無知、そしてさまざまな影響を持ち込んでいることは、変えようがありません。それでも私は、ただ精一杯の知識と良心に従って、聖霊の助けと、私の（照らされた）理性によって、この二つの節を理解しようと努めます。

私は、フェミニズムの影響を受けている、あるいは操られているという、あらゆる言いがかりを退けます。残念ながらそれは、人が別の、あるいは正反対の認識に至ったときに、沈黙の命令に強く固執するすべての兄弟姉妹たちが、呪文のように繰り返す決まり文句の非難です。彼らの立場と勧めはこうです。「このテキストは単純で、明快で、一義的であり、誤解しようがない。ただそれに従えばよいのだ。」

では、一度それを試してみましょう。コリント人への手紙第一を読み進めていくと、周知のとおり、11章5節に、女性が祈り、預言するという言明が出てきます。ここで、仮にということで、次のような理解をお許しいただきたいと思います――私はまだ14章を読んでいないのですから――。すなわち、女性はこれを教会でも、友人たちの間でも、家族の中でも、どこででも行っている、という理解です。それから14章を読むと、パウロはそこで繰り返し強調しています。すべての人が、つまり男性も女性も、参加することができ、また参加すべきなのだ、と。彼は確かに「兄弟たち」という語や男性形の代名詞を用いていますが、たいていは両方の性が意図されているというのが一般的な合意です。それは、似たような意味で、あるいはまったく総称的男性形の意味で用いられています。常にそうだというわけではありませんが、多くの場合そうです。つまり、33節までは、礼拝の集会について性別に関する制限は何も設けられていません。そして34節と35節が来て、――少なくとも一見したところ――姉妹たちの参加を断定的に締め出しているのです。

彼女たちは語ることを許されていない！これは、既存の命令か伝統に依拠しているように見える言明です。このようなことに言及したり要求したりした最初の人がパウロであるはずはありません。パウロよりもずっと前に使徒たちがいましたし、イエス・キリストもおられました。しかし、新約聖書のどこにも、まったくどこにも、そのような命令はかけらほども見当たりません。はっきりした命令もなければ、そこからそれを推論できるような状況もありません。ここで、最初の疑問符をつけてよいでしょう。

すべての女性が黙るべきだというのに、それを例外と呼ぶのは的を射ていません。何も言ってはならないのは、その場にいる人々の半分なのです。これを例外と呼ぶのは、むしろ事態をなだめるような言い換えであって、まったく不適切、あるいはふさわしくありません。例外というのは、その場にいる人の50％にではなく、せいぜい10％ほどに関わるものです。

さて、ここから根拠づけが始まります。女たちは、律法も言っているように、従わなければならない。つまり、従うことが静かにしていることと同一視されているのです。周知のとおり、従うことはキリスト教の美徳です。では、論理の法則に従えば、礼拝の中で何かを語る男性たちは従っ

ていない、それどころか逆に思い上がっている、ということになるのでしょうか。あるいは別の問い方をすれば、ある姉妹が、はっきりそれとわかる従順な謙遜な態度で、もしかすると兄弟から促されて何かを語る（祈る、聖書を朗読する、預言のことばを語る）とき、それがどうして従う心でないことがありえるでしょうか。単純で穏やかな参加は、たとえそれがただ一つの質問への答えにすぎないとしても、従うことの反対ではありません。ですから、沈黙を従うことと同一視するのは説得力がありません。遅くともこの時点で、人は二度目に首をかしげ、ここには特定の問題があるのではないかと推測することができます。女性たちが、何らかの形で従う態度をもってふるまっていないのです。

この従うことは、律法によって求められています。後で多くの注解を紹介しますが、そこからわかるのは、最も優れた釈義家たちでさえ、どの律法が意図されているのか知らない、ということです。旧約聖書全体を見ても、そのような従うことの律法は知られていません。具体的な律法もなければ、旧約聖書の一般的な基調と言えるようなものもありません。

このテキストは単純ではありません。また、これらの節が語りかけている文脈、すなわち歴史的で具体的かつ特殊な状況があります。そのうえ、受取人たちは何が意図されているのかを確かによく知っていました。この場合、今日の私たちはそれを知らないのです！私たちはそれを再構成しなければならず、具体的なテキストを越えて、新約聖書の教え全体の枠組みにも必ず合致するような、考えうる説明を組み立てるよう努めなければなりません。

さて、女性の沈黙についての根拠づけはさらに続きます。「しかし、もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。」つまり、問題になっているのは、女性に対する厳格な沈黙の命令などではまったくないのでしょうか。学ぶことの問題、あるいは無知の問題なのでしょうか。家で尋ねるべきだというのなら、彼女たちは集会の中でそれをしていたということでしょうか。テキストの論理に従う人は、もはや絶対的な沈黙の命令について語ることはできません。女性たちは――おそらくすべての女性ではなく、一部の女性たちです。すべての女性が自分の夫を持っている、つまり結婚しているわけではないのですから――集会で発言したどの男性にも質問していたのでしょうか。そしてそれによって、ある種の混乱を引き起こしていたのでしょうか。あるいは、ただ落ち着きのなさや居心地の悪さを生んでいただけなのでしょうか。彼女たちは挑発的に、しつこく、執拗に、あるいは批判的に質問していたのでしょうか。

集会とは、今日に至るまで、私たちが、女性も男性も、学ぶことを許され、また学ぶべき場所ではないでしょうか。そして質問が助けになるのなら――たいていはそうなのですが――、質問は礼拝の一部であってよいし、またそうあるべきです。説教者は会衆に質問するよう促してよいのです。大切なのは立派な説教ではなく、人々に何が届き、何が理解されるかなのですから。31節でパウロが願っているのは、すべての人が学ぶことではないでしょうか。1世紀には、教会あるいは礼拝の集会こそが学びの場でした――すべてが組織化された教会生活を持つ今日の私たちとは違って。ほかにどこがあったでしょうか。そして、学ぶことには、もちろんふさわしい形でではありますが、尋ねることが含まれます。それなのに、パウロはその直後にまた、女性たちに質問することを禁じ、それを家で、夫のもとでだけするように指示したというのでしょうか。教会の中でではなく、家で学ぶというのでしょうか。何かがかみ合っていません。そして、マルタとマリ

アの場合はどうだったでしょうか。イエスがおられるところで、その足もとで学ぶことは、ずいぶん頻繁に、まさに理想としてロマンチックに美化されています――それなら、どうかそれを教会にも当てはめてください。学ぶこと、そして控えめに、学ぶ意欲をもって静かに質問すること――それについてイエスは何と言われるでしょうか。「黙れ！」でしょうか。

さて、このテーマを締めくくるために、次のように言われています。「女が集会で語るのは恥ずべきことだからです。」思考の流れからすれば、この「語る」を、一部の女性たちによるふさわしくない質問攻めと解釈するのが合っているでしょう。そのようなふるまいは恥ずべきこと、不名誉なことです。しかし、誰にとってでしょうか。それは旧約聖書における「忌み嫌うべきこと」と似た意味を持っているのでしょうか。それは神にとっての、あるいは神の前での恥なのでしょうか。それとも、古代の地中海世界で知られ、今日でもなお地球上のいくつかの国々や、国を越えた文化の中に存在しているような、恥と名誉の文化において、礼儀にかなっていないということなのでしょうか。つまり、恥は文化的に理解されるべきなのでしょうか。女性たちが自分の夫の名誉を顧みないから――しかも、明らかにその場に居合わせ、それを恥と感じるであろう外部の人々の前でも――なのでしょうか。

ここまでは、このテキストを単純化し、そこから絶対的な沈黙の命令・発言の禁止を読み取り、それによって、私の考えでは、理性をクロークに預けてしまっているような確信に対する異議として述べてきました。これらの節の意味を説得力ある形で見いだそうとするとき、少なくとも次の点が未解決です。

- 沈黙は絶対的なものとして理解されるべきでしょうか。
- このように実践されていたのは、コリントの集会、つまりその地の家の集会でしょうか、それとも世界中のすべての集会でしょうか。
- これはパウロ以前からすでに一般的な慣習だったのでしょうか――あるいは、彼は何に依拠しているのでしょうか。
- 単に黙っていることは、従うことと同じなのでしょうか。
- パウロが依拠しているのは、どの権威ある律法なのでしょうか。
- 姉妹が参加するときに生じるという恥とは、何を意味しているのでしょうか。
- さらに：この二つの節は、もしかすると引用であって、パウロはまさに女性が黙るべきだという要求を論駁するために、それを持ち出しているのではないでしょうか。
- さらに：実際、これらの節は後から挿入されたのではないかという疑いがあります。

私がこれらの節をどのように理解するか、あるいはどの解釈者に同意できるかについては、この論考全体の最後で詳しく述べます。というのも、ここからまず、神学者たち、聖書に忠実な解釈者たちによる、女性の沈黙についてのこのテキストの注解をめぐる旅が始まるからです。

ブレザレン運動の解釈

以下は、私が入手できたいくつかのテキストです。これらの著者たちによるものはほかにもあるでしょうが、引用したテキストによって全体をよく見渡すことができます。

J・N・ダービー（J. N. Darby）

Notes of Readings on the Epistles to the Corinthians

34節は、特定の律法ではないとしても、律法の基調です。使徒はこの点について、テモテに対して誤解の余地なく語っています。「私は、女が教えることを許しません」と彼は言っています。女性が賛美歌の歌い出しをすることさえ、私は少し場違いだと思います。しかし、彼女が控えめにそうするのなら、私は反対しません。もし三人の女性が無人島にいるとしたら、彼女たちが私的にそうするのであれば、なぜ一緒にパンを裂いてはいけないのか、私にはわかりません。夫と妻だけでいるとき、二人が自由に感じ、その備えができているのなら、彼らがパンを裂くことに私は何の異議も感じません。（J. N. Darby, Collected Writings, Expository）

HJRの論評：それがどの律法なのかは、未解決のままです。特に聖書に精通した人物として、彼は少なくともそれを提案することはできたはずです。彼もまた、それを知らないように思われます。

女性が伝道のために出て行くことを、私は受け入れません。教えや教会の事柄に口をはさんだ女性で、自分自身とほかのすべての人々に災いをもたらさなかった人を、私はこれまで一人も見たことがありません。彼女がグループの前に座ってそれを教えるなら、彼女は自分の場所を完全に離れてしまっています。私たちは、主にあって労したツルパイナとツルポサについて、また愛するペルシスについて読みます――それぞれが奉仕における自分自身の場所にいました。福音書では、女性たちにあらゆる栄誉が与えられています。しかし主は、女性を説教のために遣わされたことは一度もありません。また、キリストの埋葬のためにキリストに油を注ぎに行った男性も一人もいませんでした。女性たちの預言は説教ではありませんでした。霊感による教えがあり、彼女たちはそれについて語ったのです。彼女たちは、ピリポの娘たちのように、特別な仕方でそれを行ったのだと私は思います。マグダラのマリアがキリストによって弟子たちのもとへ遣わされたように、女性たちが用いられることはありえます。もしキリストがある女性をメッセージを伝えるために遣わされたのなら、彼女にできる最善のことは、行ってそれを伝えることでしょう。それは単なるメッセージでした。それは教えの場ではありません。メッセージがどのような内容であれ、それはメッセージにすぎないのです。仮にそれが書き記されて特別な教えであったとしても、教えはメッセージの中にあるのであって、マグダラのマリアの立場にあるのではありません。聖書は「私は、女が教えることを許しません」と言っています。彼女はまったく教えるべきではありません。彼女は、回心した人たちを、教師としてふるまうことなく導くことはできます。教えるとは、自分の下に置かれた人々に特定の教理を伝えることです。

HJRの論評：ダービーは、イエスが女性たちにどのように接したか、またパウロが神の国の奉仕において女性たちを自分と対等な同労者と見なしていたこと（ローマ16:12）を、確かに認識しています。「主にあって労する」ことが宣教をも意味しうるし、場合によってはそう意味せざるをえない、ということは、ここで述べておくべきでしょう。しかしダービーは、すべての上に、教えることを禁じているテモテへの手紙第一2章12節というこの一つの節を置き、それを一般的に拘束力のあるものと解釈しています。この指示を含む節がこの一つしかないこと、そしてそれは決して一般的に当てはまるものではなく、偽りを教え、しかも不適切な権威主義的なやり方でそうしていたエペソのある特定の女性に向けられたものであることは、話題にされていませんし、私の知る

限り、この考えは彼の著作にも出てきません。それが本当にそれほど一般的な意味を持ちうるのかどうかは、まったく問われなかったのです。

ダービーとその同時代の人々は、私たちと同じように、自分たちの時代の子どもでした。彼らの時代のほうがよかったのでしょうか。彼らの時代もまた、社会においても、もちろん教会においても、女性に従属的な役割を割り当てる時代精神に刻印されていました――選挙権もなく、公の場での演説もない、などです。今日ではそれが変わり、そのことは私たちの考え方にも同じように影響を与えています。その際、注意すべきことがあります。どの時代精神も、聖書の視点から見れば、部分的に誤っており、誘惑的で、危険でありえます。200年前の時代精神も、今日の時代精神もそうです。

イエスは女性を説教のために遣わさなかった――でも、すべてのキリスト者に当てはまる宣教命令は別ではないでしょうか。それ以外には、私の考えでは、十二人と七十人の派遣（ルカ9:2、10:1-9）を除けば、イエスが説教するよう命じた例はほとんど、あるいはまったくありません。ですから、女性が説教することに反対するこの論拠は、いささか根拠のないものです。

ウィリアム・ケリー（William Kelly）

コリント人への手紙第一の解説

この規則は非常に重要です。女性たちは集会で語ることを禁じられています。議論を好む人々は、どこかで許されるとすれば、そこでこそ女性たちに許されるかもしれない、と考えたかもしれません。人が無に等しく、神がご自分の臨在と力を霊的に現される聖なる雰囲気は、疑いなく賜物を持ち、伝道者ピリポの四人の娘たちのように預言の賜物さえ持っている聖なる女性たちにとって、ふさわしい場所でありえたかもしれません（使徒21:9）。しかし、そうではありません。使徒は、集会においてこれを禁じるよう霊感を受けていたのです。もちろん絶対的にではありません。どの賜物も用いられるべきだからです。しかし、その仕方は主の指示に従属しなければなりません。旧約聖書における神の啓示は、女性の一般的な従属について明確な示唆を与えていました。新約聖書も、集会に関しては、それに劣らずはっきりしています。彼女たちが福音の宣教において前に出ることができるという考えは、当時は誰の頭にも浮かびませんでした。それは、異教徒たちでさえ衝撃を受けたであろう、女性のたしなみに対する違反でした。それは、最善のものの堕落、刷新の精神、そして近代のキリスト教界のやり方にこそ取っておかれていたものでした。使徒は、こうした公の場で彼女たちが一つの質問をすることさえ禁じました。もし何かを知りたいと望むなら、家で自分の夫に尋ねるべきでした。女が集会で語るのは恥だからです。……

このテーマ全体は、神のことばが彼らから出たのか、それとも彼らのところにだけ来たのか、という問いをもって締めくくられます。コリント人たちは、至るところで有効な使徒的秩序から逸脱した最初の人々でした。それは教会の反逆の始まりでした。教会は従うべきものです。神のことばが命じるのであり、しかもすべての集会に等しく命じるのです。

テモテへの手紙第一2章について：しかしパウロは、そのテーマをもう少し先まで追っていきます。彼はこう書いています。女は、よく従う心をもって、静かに学びなさい。私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません（11-12節）。彼はさらにもう少し先まで行きます。女性

はこう言うかもしれません。「私は自分の権威を乱用しているわけではありません。ただそれを行使しているだけです。」しかし、まさにそれが間違っているのです。彼女はそのような権威を行使することを禁じられています。したがって、これはすべてを包括して当てはまります。女性が強く男性が弱いかどうかは関係ありません。彼らが夫と妻になる前にこのことを考えていたなら、よかったでしょう。しかしその場合でも、言い逃れはありません。妻は夫に対して権威を行使してはなりません。もちろんこのことは（なお付け加える必要があるでしょうか）、ほかのすべての関係にも当てはまります。[1]

HJRの論評：私は15歳の頃から、ケリーの著作を愛してきました。多くのことを学びました。しかし、異なる意見や確信を持つ人々に対する彼の容赦のない、そして根拠のない厳しさと傲慢さにますます気づき、それが鼻につくようになってから、私は彼の解釈に対する信頼、あるいは関心をほとんど失ってしまいました。ほかの意見を批判することはいつでもできます。しかし、自分自身の意見や、ブレザレン運動・ディスペンセーション主義・聖霊の賜物停止論の意見を、ほかのあらゆる意見よりも上に置くことは、ウィリアム・ケリーの場合のように学識がどれほど並外れたものであったとしても、みじめなことです。

この二つの節についてのケリーのテキストはほかにもあるでしょうが、彼もまた、初期のブレザレン運動の主流の中で動いています。

ここに引用したテキストについて言わなければならないのは、それらがすでに間接的に、ここで述べた厳しさを示しているということです。というのも、もし当時、異教徒たちでさえ女性が公に伝道することを不適切だと感じたのだとすれば、1800年後にはそれが変わっていることもありうるからです。彼の時代には、実際にはまだ変わっていませんでしたが、20世紀には確実に変わりました。それなのに、どうして時代精神を基準にまで高めることができるのでしょうか。

旧約聖書における一般的な従属という彼の前提は、根拠のない決まり文句です。彼はそれを根拠づけてもいません。もしかすると別の箇所でしているのかもしれませんが。旧約聖書の時代に女性たちが後ろに退けられていたのは、堕落の結果であって、神のみこころの結果ではありません。この事実に、これらの兄弟たちの誰も気づきませんでした。私はそれを告発するのではなく、せいぜい嘆くだけです。ダービーの場合と同じことを繰り返しますが、彼らは自分たちの時代の子どもだったのです。この「女性問題」において社会がどのように刻印されていたか、そのように彼らの釈義も刻印されていました。神に訴えて嘆くほかありません。しかも、このブレザレン運動の中には非常に多くの祝福があり、そこから非常に多くの祝福が流れ出たにもかかわらず、なのです。私自身、そこから大いに益を受けました。

F・W・グラント（F. W. Grant）

The Numerical Bible――4（34-40節）：（堕落した）創造における規則

4 この一般的な自由には、一つの例外があるべきでした。集会において、聖徒たちが実際に全員集まったときには、女たちは黙っているべきでした。ここで問題になっているのは、女性がほかの人々を勧めたり築き上げたりする能力ではなく、使徒が冒頭で取り上げ、創造が定めている秩序の問題です。女性の自由の領域、そして女性の主権の領域とさえ言えるものは、家庭にありま

す。つまり、それは私的なものであって、公的なものではありません。このことが、あらゆる種類の賜物を用いるための広い余地を与えないなどと考えてはなりません。もし女性が、本当に自分の領域に属するものをもっと培うなら、神が彼女に授けられた賜物を用いることはどれほど実り豊かなものとなるでしょうか。そして、男性が男性であるがゆえに同じようには満たすことのできない、どれほど多くの場が彼女に開かれていることでしょうか！ですから、子どもたちに関しては、すぐに明らかです。幼い子どもたちにとって、女性は今なお最良の、また自然によって定められた教育者です。神は子どもを父親の腕にではなく、母親の腕に置かれました。そしてこのことは、女性の領域が自分の家族の中だけにあるという意味ではありません。女性がその性のゆえに入っていくことのできる家族は数えきれないほどあり、そこで彼女はまったくくつろぐことができ、自分の働きに対する豊かな益と報いを見いだすことができるのです。妻たちを通して、女性たちはこのようにして、多様な祝福のための無限の働きの場に近づくことができます。妻は家庭の中心であり、このようにして妻に近づくことができるということは、計り知れない特権であり、彼女に委ねられた大きな責任であって、それはほかの女性たちにできることをはるかに超えています。このことがもっと認識されさえすれば！使徒がこの明白な規則によって、女性を無に等しいものにしようとしたとか、神が彼女に授けられた賜物を用いることを妨げようとしたなどと考えてはなりません。先に述べたように、男性たち自身を取ってみても、彼らのうちどれほどの人が、何らかの公の奉仕にふさわしい領域を持っているでしょうか。この意味で女性たちが不適格とされているのは、大多数の男性たちが不適格とされているのと何ら変わりません。神はそれぞれに場所を割り当てておられます。そして、神が人々の間で神に仕えようとする人々に常に開いてくださる扉を、それぞれが見分けることができるようにする知恵を見いだすためには、ただ愛の霊が必要なだけです。

このように、使徒のことばは、ある意味では禁止するものですが、別の意味では、女性が祝福を受けることができ、また常に祝福を受けてきた本当の領域を私たちに示しているにすぎません。しかし、彼はこのことについて議論の余地を残しません。「神のことばは」と彼は言います、「あなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ伝わったのですか。自分を預言者、あるいは霊の人だと思う人は、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。」特に今日、人々が、見てのとおり、彼がここで私たちに与えているものを無視したり、それに抵抗したりする傾向にある中で、このことはどれほど重要でしょうか！実際、容易にわかるように、この章全体が大部分脇に押しやられています。それは、すでにやんでしまった特別な賜物を扱っているからであり、その代わりに、全体としておそらくただ一人の説教者が立ち、その人が残りのすべてを一身に兼ね備えていると見なされ、教会は大部分その人に限定されているのです。こうして実際、使徒の働きの出来事から容易にわかるように、ユダヤ人の会堂にさえかつてなかったような狭さに至っています。会堂では、ラビ主義の厳格な規則と硬直性のただ中にあってさえ、さまざまな話し手を招き、彼らに場を与える用意がありました。現在、物事は疑いなく、より大きな自由に向かって進んでいます。しかし残念なことに、それと同時に同じ程度に、緩みと、ここでの使徒のことばの軽視へと傾いています。彼は短く、断固としています。「もしだれかが無知であるなら」と彼は言います、「その人は無知のままでいなさい。」私がすでに述べたことがその人を照らすのに十分でないなら、その人はそのような照らしなしに行けばよいのです。他方で、今

日確かに必要なのは、ここでの彼のやり方に倣った勧めです。「ですから、兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。」残念ながら、このようなことばが何を意味するのか、ほとんど知られていません。しかし、責任は相変わらず大きいままであり、私たちすべてが仕えるために責任を負っている事柄も同じです。彼は、とても単純で、とても実際的な、簡潔なことばで締めくくります。「すべてのことを品位をもって、秩序正しく行いなさい。」[2]

HJRの論評：ケリーとダービーの後、私はF・W・グラントを読みました。The Numerical Bibleは、私の聖書研究の変わらぬ、助けになる伴侶でした。傑作であり、Logosで入手できます。このテキストはそこから引用し、翻訳したものです。

グラントがこの著作を書いたとき、おそらく今の私よりも若かったでしょうから、私がそれについて意見を述べることは許されるでしょう。「すべてのことを見分けなさい」ということばは、私自身にこれほど多くのものを与えてくれた、いわゆる「良い」ブレザレン文献にも当てはまります。34節と35節の解釈において、彼自身がこのことばの厳格さ、つまり語ること、預言すること、祈ることからの絶対的な締め出しに、少し驚いているように見えることが、本当に感じ取れます。彼はそれを「例外」と呼んでいます。いいえ、例外というのは――この語を説明するためだけに言えば――たとえば、やもめたちが黙っていなければならないとか、20歳未満の女性たちが黙っていなければならないといった場合でしょう。それなら例外です。しかし、女性という性全体を締め出すことは例外ではなく、コリント人への手紙第一14章のテキスト全体の文脈の中では説明のつかない、理解しがたい指示です。

だからこそ彼は、女性たちがほかにどんなことができ、また何をすべきかということに、これほど多くの紙幅を費やしているのです。しかし彼もまた、自分の時代の時代精神の罠にはまっています。女性は公の場では働かない――ちょうど彼の時代のニューヨークのように。女性の場所は家庭であるということは、新約聖書の諸文書が成立した1世紀の時代精神の考え方にも、20世紀に至るまでの時代精神にも合致しています。しかしそれは創造の秩序ではなく、社会の秩序です。それはこの50年で大きく変わりました。女性たちは今や家庭の中だけで働いているわけではありません。家庭で働いてもよいのですし、良い母親として子どもたちと多くの時間を過ごすべきです。しかし子どもたちは大きくなり、家にいることが少なくなり、やがてまったくいなくなります。ですから、女性の沈黙をこうした家事の考えと結びつけ、いわば沈黙を何とか納得のいくものにするための根拠とすることは、10年前ならまだ私を納得させたかもしれませんが、今日ではもはやそうではありません。それはどこから見てもつじつまが合いません。

彼もまた、すべての、あるいは大多数の人々と同じように、創造の秩序に訴えています。しかし、その秩序とは、いったい何なのでしょうか。それは、男性と女性がそれぞれ特有の性質と強みを持ち、対等な目線で互いに補い合うことであり、神が決して望まれず、堕落によって初めてもたらされた階層的で一方的な服従なしにそうすることです。ですから私は問います。男性は自分の人生のために女性の助けを必要としているのに、礼拝の集会においてだけは必要としないのでしょうか。なぜ男性は、そこでも、祈り預言する女性たちによる補いを必要としないのでしょうか。イエスがその真ん中におられる場所で女性たちの口を封じるような創造の秩序の理解は、かなり一面的で家父長的です。そしてイエスは、女性たちに黙るよう命じたことは一度もありません

――イエスの生前には、そのような集会としての集まりはまだ存在しなかったとしても、このこともこの文脈で述べておかなければなりません。

F・B・ホール（F. B. Hole）

34節と35節は、集会における女性の沈黙を扱っています。この指示は非常に明確です。そして「語る」に用いられている語は普通の語であって、ある人々が主張してきたように「おしゃべりする」という意味ではありません。この規定は、疑いなく時代精神に逆らうものです。しかし、もしそれが聖書に注意を払わない理由になるのなら、聖書の中で注意を払われるものは、間もなくあまり残らなくなるでしょう。

神の御霊は、これらの指示がどのように軽んじられ、攻撃されるかを前もって知っておられました。この傾向は、コリントの何人かの人々の間にすでに現れていました。36節と37節からそれを推し量ることができます。神のことばは、コリント人たちからではなく、主ご自身とその使徒たちから出たものでした。それは彼らのところに来たのです。彼ら自身は、自分たちを霊的な人間だと思い込んでいたかもしれません。もし彼らが本当に霊的であったなら、パウロが示した秩序の原則が彼自身の考えではなく、彼が伝えた主の命令であることを認めることによって、それを証明したことでしょう。今日の霊的な洞察の試金石も同じです。

神のことばは教会から出るのではない、ということによく注意しましょう。それは教会に来るのです。[3]

HJRの論評：パウロがこれを主の命令と呼んでいるのなら、なぜ私たちはそれをほかのどこにも見いださないのでしょうか。主ご自身のもとにも、使徒たちのもとにも。さて、単純な心は、私たちがそれに従うには一つの節で十分だ、と言います。それは非常に敬虔に聞こえます。私はブレザレンのもとで、聖書を聖書と比較することを学び、それ以来今日まで実践してきました。しかし、この沈黙の場合には、それができません。このテキストを裏づける比較対象のテキストがないのです。

女性に語る機会を与える人は、その結果として、やがて神のことばのさらに多くを無視したり否定したりするようになる、と信じるのは、決まり文句のような悲観主義です。それはまったくのナンセンスです。

W・W・フェレデイ（W. W. Fereday）

Bible Treasury（聖書の宝庫）、第20巻、378頁、質問への回答より。

集会で女性が語ることに関しては、聖書ははっきりしています――そうあってはならないのです。コリント人への手紙第一14章34-35節は、ただ主のみこころを行いたいと願う人々によって誤解されることはありえません。この章全体は、聖徒たちが集まるときに最大限の自由を与えています。唯一の規則は、すべてが徳を高めるために行われなければならないということであり、それは、言うまでもなく、聖霊の導きの御手を必要とします。聖霊なしには、何一つ主の益や栄光のためになることはできません。そして例外が来ます。「あなたがたの女たちは、集会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていないのです」等々。

本質的に同じことが、テモテへの手紙第一2章にも書かれています。8節には、「男たち（そこには定冠詞があるべきだからです）は、怒ったり言い争ったりせずに、どこででもきよい手を上げて祈りなさい」とあります。それから女性たちへのことばが来ます。「同じように女たちも、つつましい身なりで自分を飾り」等々。そしてそれに続いて、「女たちは、まったく静かに、全く従順に学びなさい。しかし私は、女が教えることも、**男の権威を奪い取ることも**許しません。むしろ静かにしていなさい」とあります。私は、これらのことばがコリント人への手紙第一14章と同じように集会に関わるものであることを疑いません。なぜなら、テモテへの手紙第一の大きな目的は、生ける神の教会であり、真理の柱また土台である神の家で、どのようにふるまうべきかを示すことだからです（というのも、この節はそのように訳されるべきであって、Authorized Version（King James Bible）が推論させるように、単にテモテ個人への指示ではないからです）。

女性が指導すべきでない理由として、二つの理由が挙げられています。

（1）神が女性を最初に創造されたときに彼女に割り当てられた場所。

（2）堕落における彼女の役割。

（1）神はまずアダムを、それからエバを造られました。そしてコリント人への手紙第一11章3節にあるように、「女のかしらは男」であり、決してその逆ではありません。神が彼女に第二の場所を与えられたのですから、決して第一の場所を求めないことが彼女にふさわしいのです。

（2）「アダムはだまされませんでしたが、女はだまされて違反に陥りました。」サタンは、より弱い器を通して罪を持ち込みました（だからといって、アダムの堕落がよりましなものになるわけでも、より弁解の余地のあるものになるわけでもありません。むしろより悪いのです。彼はだまされなかったのですから、目を開いたまま罪を犯したのです）。それゆえ、神は彼女を指導から締め出しておられるのです。

彼女の従属あるいは沈黙のもう一つの理由が、コリント人への手紙第一14章36節に挙げられているように思われます。「神のことばは、あなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ伝わったのですか。」さあ、このことばをよく吟味し、それが何を含んでいるのかを見てください。神のことばは教会（女）に来るのであって、ローマ教会が私たちに教えようとしているように、教会から出るのではありません。キリスト者の女性は、この大原則を学び、それに従って行動すべきです。彼女は男性から学ぶべきであり、男性の教師になろうと思い上がるべきではありません。

聖書が、女性が説教することをどこにも禁じていないことは目を引きます。しかしそれは簡単に説明できます。東洋の女性は（そして聖書が最初に東洋の人々の手に委ねられたことを忘れてはなりません）、あまりにも隔離された場所にいたので、そのようなことを夢見ることさえできなかったのです。しかし、そこにいるすべての人が一つのからだの肢体であり神の聖徒である神の集会においては、彼女はある程度の自由を勝手に取るかもしれません。だからこそ、私たちがここで考察してきた指示があるのです。

しかし、それは今、何人かの人々の心を占めている点ではほとんどありません。そこで、その点に移ります。姉妹たちが祈祷会や聖書研究会に参加することは許されるのでしょうか。私は率直

に認めますが、そのような集まりは、主の食卓から何らかの時点で特別に招集される場合を除いて、教会そのものの集会ではありません。しかし、姉妹たちはそれに参加してよいのでしょうか。私は確信しています。一般の人々に扉が開かれている集まりでは、彼女たちが参加することは正しくありません。女性が公の場に出ることを許している聖書箇所を、私は一つも知りません。そのような集まりは厳密な意味では教会の集会ではありませんが、私はその原則が当てはまると考えます。そして、世の中で、またある程度は教会の中でも、女性たちが自分のふるまいを（服装においてさえ）すっかり変えてしまっている今日のような時代には、神の恵みによって、多くの場合自分自身にとって少なからぬ代価を払いながら、集会における神の秩序のために立っている人々こそが、このような事柄においては毅然としているべきです。確かに、キリスト者の姉妹たちは、時代精神に従うのではなく、主のみこころを行いたいと願っているはずです。もっとも、時代精神に感染してしまうのが最もたやすいことではありますが。

コリント人への手紙第一11章の指示は、私の考えでは、別の性格のものです。そこでは、女性たちは、「御使いたちのために」頭をおおってそうするという条件で、祈り預言することを紛れもなく許されています。さて、これは明らかに公の集会で行われるのではありません。なぜなら、すでに見たように、同じ手紙がそれをはっきりと禁じているからです（そして、聖書を畏れ敬って読む人なら誰も、聖書が自己矛盾しているとは信じません）。ですから、それは私的な性格の集まりにおいてでなければなりません。初期の時代には、今日以上に、信者たちはしばしば祈りと徳の高め合いのために、個人の家やほかの場所で形式ばらずに集まっていました。本来の意味での教会の集会ではなく、公的な性格を持たないそのような集まりにこそ、コリント人への手紙第一11章の勧めは関わっていると私は考えます。申し添えておきますが、最近、何人かの人々がこれに反対しています。

私は、自分が明確に書き、啓示された主の御思いを伝えたと信じています。私はそう信じていますが、もし何らかの点で誤りがあるなら、主がそのために選ばれる誰からであれ、喜んで訂正を受けます。W・W・F

HJRの論評：沈黙というテーマについてのこの質問への回答においても、今日しばしば見られるように、議論の武器庫全体がまたしても混ぜ合わされています。

一つには、コリント人への手紙第一14章とテモテへの手紙第一2章が、そのままいっしょくたにされています。後者の箇所も集会に関わっているというのです。しかし、おそらくそうではないでしょう。なぜなら「どこででも」とは、男性たちが祈る代わりに互いにぶつかり合い、言い争っている場所を意味しているからです。集会もその中に含まれうるでしょう。しかしその後、「同じように女たちも」と書かれています――つまり、女性たちもどこででも祈るべきであり、ただ、それによって注目を集めるために華美な装いをしないよう気をつけるべきだ、ということです。その後に問題になっているのは学ぶことであり、この場合は家においてであって、集会においてではありません。そして、学んだことのない女性は、もちろん教えるべきではありません。学ぶことなしには教えることもできないからです。そして彼女は権威を奪い取るべきではありません。「男の」権威については、テキストには何も書かれていません。意図されているのは、乱用的

で、害を与え、強制的な教え方――そして、手紙全体のテーマであるように、偽りの教えを広めることなのです。

指導することと、集会で教えたり語ったりすることとは直接には何の関係もないにもかかわらず、彼は、女性が指導すべきでないことを、エバではなくアダムが先に創造されたということによって根拠づけています。しかし、時間的な順序は、決して指導すべきでないことの理由にはなりません。決定的なのは常に賜物です。もし男性の指導が下手なら、それが上手にできる女性が指導すべきなのは確かではないでしょうか。男性がかしらであって、その逆ではない、だから指導者なのだ、というのです。残念ながら、それはそのようには根拠づけることのできない「かしら」の説明です。「かしら」はむしろ起源や源を意味しています。エペソ人への手紙5章では、かしらは養い手であり救い主であって、権威や指導者ではありません。夫が妻に先立って歩み、妻の守り手であり養い手であるということは、良いことです。しかし、タイプや性格や賜物によって、役割は違ったものでありえます。創造の秩序としての一方的な服従は、今なお多くの人が信じているおとぎ話です。たとえ彼ら自身がそれに従って生きておらず、実際には女性のほうが主導権を握っていて、外に向かって敬虔な体裁を保っているだけであってもです。

女性がだまされたということが、世界中のどの女性も指導してはならない理由だとされます。このようにしてテモテへの手紙のテキストが説明されるのです。それは一切の論理を欠いています。この手紙全体も、偽りの教えによって惑わされる男性たちについて語っています。女性のほうが惑わされやすく、だから指導してはならないのでしょうか。もちろん、惑わされやすい女性たちはいます。しかし、そういう女性たちは、指導者であることや指導者になろうとすることによって際立っているわけではありません。エバはエデンで指導権を握ったのでしょうか。そのように言うことができるでしょうか。果実を手渡すことが指導的な行為なのでしょうか。そして、このいわゆる指導的な行為から、指導することと教えることの禁止を導き出すのでしょうか。しかも世界中のすべての女性に対して！いいえ、この論証には、少なくとも一つの聖書的な並行箇所が必要でしょう。私は今日までそれを待っています。

ハミルトン・スミス（Hamilton Smith）

（34、35節）集会において一人ずつ預言するというすべての人の自由は、女性には当てはまりません。彼女たちは集会において黙っているべきです。彼女たちにそれができるかどうかは問題ではありません。公の場における女性の沈黙は、創造の秩序にも律法にも合致しています。女性の自由の領域は家庭にあります。公の場で語ることは、恥を身にまとうことを意味します。

HJRの論評：私はスミスから多くを学び、彼の文体が好きでした。しかしここで彼は、私が上で何度も論じ、問い直してきたことのすべてを、短くまとめてしまっています。

ウィリアム・マクドナルド（William MacDonald）

14:33 「神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです。」言い換えれば、もしある集まりがどうしようもない混乱に陥っているなら、そこでは神の御霊が働いていないと確信してよいのです！

14:34 新約聖書の節の区分や句読点さえも、原典が書かれてから何世紀も後になって初めて付け加えられたことは、よく知られています。33節の最後の部分は、遍在する神についての一般的な真理と見なすよりも、34節をより詳しく規定するものと見なすほうが、意味が通ります（いくつかのギリシア語原典と、ドイツ語のいくつかの聖書版がこの句読法を用いています）。ですから、私たちの翻訳ではこうなっています。「聖徒たちのすべての教会でそうであるように、あなたがたの女たちは教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されておらず、律法も言っているように、従いなさい。」パウロがコリント人たちに与えている指示は、彼らだけに当てはまるものではありません。同じ教えが「聖徒たちのすべての教会」に与えられてきたのです。新約聖書は数多くの箇所で、女性たちは多くの貴重な奉仕をすることができるけれども、その地の教会全体において指導的な地位に就くべきではない、と証ししています。彼女たちには、家族と子育てにおける極めて重要な務めが与えられています。しかし、彼女たちは教会の中で公に語ることを許されていません。彼女たちの立場は、男性に対する服従によって特徴づけられています。

私たちは、付け加えられた表現（「律法も言っているように」）は、女性の男性に対する服従に関わっていると考えます。この服従は、ここではおそらく本質的にモーセ五書を意味している律法の中で、はっきりと教えられています。たとえば創世記3章16節にはこうあります。「あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる。」

パウロはこの節で、女性たちが礼拝の間にお互いにおしゃべりをし、最新のうわさ話を交わすことを禁じているのだ、としばしば主張されます。しかし、そのような解釈は成り立ちません。ここで「語る」（laleo）と訳されている語は、コイネー・ギリシア語では「おしゃべりする」という意味ではありません。同じ語が、同じ章の21節とヘブル人への手紙1章1節で、神について用いられています。それは「権威をもって語る」という意味です。（HJR：？？）

14:35 女性たちはまた、教会の中で公に質問することも許されていません。「しかし、もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。」何人かの女性たちは、質問をすることによって、先の禁止を逃れようとしたのかもしれません。そのような単純な質問によって、ほかの人々を教えることは可能です。ですから、この節はこの抜け穴をもふさいでいるのです。

では、これを未婚の女性ややもめにどのように当てはめなければならないのか、と問うなら、その答えは、聖書は個々のケースをすべて取り上げるのではなく、一般的な原則を示しているだけだ、ということです。夫のいない女性は、自分の父親、兄弟、あるいは教会の長老の一人に尋ねることができます。これを「彼女たちは家で自分の男の人たちに尋ねなさい」と訳すこともできるでしょう。心に留めておくべき基本原則は、「女が教会で語るのは恥ずべきことです」というものです。

14:36 明らかに使徒パウロは、ここでの自分の教えがかなりの反論を呼び起こすことを認識していました。彼はなんと正しかったことでしょう！そのような反論に対処するために、彼は36節で皮肉を込めて問いかけています。「それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ伝わったのですか。」言い換えれば、コリント人たちは、この事柄について使徒よりも多く理解していると主張したかったのでしょうか。そこで彼は、彼らが教会として「神のことば」を書いたのか、それとも彼らだけがそれを受け取ったのか、と彼らに尋ねたので

す。その態度によって、彼らは自分たち自身をこの事柄における権威に据えていました。しかし、どの教会も単独で神のことばを書いたのではなく、どの教会もそれに対する独占権を持っていない、という事実に変わりはありません。

14:37 これまでのすべての指示との関連で、使徒はここで、それらが彼自身の考えや解釈に由来するものではなく、「主の命令」であることを強調しています。そして、主の「預言者」である人、あるいは本当に「霊の人」である人は誰でも、それを認めるでしょう。この節は、パウロの教えのいくつか（特に女性に関する彼の指示）は彼自身の偏見を反映している、と考える人々に対する十分な答えです。これらの指示は、パウロの個人的な見解ではなく、「主の命令」なのです。[4]

アンドレアス・シュタインマイスター（Andreas Steinmeister）

引用元：「Das Schweigen der Frauen. Eine Studie über 1. Korinther 14,34」（「女性の沈黙――コリント人への手紙第一14章34節についての研究」）、www.soundwords.de

6. コリント人への手紙第一14章26節では「兄弟たち」に呼びかけられており、34節では「女たちは黙っていなさい」（コリント第一14:34）と言われています。もしここで「兄弟たち」が「兄弟姉妹たち」を意味しているのなら、それは34節と矛盾することになるでしょう。パウロはどうして、「兄弟たち」と「姉妹たち」に26節の事柄を勧めながら、同時に34節で女たちは集会で黙っているべきだと言い、さらにテモテへの手紙第一2章12節で女たちは教えるべきでないと命じることができるでしょうか。

「女が集会で語るのは恥ずべきことだからです。」ここには、コリント人への手紙第一11章6節と同じ語が用いられています。そこでは、女性が髪を切ったり剃ったりしているのは恥ずべきことだと言われています。多くの女性たちにとって、後者はもう何十年も前から恥ではありません。それは当時の文化的な習慣のことだと教えられてきたからです。それなら、今では女性たちが集会で語ることも恥ではなくなっているとしても、誰が驚くでしょうか。一部の女性たちにとっては、私的な場での祈りや預言の際にも、集まりの際にも、「御使いたちのために」（何らかの文化のためでも、誰か兄弟姉妹たちのためでもなく）頭をおおわないことは、もはや問題にもなっていません。そのことにとっくに決着をつけてしまっているなら、コリント人への手紙第一14章34節の「黙っていなさい」という語がもはや何の意味も持たず、したがって霊的な力も持たなくなっていても、もちろん驚くことはありません。

HJRの論評：アンドレアスはあまりにも早く、突然天に召されました。そのため残念ながら、私はもはや彼に反論することができませんでした――彼がそれで知られていたのと同じ激しさをもって。

ペーター・シュトライテンベルガー（Peter Streitenberger）

ギリシア語多数派本文	訳（シュトライテンベルガーのドイツ語訳より）	注解
14,34 Αἱ γυναῖκες ὑμῶν ἐν ταῖς ἐκκλησίαις σιγάτωσαν· οὐ γὰρ ἐπιτέτραπται αὐταῖς λαλεῖν, ἀλλ᾽ ὑποτάσσεσθαι, καθὼς καὶ ὁ νόμος λέγει.	あなたがたの女たちは集会において黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されておらず、律法も言っているように、従わなければならないからです。	λαλέω（「語る」）には、「言う」とは別の語が用いられています。ですから、問題は女性が「こんにちは」や「アーメン」と言ってよいかどうかではありません。それは、集まりにおける発言という意味で語ること、あるいはパウロがテモテへの手紙第一で明らかにしているように、教えること、祈り、解き明かし、賛美歌の提案、預言（あるいは35節によれば質問すること）といった指導的な発言のことです。これらはすべて、すでに兄弟たちに割り当てられているからです。不定詞 ὑποτάσσεσθαι（「彼女たちは従わなければならない」）は命令法として用いられています。
14,35 Εἰ δέ τι μαθεῖν θέλουσιν, ἐν οἴκῳ τοὺς ἰδίους ἄνδρας ἐπερωτάτωσαν· αἰσχρὸν γάρ ἐστιν γυναικὶ ἐν ἐκκλησίᾳ λαλεῖν.	しかし、もし学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。女たちが集会で語るのは恥ずべきことだからです。	場所を示す ἐν οἴκῳ（「家で、自宅で、家庭で」）は前に置かれており、上の「集会において」との対照をなしています。パウロは、女性たちが語らずに黙っているべきことを、それが恥ずべきことである、つまり不適切であるということによって根拠づけています。なぜなら創造の秩序は、権威の出どころであるかしらとして男性を定めているからです（コリント人への手紙第一11章を参照）。
14,36 Ἢ ἀφ᾽ ὑμῶν ὁ λόγος τοῦ θεοῦ ἐξῆλθεν; Ἢ εἰς ὑμᾶς μόνους κατήντησεν;	それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。	パウロはすべての集会において女性の沈黙を命じました。そこで彼は今、コリント人たちだけが神のことばを伝えたのか、あるいは受け取ったのか、という修辞的な問いを投げかけています。もちろんそうではありません。神のことばはほかのすべての人々にも与えられたのであり、ですから、どの集会もほかの集会と異なる見解を持つことはできないのです。

手紙全体へのリンク：(1) Der erste Korintherbrief Text und Übersetzung mit Kommentar | Peter Streitenberger - Academia.edu

HJRの論評：ペーターは、この関連でよく知られたブレザレンの教えを、それを問い直すことなく主張しています。問い直すべき理由はたくさんあるのですが。古代ギリシア語についての良い、あるいは非常に良い知識だけでは、残念ながら、まだ良い聖書解釈者にはなれません。

すでにギリシア語のテキスト・写本を扱っている人なら、この二つの節が西方系の写本では33節の後ではなく、章の終わりに置かれていることを、読者に黙っているべきではありません。そのことは、後からの、パウロによらない挿入ではないかという疑いを呼び起こします。

アルノ・ホーハーゲ（Arno Hohage）（自由ブレザレン）

以下の二人の著者は、次の本から部分的に引用しています。

Frau sein, Mann sein in der Gemeinde, Brennpunkt Frauenfrage, 2012

c. なぜ黙るのか

まず、創造の秩序が当てはまります。女たちは教会では黙っていなさい（コリント第一14:34）。これは妻たちだけでなく、すべての女性に当てはまります。というのは、「あなたがたの女たち」とは書かれていないからです。いくつかの写本に見られる所有形容詞「あなたがたの」は、本来のものとは見なせず、Textus Receptusが従った付加と見なされます（cf. Metzger, p. 500）。ここで前提とされている創造の秩序は、家族を越えたものであり、根本的に男性と女性の違いを指し示しています。

そのほかに、女性に対する沈黙の命令には、さらに二つの理由があります。それらは強い調子で表現されています。

1. 「彼女は語ることを許されていない」（コリント第一14:34）。受動態は誰が許さないのかを挙げていませんが、より高い権威は何も、とりわけ主は、彼女に語る権限を与えておられません。はっきりとした許可が必要なのです！
2. 「女が教会で語るのは恥ずべきことです」。これは非常に厳しいことばです。それは不名誉、恥、非難されるべきことを表しています……。女性が語ることは嫌悪感を呼び起こします。この判断は厳しく不適切に思えるので、人々はそれを単に無視します。しかし、私たちは神のことばを無視してよいのでしょうか。

コリント人への手紙第一11章を14章と矛盾するものと呼ぶなら、使徒パウロに一貫性のない思考をしていると非難することになります。私たちが神のことばを相手にしているという前提とはまったく関係なく、学識あるラビが数ページのうちにきれいに自己矛盾していると決めつけるのは、ばかげているように思われます。主から委任を受けている書き手の権威（14:37）は、両方の章に等しく当てはまります。ですから、両方の章は矛盾のない意味をなしているのです。実は、古い注解（たとえばツァーン、ホッジ）がすでに解決を示していました。すなわち、11章では私的な場における女性が、14章では教会における女性が語りかけられている、というものです。便宜上の

理由から、今日ではこの見方は放棄されてしまい、人々は今、釈義によって解決しなければならないジレンマの前に立っています。しかし、その結果はしばしば不適切なものです。

パウロはコリント人への手紙第一11章17節になって初めて教会での集まりについて語り始めるのに、時として、この章の前半もそれに属しているかのように扱われています。16節にすでに「教会」という語が出てくるとしても、それはただ、教会に属する「人」は争いを好む者であってはならず、したがって教会の慣習に従うべきだ、ということを示すためにすぎません。

HJRの論評：自由ブレザレンの陣営から、姉妹たちが突然参加してよいことになるとは期待できませんでした。彼らは閉鎖ブレザレンと同じ強さで、絶対的な沈黙の命令を主張しています。

ホーハーゲはこの指示を創造の秩序によって根拠づけていますが、性の違い以外に、その秩序を形づくっているものが何なのかは明らかになりません。しかし、この想定された創造の秩序は、創造全体において当てはまるはずです。それなら、なぜ、男性と女性が集まる日の下のほかの機会について、それに匹敵する指示がないのでしょうか。性の違いそれ自体は、まだ根拠にはなりません。性の違いこそが、神がご自分の教会に贈ろうとしておられる豊かさを形づくっている、と論じることもできるでしょう――そして私の考えでは、それこそが聖書的なのです。

ホーハーゲにとっては、女性の参加についてのはっきりとした許可が必要です。私の考えでは、それは必要ありません。新約聖書全体を背景にすれば、女性が参加することはあまりにも当然のことなので、はっきりとした許可など必要ないのです。

最後に：それは恥ずべきことだ！見てすぐにわかるほど謙遜な態度で、素朴なことばで、贖いについて神に声に出して感謝している一人の姉妹を思い浮かべてみてください。それを恥と呼ぶことには、最大級の疑念を抱かざるをえないはずです。もし本当に沈黙の命令が、したがって集会での祈りの禁止があるとしたら、この命令を一度守らないことは過ちではあるでしょう――しかし決して恥ではありません。

ウルリッヒ・プレッチュ（Ulrich Pletsch）（自由ブレザレン）

コリント人への手紙第一11章5節と14章34-35節の間のいわゆる緊張関係について

パウロのこれらの発言から何を読み取ることができるでしょうか。

1. 彼は明らかに、語ることと従うこととの間に対立を見ています。つまり、彼は、教会で女性が語ることによって、従うという命令が破られると見ているのです。
2. 明らかに、女性は教会で質問したり語ったりすることを許されていません。
3. パウロはここで、女性が教会で語るべきか黙るべきかという問いについて、はっきりと複数の発言をしています。
4. パウロはここで、自分の発言が教会の礼拝に関わるものであることに、疑いの余地を残していません。
5. パウロはここで、教会における女性の沈黙あるいは発言に関して、三つの命令と一つの禁止を定式化しています。

6. 形式的な側面（命令、禁止、語の選択）だけでも、パウロがここで明確な教理的言明を定式化していることがはっきりします。しかしとりわけ内容的な言明が、ここで問題になっているのが、女性は教会で語ってよいのか、それとも黙るべきなのかという問いに関わる教理的言明であることを、はっきりと強調しています。

観察、結論、さらなる問い　観察　1. 女性は教会で語ってよいのか、それとも黙るべきなのかという問いについての教理的言明は、もっぱらコリント人への手紙第一14章に見られるのであって、11章には見られません。

2. パウロはコリント人への手紙第一11章で、女性たちが祈ったり預言したりすることに言及しています。彼女たちがそれを教会でするのかしないのかについては、彼は11章では言及していません。（まさにこのことが、二つのテキストの間の緊張関係の原因であり核心なのです！）3. コリント人への手紙第一14章で、パウロは教会で女性が語ることを禁じ、黙ることを命じています。11章には、これらの禁止や命令を弱めたり、ましてや無効にしたりする発言は見当たりません。

結論

1. コリント人への手紙第一11章でパウロが問題にしているのは、女性が教会で祈るかどうかという問いではまったくありません。彼が問題にしているのは、女性たちが祈ったり預言したりするときに何に注意すべきか、という問いです。それが教会で行われるかどうかは、ここでの彼のテーマではありません。

2. 私たちの教会の集会における女性の参加に関する私たちの問いについての教理的言明は、もっぱらコリント人への手紙第一14章に見られます。

3. 私たちの教会の集会における女性の参加に関する私たちの問いに関しては、コリント人への手紙第一14章が明らかにより明確な聖書箇所です。ですから、11章は14章から説明されるべきであって、その逆ではありません！

4. 14章を優先するどの立場も、それが11章とどう関係するのかを説明しなければならない、という要求は正当ですが、この時点ではまったく問題になりません。上記の問いについての発言という観点から聖書箇所を重みづけるためには、11章が14章からどのように理解されうるのかを説明する必要はありません。ここではまず、14章が私たちの問いについて明らかにより明確で、より重みのある発言をしていることを確認すべきです。そこから実践についてどのような結論が導かれ、場合によってはどのような補助的構成に頼らなければならないかは、この箇所では重要ではありません。この箇所で決まるのは、二つの聖書箇所の発言を、テキストの比較に基づいて重みづけ評価するのか、それとも先入観に基づいてそうするのか、ということです。

さらなる問い

1. コリント人への手紙第一14章34-35節の沈黙の命令、あるいは発言の禁止は、章全体の文脈においてどのように理解されるべきでしょうか。

ここではまず、「条件付きの沈黙」というアプローチが、14章を11章から説明しようとする試みから生じていることを確認しておかなければなりません。しかし、14章のほうがこの問いについてより明確で、より重みのある発言をしているのですから、このアプローチは先入観の産物、あるいは本来のテキストの言明の上に置かれた補助的構成なのです。

2. コリント人への手紙第一14章の沈黙の命令、あるいは発言の禁止は、11章の祈りや預言を含んでいるのでしょうか。

もし14章のほうが重みのある箇所であるなら――そして明らかにそうなのです（！）――、教会として集まることが問題になっている場合には、沈黙の命令、あるいは発言の禁止は、11章の祈りや預言を含んでいなければなりません。

ここでの問いは、14章の沈黙の命令、あるいは発言の禁止が、11章の光の下で限定的に理解されるべきかどうか、ということではありません！14章が11章の光の下で解釈されるのではなく、逆に、11章が14章の光の下で解釈されるべきなのです。

[…] 4. 沈黙の命令と発言の禁止は絶対的なものとして理解されるべきではない、と主張する人は、聖書のテキストを用いて、補助的構成に頼ることなく、次のことを明らかにしなければなりません。

- コリント人への手紙第一11章が、14章と同じように明確かつはっきりと、教会の集会という文脈を扱っていること。
- 11章が、14章と同じように、女性は教会で黙るべきか、それとも語ってよいか、という問いについて教理的言明をしていること。
- 11章が14章の極めて明確な指示を相対化していること、そしてそれがどのようにしてなのか。
- 14章34-35節と14章29節との間に明白な関係があること、つまり沈黙の命令と発言の禁止が、預言の言葉の吟味に関わっていること。
- 女性の沈黙が、28節と30節の場合と同じように「条件付きの沈黙」であること。
- 預言の言葉の吟味が、公の場での話し合いや論評という意味で理解されるべきであること。

そして、その場にいる教会全体が預言の言葉の吟味に参加していること。

- 何かを学びたいと望む女性たちの質問もまた預言の言葉の吟味に関わっていること、そして純粋に理解のための質問がどのようにして預言の言葉の吟味と見なされうるのか。

5. コリント人への手紙第一11章5節の言明は、14章の光の下で解釈されても、その意味が相対化されることも変えられることもありません。女性が祈り預言することは、まったく問題になっていません。もし14章の解釈から、女性は教会の集会では祈ったり預言したりしない、という結論が出てくるとしても、それは11章の言明とまったく矛盾しません。11章の言明は、変わることなくそのまま残ります。

6. しかし、もし14章が11章の光の下で解釈されるなら、14章34-35節の言明はその意味において相対化されなければならなくなります。

C. 結びの要約

1. ――さまざまな先入観の影響をできる限り排除するために――二つの聖書箇所の言明の比較から出発するなら、コリント人への手紙第一14章34-35節こそが、教会における女性の発言あるいは沈黙というテーマについて明示的に教理的言明をしているテキストである、という結論に必然的に至ります。

2. テキストの比較に基づけば、コリント人への手紙第一11章は14章の光の下で解釈されなければならないことは明らかです。つまり、教会における女性の奉仕に関する問いの解明は、14章の解釈から始まるのです。

3. コリント人への手紙第一14章の解釈から、女性は教会で黙っているべきであり、語るべきではない、という明白な指示が出てきます。沈黙の命令と発言の禁止は、教会全体の前で個人が行うあらゆる言葉による表明を含んでいます。

ウルリッヒ・プレッチュ、1956年生まれ、既婚、娘一人と孫二人。キリスト教の小学校の校長であり、あるブレザレンの教会の長老の一人。

HJRの論評：プレッチュの論文は、私が知る限り、絶対的な沈黙の命令を支持するドイツ語の論証の中で最も力強いものです。熱を込めて、多くの論拠をもって、沈黙の命令が擁護されています。二つのテキストの間の緊張関係――私ならそれを矛盾と呼ぶでしょう――は、次のように解消されます。手紙の中で後に来るテキストに解釈の主導権が与えられるのです。その根拠は、より大きな明確さです。もし私たちがこの二つのテキストしか持っていなかったなら、この論証に従うこともできたでしょう。しかし、ここには致命的な誤りがあります。34節と35節のより大きな明確さは、14章の残りの部分を完全に度外視する場合にのみ生じるのです――そして、新約聖書のほかのすべてのテキスト、つまり、私の想定では、姉妹たちが声に出して参加することを暗黙のうちに前提しているに違いないテキストをも、度外視する場合にのみ。

教父たち

チャールズ・J・エリコット（Charles J. Ellicott）

C・J・エリコットはこのテキストについて次のように指摘しています。

34節。αἱ γυναῖκες κ.τ.λ.］女たちは教会において黙っているべきである。すなわち、この章が唯一扱っている、教会のより大きな公の集会においてである。4、5、12、16、19、23、26節を参照し、また11章5節への注を見よ。使徒はここで特に公の教える職務のことを考えていたのであろう。テモテ第一2:12、διδάσκειν δὲ γυναικὶ οὐκ ἐπιτρέπω を参照。この規則は初代教会において注意深く守られた。Const. Apost. III. 6、および Conc. Carthag. IV. 99 を見よ。ユダヤ人の間では、女性が公に律法を朗読することは会堂にとって恥を意味した。Lightfoot, Hor. in h. l., Schoettg. Hor. p. 658 を見よ。

使徒憲章（第3巻）

女性は教えるべきではないこと、それはふさわしくないからであること。また、どのような女性たちが私たちの主に従ったか。

VI. 私たちは、私たちの女たちが教会で教えることを許さず（コリント第一14:34）、ただ祈り、教える者たちに聞くことだけを許す。なぜなら、私たちの師であり主であるイエスご自身が、人々と諸国民を弟子とするために私たち十二人を遣わされたとき、説教させるために女性をどこにも遣わされなかったからである。そのような女性たちに事欠いていたわけではなかったにもかかわらず、である。というのは、私たちとともに、私たちの主の母とその姉妹たち、またマグダラのマリア、ヤコブの母マリア、ラザロの姉妹マルタとマリア、サロメ、そのほか何人かの女性たちがいたからである。もし女性たちが教えることが必要であったなら、主ご自身が前もって彼女たちに、私たちとともに民を教えるよう命じられたであろう。なぜなら、女のかしらが男であるなら（コリント第一11:3）、からだの残りの部分がかしらを支配するのは道理にかなわないからである。

シュトラック（Strack）とビラーベック（Billerbeck）

14, 34 A：女たちは集会において黙っていなさい。

古代の会堂は、礼拝の集会において女性が公に語ることを、原則的にではないにせよ、事実上禁じていた。彼女たちは、耳を傾け、タルグムの朗読から戒めを学ぶために礼拝に参加すべきであった。[5]

14, 34 B：律法も言っているように、従いなさい。

おそらく使徒はこのことばを語るにあたって、創世記3:16を念頭に置いていたのであろう。しかし、νόμος という表現を無理に押し詰めてはならない。伝統的な慣習もまたトーラーと見なされた。たとえばRH 19a参照：伝承のことばはトーラーのことばのようである。

14, 35 A：もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。

女性にトーラーを教えるべきかどうかという問題については、一致した見解はなかった。一般的な確信はおそらく、少なくとも父親には娘たちに聖書の教えを受けさせる義務はない、という方向に傾いていた。

14, 35 B：女が集会で語るのは恥ずべきことである。シェムエル（†254）のことばを参照：女の声は恥ずべきもの（みだらなもの）である **קול באשה ערוה**。Berakh 24a、マタイ5:28の項、299頁を見よ。[6]

プロテスタント世界の解釈と説明

キャサリン・C・ブッシュネル（Katharine C. Bushnell）

キャサリン・C・ブッシュネル：『Wach auf, Eva!』（『目覚めよ、エバ！』）（初版1908年、ドイツ語版2020年）

女性の完全な平等という、神の本来の、そして変わることのない意図についての聖書の真理を知りなさい

節ごとの抜粋

さらに彼は「彼女たちには許されていない」という言い回しを用いています。これは明らかに、パウロより前にほかの人々がこの事柄を禁じていたことを意味しています。しかし、まさにこのパウロのことばを除いて、聖書のどこにもそのような禁止の痕跡は見当たりません。そこで重要な問いが生じます。どこで、誰によって、それは許されていなかったのでしょうか。創世記3章16節は、脚注に挙げられている「律法」への唯一の指示ですが、それは二つの理由から当てはまりません。(1) もし創世記3章16節が「あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる」という意味であるなら、夫たちが妻たちに公の場で語るよう命じた場合、妻たちは語らなければならないことになります。(2) しかし、コリントの教会員のうち、創世記3章16節のこの読み方を知っていた人は、いたとしてもごくわずかだったでしょう。彼らは七十人訳聖書を用いていたからです。パウロはこの手紙ではほとんどもっぱらこの翻訳を引用しています。旧約聖書への十七の言及のうち、彼がはっきりとヘブル語本文を引用しているのは一度だけです。ですから、コリント人たちはこの節を次のように読んだでしょう。「あなたは夫のほうへ向き直り、彼はあなたを支配する。」

次に、自分自身に問うてみてください。もしパウロのこのたった一つの発言が、女性を黙らせるための聖書的な「律法」として打ち立てられるべきだというのなら、女性たちに口を開くよう命じている旧約聖書のほかの百一もの「律法」はどうなるのでしょうか。たとえば、「主に贖われた者たちはこう言え」、「神の聖所で神をほめたたえよ」（詩篇だけでもおよそ百回繰り返されています）、「全地よ、主に向かって喜び叫べ。喜び歌い、大声で叫べ」、「そのみわざを、もろもろの民の中に知らせよ」、「息のあるものはみな、主をほめたたえよ」、「そのすべての奇しいみわざを語れ」といったものです。というのも、男性たちが、旧約聖書のこれらすべての勧めや呼びかけは自分たちだけに向けられたものだったと、説得力をもって主張することは、まったく不可能だからです。何千年もの間、それはそのように理解されたことも教えられたこともありませんでした。ある宗教教師たちが、聖書のたった一つの文について、ほかの百や二百の聖書の言明を（その一つの文をほかの文と調和させようとする試みを一切せずに）疑問視するような解釈に、これほど過度の熱意を注いでいることは、彼らの解釈をあまりに性急に受け入れないよう、私たちに警告するはずです。たとえば、たった一つの文を文字どおりに、普遍的に適用することをここで主張している人々が、なぜ、未婚の女性は未婚のままでいるのがよいとパウロが言っている箇所（コリント第一7:8、34-35）では、パウロの権威を文字どおりに、普遍的に適用することを同じように主張してこなかったのでしょうか。いいえ、とんでもない！通常、それは、結婚と家庭の務めこ

そが女性にとって唯一無二の召命だと主張しているのと同じ人々なのです。なぜ彼らは、「全地よ、主の御前に静まれ」（ハバクク2:20）という文が、女性たちの口だけでなく、教会全体の口を閉ざすべきだとは言わないのでしょうか。

パウロはここで「許されていない」ということばによって、聖書の中ではなく、聖書の外にある規則に言及しています。問題は、この沈黙の規則をどこに見いだすべきか、ということです。ドイツの偉大な辞書編纂者シュロイスナー（Schleusner）は、そのギリシア語・ラテン語辞典の中で、「律法も言っているように」という表現はユダヤ人の口伝律法を指している、と説明しています。彼のことばはこうです。「ユダヤ人の口伝の律法、あるいはユダヤの伝統……旧約聖書には、この事柄についての命令は存在しない。」そして彼は、「女性が会堂で語ることはユダヤの伝統によって禁じられていた」というフィトリンガ（Vitringa）のことばを引用しています。しかし、よく考えてみてください！使徒パウロがユダヤ人の伝統を引用し、それを、教会内の論争の的となっている事柄における最終的な権威である「律法」と呼ぶなどということは、ありそうにありません。彼は、主イエス・キリストと同じように、まさにそうしたユダヤ人の「伝統」あるいは言い伝えと戦うことに、そのエネルギーの大部分を費やしました。パウロは、「ユダヤ人の作り話や、真理から離れた人々の戒めに心を奪われないように」（テトス1:14）と戒めています。いいえ、使徒パウロはここで、コリントの教会のユダヤ主義者たちが教えていることを引用しているのです。彼らは、ユダヤの律法がそう教えているから女性は「黙らなければならない」と言っていたのです。

旧約聖書とは対照的に、タルムードが女性を黙らせたことは疑いの余地がありません。「会衆への敬意から、女性は自分で律法を朗読すべきではない。」「女性が男性の間で自分の声を聞かせるのは恥である。」「女性の声は汚れた裸である。」これらは、そのことわざの多くのうちのいくつかです。質問をすることについて言えば、ある裕福なユダヤ人女性が、かつて偉大なラビ・エリエゼルに思い切ってこう尋ねました。「金の子牛の罪は一つだけだったのに、なぜ三重の死によって罰せられなければならなかったのですか。」この質問は彼の知識の蓄えを超えていたのだろうと私は想像します。というのも、彼はこう答えたからです。「女は自分の糸巻き棒のこと以上に賢くあるべきではない。」ある人ヒルカノスは、脇でラビ・エレアザルに、こうしてとがめられたご婦人が仕返しに十分の一献金を差し控えるかもしれない、それはかなりの額にのぼるのだ、と注意を促しました。しかしラビ・エレアザルはこう答えました。「律法のことばは、女に委ねるくらいなら、むしろ焼かれてしまえ。」この文は、後の世代のユダヤ人の間で一種の律法の格言として受け継がれました。

繰り返します。私は、使徒がコリント人への手紙第一14章34節と35節で、こう書いたときに自分自身の見解を表明していたのではない、と信じざるをえません。「女たちは教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。律法も言っているように、従いなさい。もし何かを学びたければ、家で自分の夫に尋ねなさい。女が教会で語るのは恥ずべきことだからです。」これは、パウロに報告されたコリントのユダヤ主義者たちのことばであり、パウロはそれを引用して、「それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ伝わったのですか」ということばと、章の終わりに続くすべてのことばで答えているのだ、と私は信じています。

私たちのケースは、これらのテストにすべて合格します。この指針に従い、ラムゼイ（Ramsay）教授の指針の三つの点を当てはめてみましょう。(1)「パウロが彼らの知識をほのめかすときはいつでも。」――パウロは37節で彼らの知識をほのめかしています。そして38節で、「しかし、もしだれかがこれを認めないなら、その人も神に認められません」と宣言しています。(2)「ある言明が直前の文脈とはっきり対照をなしているとき。」――34、35節は31節とも39節ともはっきり対照をなしています。というのは、「兄弟たち」という語がここでパウロによって男性にだけ用いられていると主張することは、とうてい成り立たないからです。(3)「ある言明がパウロのよく知られた見解とはっきり対照をなしているとき。」――もし使徒が女性たちに「黙る」よう命じているのなら、それは、女性のベールについて11章で彼が述べていることから推論しなければならないことと、真っ向から対立することになるでしょう。

ユダヤ主義者たちのこうしたあら探しのすべてと、ユダヤ人の口伝の言い伝えを引用することによって自分たちの論拠を補強しようとする彼らの努力に対するパウロの答えは、こうです。「それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ伝わったのですか。」それから彼は37-40節で、このテーマについての彼自身の考え、すなわち聖霊の考えを表明しています。

それから使徒はこう宣言します。「もしだれかが、自分は預言者である、あるいは霊の賜物を受けた者であると思うなら、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。」彼はここで、「主の命令」を、ユダヤ人の口伝律法が教えていた「人間の戒め」と対比させています。言い換えれば、パウロは、本当の預言者あるいは霊的な人なら、この事柄についての彼の規定は聖書にかなっているが、ユダヤ人のラビたちの規定はそうではない、ということに気づくはずだ、と主張しているのです。

マシュー・ヘンリー（Matthew Henry）

34-35節

ここで使徒は、1. 女性たちに公の集会において黙っているように命じています。それも、教会の中で自分自身が教えを受けるために質問することさえ許されず、家で夫に尋ねなければならないほどにです。彼女たちは、まったく静かに、従順に学ぶべきです。しかし、と使徒は言います、私は女性が教えることを許さない、と（テモテ第一2:11-12）。確かに、女性たちが時には集会で祈ったり預言したりしていたかのような示唆があります（11章5節）。使徒はその箇所で、それを単純に非難しているのではなく、彼女たちのやり方、つまり頭をおおわずに祈ったり預言したりすることを非難しています。それは、その時代、その国においては、性の区別を廃し、女性を男性と同じ段階に置くことだったのです。しかしここでは、彼は女性たちのあらゆる公の場への登場を禁じているように見えます。女性たちは教会の中で語ることを許されていません（34節）。祈ることにおいても預言することにおいてもです。文脈は明らかに後者を含んでいるように思われます。それも、この章で理解されている限定的な意味において、すなわち霊感による説教や聖書の解き明かしという意味においてです。そして実際、女性がこの意味で預言することは教えることを意味しますが、それは彼女の従属の状態にあまりふさわしくありません。ほかの人々を教える者は、その点において彼らに対する優位性を持ちますが、その優位性は女に男に対して許されてお

らず、したがって彼女は教会で教えることもできません。私は彼女たちが教えることを許さない、と。しかし、祈ることや霊感による歌を口にすることは教えることではありません。そして、教会のその時代には、この種の霊の賜物を持つ女性たちがおり（使徒21:9を参照）、集会の中でこの促しの下にありえたのですから、彼女たちはそれをまったく抑えつけなければならないのでしょうか。あるいは、決して公に用いてはならないのなら、なぜ彼女たちはこの賜物を持っているのでしょうか。こうした理由から、ある人々は、これらの一般的な禁止は通常の場合についてだけ理解されるべきであり、女性たちが神の影響の下にあり、それが知られているような特別な場合には、彼女たちに発言の自由が与えられてよい、と考えています。通常、彼女たちは教えるべきではなく、また教会の中で議論したり質問したりすべきでもなく、そこでは黙って学び、困難が生じたときには家で自分の夫に尋ねるべきでした。注意せよ：従属のうちに学ぶことが妻の義務であるように、妻を教えることができることによって自分の優位性を保つことは夫の義務です。家で夫に尋ねることが妻の義務であるなら、少なくとも妻の質問に答えられるよう努めることは夫の関心事であり義務です。妻が黙っているべき教会で語ることが妻にとって恥であるなら、夫が語るべきときに黙っていること、そして妻が家で尋ねるときに答えられないことは、夫にとって恥です。2. ここには、この命令の理由が示されています。妻たちが従順であるべきことは神の律法であり命令です（34節）。彼女たちは男に従属しており、立場の転換を思い上がって求めているように見えることを何であれ行うのは、彼女たちにとって恥です。公の場で語ることは、少なくともその時代、その民の間では、そのように見えたようです。公に教えることは、なおさらそうでした。ですから使徒は、女性が教会の中で、集会の中で語ることは恥である、と結論づけています。恥とは、何かふさわしくないことをしてしまったことについての、心の不快な反省です。そして、女性が自分の地位を捨て、自分の性の従属を放棄し、あるいは一般的な見方によればそのように見え、そう思われるような何かをすること以上に、ふさわしくないことがあるでしょうか。注意せよ：私たちの心とふるまいは、私たちの身分にふさわしくあるべきです。神が設けられた自然の区別に、私たちは注意を払うべきです。神がほかの人々の下に置かれた人々は、自分を同じ段階に置いたり、優位性を僭称したりすべきではありません。女は男に従属させられたのであり、彼女は自分の場所を保ち、それに満足すべきです。この理由から、女性たちは教会で黙っていなければならず、教師の地位にのし上がってはなりません。なぜなら、それは男性に対する優位性の僭称となるからです。[7]

HJRの論評：教えることが優位性を含んでいるというのは奇妙なことで、私はそれを聖書の中に見いだしません。これは、このテキストを説明するために、人々がどれほどあらゆる論拠を持ち出すかを示す、もう一つの例です。教えることは、神がほかの人々の益のためにその人に与えられた、それにふさわしい賜物をもって仕えることであって、自己目的ではありません。

ウォーレン・W・ウィアズビー（Warren W. Wiersbe）

第二に、女性たちは集会で語るべきではありませんでした（コリント第一14:34-35）。パウロはすでに女性たちに、祈ることと預言することを認めていました（コリント第一11:5）。ですから、この指示は、預言のメッセージを吟味するという直接の文脈に関わるものに違いありません。初代

教会では、教理の純粋さに対する主な責任は男性たち、とりわけ長老たちの肩にかかっていたようです（テモテ第一2:11-12）。

この禁止の文脈は、集会の中の女性たちの何人かが、質問をし、もしかすると争いまで引き起こして、問題を生じさせていたことを示しています。パウロは既婚の女性たちに、自分の夫に従い、自分の質問には家で答えてもらうよう思い起こさせました。（未婚の女性たちは、長老たちか、自分の家族の中のほかの男性たちに相談することができたと私たちは考えます。）残念なことに、今日あまりにも多くのキリスト者の家庭で、夫の質問に答えなければならないのは妻のほうです。妻のほうが神のことばについてよく教えられているからです。

パウロはコリント人への手紙第一14章34節で、どの「律法」に言及していたのでしょうか。おそらく創世記3章16節です。（律法という語は、旧約聖書の諸文書、とりわけ最初の五書の同義語でした。）コリント人への手紙第一11章で、パウロは教会における男性と女性の関係を論じていたので、ここで詳しく述べる必要はなかったのです。

フレデリック・ゴデ（Frédéric Godet）

使徒は、公の場で語ることを、聞いている集会に対して権威を行使する行為と見なしています（テモテ第一2:12参照）。そして、男性に対して権威をふるう態度は従順の態度と対立するので［……］、彼は、女性が公の場で語ることは、律法に表されている神のみこころによって与えられた立場と矛盾する、という結論を引き出します。……礼拝における女性たちの沈黙は、男性との関係において彼女たちに課されている、従うという一般的な条件の一つの表現形式にすぎません。……パウロは、女性が公の場で語ることの中に、自然によって、また創造者の命令によって彼女に割り当てられた態度に反する行動を見ています（11:1-16参照）。……女性たちは、彼女たち一人ひとりを自分の夫と結びつけている依存のきずなを損なうようなことを、何もすべきではありません。

（ドイツ語訳：トーマス・イェッテル〔Thomas Jettel〕）

アドルフ・シュラッター（Adolf Schlatter）

14:34-35：女たちは教会の集会において黙っていなさい。彼女たちには語ることが許されておらず、律法も言っているように、服従すべきだからです。もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。女が集会で語るのは恥ずべきことだからです。当時のキリスト者の集会の特徴であった、大きく、確信に満ちた自由――それによって教会の中にあるすべての力が集会のために用いられていました――のもとで、この自由が女性にも男性と同じように当てはまるのか、という問いも生じました。この点でも、ほかの多くの点と同じように、教会はまず自分の道を探し求め、何を自分たちの慣習とすべきかを自ら見分けなければなりませんでした。パウロが11章で、祈りのときの女性のふるまいについて述べたことから、私たちはすでに、彼が両性の平等に反対していることを知っています。自然によって両者の間に設けられた境界は、キリスト者の間で侵されずに保たれるべきです。それは、集会において女性に発言が許されないことによって達成されます。11章では、パウロはまだこのことを述べていませんでした。そこでは、集会で女性たちに与えられる権利についてではなく、祈りや預言のときに彼女たちが神の前でどのようにふるまう

かについて語っていたからです。預言することは必ずしも集会に結びついてはいませんでしたし、祈りのときに女性がどのようにふるまうかは、まったくそれだけで一つの事柄であって、彼女も語るべきかどうかという問いとは重なりません。パウロは、どの女性も預言者としての召命を受けることはできない、とは言いませんでした。神の特別な委託によって神のことばを語るべきなら、彼女はそれを公の演説とは別の仕方で行うこともできます。しかしパウロが11章で、女性はその最も高い霊的な能力においても、祈るときや預言するときにも、女性として身を処さなければならず、そのため決して男性と同じになることはできず、男性との結びつきを脱ぎ捨てたり忘れたりすることも決してできない、と述べた以上、彼が、女性が集会で男性たちの前で、しかも男性たちに代わって語ろうと望むことを、女性にとって恥ずべきことと感じたことも、私たちは容易に理解できます。そうすることによっても、彼女はまるで自分が女性ではなく男性であるかのようにふるまうことになるのです。知識を求める彼女の願いに対しては、パウロは喜んであらゆる助けを与えます。しかし、彼女が神のことばについての明確で深い知識に至るためには、集会で公に質問をしたり演説をしたりすることが唯一の手段ではありません。むしろ彼女は、説明を求めている事柄について自分の夫と話し合うべきです。夫こそ、彼女の内面生活のあらゆる関心事において、神を知りたいという願いにおいても、彼女を助けるべき最も身近な人なのです。

14:36：それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。 女性の問題においても、一つの教会が勝手に自分の正しいと思うことを行うのではなく、それぞれの教会がほかの教会との一致を保ち、どこでも通用するキリスト者共通の慣習の形成に協力することが重要でした。もしコリント人たちが、ほかのすべての教会がそこから福音を受け取った最初の教会であるなら、あるいは唯一の教会であるなら、ほかの教会への配慮を拒むことにもいくらかもっともらしさがあったかもしれません。しかし今や、彼らは最初の教会でも唯一の教会でもないのですから、ほかの教会が正しく、ふさわしいこととして守っていることは、彼らにも当てはまるのです。[8]

ウィリアム・バークレー（William Barclay）

おそらくパウロが何よりも念頭に置いていたのは、コリントのゆるんだ道徳状態であり、生まれたばかりの教会に、不道徳のほんのかすかな疑いさえかけられるようなことは、絶対に何一つしてはならない、という感覚でした。これらのことばを文脈から引き離して、教会のための一般的な規則にしてしまうのは、確かに大きな誤りでしょう。

パウロは、ある種の厳しさをもって語り続けます。彼は、人が霊的な賜物を持っていたとしても、権威に反抗する権利はない、と確信しています。彼は、自分が与えた助言と自分が定めた規則がイエス・キリストとその御霊から出たものであることを自覚しており、もし人がそれを理解することを拒むなら、その人は自ら選んだ無知のうちにとどまるほかない、と言うのです。

レオン・モリス（Leon Morris）

Morris, L., 1 Corinthians: an introduction and commentary, VII, Tyndale New Testament Commentaries

34-35節。もし「聖徒たちのすべての教会でそうであるように」（4:17参照）がこの節に属するなら、パウロはコリント人たちに、認められているキリスト者の慣行に合わせるよう求めていることになります。もし女性たちが教師の役割を引き受けていたなら、キリスト教はたいていの人々の目に信用を失っていたでしょう。ギリシア人の間では、女性たちは公の場で何かを言うことさえ禁じられていました。プルタルコス（Plutarch）は、徳のある女性は「慎み深く、外部の人々の前で何かを言うことを控えるべきである」と言っています（『花嫁と花婿への助言』31）。さらに、「女性は夫と、あるいは夫を通して語るべきである」とも言っています（同書32）。パウロは彼女たちに慣習を守るよう求めています。しかし、彼はそれ以上のことをしています。彼は律法を指し示して、彼女たちが従うべきであることを思い起こさせています（彼は「自分の夫に」とは付け加えていません。彼が語っているのは一般的な立場です。エペソ5:21参照）。たいていの人は、彼が創世記3章16節を考えていると見ています（もっとも、創世記1章26節以下や2章21節以下を考えている可能性もあります）。教会における女性たちの沈黙は、いわば一つの難問です。パウロは彼女たちが祈ることや預言することを認めているのですから（11:5）、語ることに反対する規則は絶対的なものではありません（使徒2:18以下、21:9参照）。モファット（Moffatt）は、パウロが「敬虔な女性に対して、公の礼拝においてさえ、初代教会の非常に多くの女性たちが持っていた預言の賜物を用いることを決して禁じなかった」という見解を取っています。彼はこの禁止を、「礼拝中に預言者や教師によって語られたことについての議論や解釈に加わる女性たち」に関わるものと理解しています（グルーデム〔Grudem〕、249-251頁も本質的に同意しており、スロール〔Thrall〕その他も同様です）。エリング（Héring）は、「説教する女性……と、単に教会の普通の一員として礼拝に出席している女性との間の明確な区別」を見いだしています。G・デリング（G. Delling）は、ここに「わがままな発言を防ぐこと」を見ています（TDNT, viii, 43頁）。カルヴァン（Calvin）は、女性は公の場で語ることはできても、正規の礼拝で語ってはならない、とパウロを理解しました。私たちは、1世紀の女性たちが教育を受けていなかったことを考慮しなければなりません。ユダヤ人は女性に教えることを罪と見なしており、ほかの場所でも事情は大差ありませんでした。コリントの女性たちは教会で黙っているべきでした。たとえそれが、彼女たちには意味のあることをほとんど、あるいはまったく言えなかったであろうから、という理由だけだったとしてもです。キリスト教が最初から、女性も男性と同じように自由に学ぶことを前提にしていたことは、本来気づかれるべきほどには注目されていません（ルカ10:39-42参照）。パウロがここで問題にしているのは、女性たちがどのような仕方で学ぶべきか、ということです。彼はそのことを論証してはいません。それを当然のこととして受け入れているのです。彼はただ、彼女たちは自分の質問を家で夫に尋ねるべきであり、集会を乱してはならない、と言っているだけです。そうすることは礼儀に反するでしょう。それは恥ずべきこと（11:6と同じ語）であり、ブルトマン（Bultmann）はそれを「人々の判断によれば恥ずべきこと」と理解しています（TDNT, i, 190頁）。

36節。これは、この慣行がコリントで実際に行われていたことを示しているように思われます。パウロは一度ならず、コリント人たちの高慢について嘆く機会がありました。明らかに彼らは、キリスト教の事柄についての自分たち自身の理解によってのみ正当化される、新しい道を自由に歩んでよいと感じていました。そのような態度を前にして、パウロは皮肉を込めて、神のことば

はその地上での起源をコリント人たちのもとに持っているのか、それとも彼らのところにだけ来たのか、と問うています。彼らは、自分たちだけがキリスト教的なことを知っていると思ってはなりません。彼らは「聖徒たちのすべての教会」の慣習と考え方に注意を払わなければならないのです（33節）。[9]

ベン・ウィザリントン三世（Ben Witherington III）

Conflict and Community in Corinth: A Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians

預言を吟味している間に、何人かの女性たち、おそらく既婚の女性たちが――彼女たちはもしかすると自身も女預言者であり、したがって語られたことを吟味する権利を持っていたのかもしれません――質問をし、それもおそらくふさわしくない質問をし、礼拝が乱されたのです。パウロは34節以下で、キリスト者の礼拝を質疑応答の場に変えてしまわないよう戒めています。先に論じた異教の預言のことを考えると、これらの女性たちは、キリスト者の預言者や女預言者が、純粋に個人的な事柄についての質問も含めて、質問に応じてだけ預言したデルポイの神託と似たように機能すると考えていた可能性が非常に高いのです。パウロは、キリスト者の預言は違うと論じています。預言者と女預言者は、人間が事柄を促したり誘い出したりすることなく、聖霊の霊感に応えて語るのです。そこでパウロは、そのような質問を別の場所、すなわち家庭に限定します。もしかすると彼は、尋ねられるべき夫あるいは男性が、預言者であったか、少なくともそのような質問に、より適切な時に答えることのできる人であったことを示唆しているのかもしれません。

キーナー（Keener）が、ここで問題になっているのは教育上の問題だと言うとき、彼は正しいのかもしれません。質問をしていた人々は、キリスト者の礼拝において何がふさわしく何がふさわしくないかを知るほどには、まだキリストの学校で十分に教育されていなかったのです。パウロは彼女たちの学ぶ権利を確認しつつ、別の場を指し示しています。いずれにせよ、パウロは特権の乱用を正しているのであって、彼がすでに11章で認めていた、集会で語るという女性の権利を取り消しているのではありません。

クレイグ・L・ブロンバーグ（Craig L. Blomberg）

The NIV Application Commentary: From Biblical Text … to Contemporary Life

11章2-16節と同じように、パウロが黙らせている女性たちは、妻たちでしかありえません。そうであれば、なぜ彼女たちが教会の預言を公に問いただすことを許されず、家で「自分の夫」に相談しなければならないのか（35節、NIVのように、確かに夫への言及です）が説明できるでしょう。そうでなければ、彼女たちは教会で、神によって定められた夫への従属に反するような仕方で、自分の夫に挑みかかるかもしれないのです（34節）。「律法」は、女性たちに公の礼拝で黙っているよう定めている旧約聖書の特定の箇所を指すことはできません。そのような箇所は存在しないからです。おそらくそれは創世記3章16節を指しているのでもないでしょう。パウロはほかのどの箇所でも、堕落の結果を、望ましいキリスト者のふるまいの根拠として挙げていないからです。むしろ彼はおそらく、創世記2章における創造の秩序と目的を暗示しているのでしょう。ちょうど11章8-9節で、女性たちが自分のかしらに敬意を払うことに関してそうしたようにです。

ロイ・E・チャンパ（Roy E. Ciampa）とブライアン・S・ロズナー（Brian S. Rosner）（G・K・ビール〔G. K. Beale〕／D・A・カーソン〔D. A. Carson〕編）

Commentary on the New Testament use of the Old Testament

『新約聖書における旧約聖書の用法注解』

14:33-35 パウロは、女性たち（あるいは妻たち）は教会の集会の間、黙っているべきだと言います。彼女たちは語ることを許されておらず、「律法も言っているように」従うべきだというのです（本文上の問題については、Niccum 1997; Thiselton 2000: 1148-50を参照）。パウロは、女性がまったく語ってはならない、という意味で言っているはずはありません。11章で、礼拝において祈り、預言する彼女たちの権限を論じているからです（沈黙の種類が文脈に依存しているであろうことの根拠については、Grudem 1982: 242-44を参照）。おそらく彼が意味しているのは、女性たちはほかの人々の預言のメッセージの判断・評価に加わるべきではない、ということ（Grudem 1982; Carson 1987: 129〔14:29参照〕がそう見ています。あるいは、特に自分の夫が語ったメッセージについてでしょうか？〔14:35参照〕）か、あるいは、集会を乱すおしゃべりやふさわしくない会話を控えなければならない、ということ（Paige 2002がそう見ています）でしょう。もしかすると特に、ほかの男性たちとの会話のことかもしれません（14:35「自分の夫に尋ねなさい〔tous idious andras〕」参照）。

パウロが「律法」の教えに言及しているのは、おそらく、男性と女性の関係における秩序と品位にとっての意味合いを含んだ、創世記の創造物語を念頭に置いているのでしょう（Thiselton 2000: 1153-54; Bruce 1980: 136; Carson 1987: 129; Keener 1992: 86-87を参照。また、上記のコリント第一11:2-16についての注解も参照）。パウロは創世記3章16節と、夫が妻を支配するという、そこでの妻に対する言明を暗示している、と考える人々もいます（4Q416 2 IV, 1-8参照）。しかし、このテキストで問題になっているのは、堕落ののろいから生じる支配です（ただしGrudem [1982: 253-54]を参照。彼は、出典は創世記2章18-23節と結びついた創世記3章16節だと考えています）。多くの人は、このテキストを、女性たちが（当時も今も）「男性に対する、教会によって認められた教える権威」を得ることを禁じるものと理解しています（たとえばCarson 1987: 130）。別の人々は、パウロがこれによって言おうとしているのは、礼拝の場において敬意と秩序を保つこと（ここでは特に、女性たちが自分の夫に対して払う敬意）がいかに重要であるかを聖書が教えている、ということだが、この原則は、夫と妻に対する社会的期待がパウロの世界のそれとはっきり異なる文化においては、まったく違った仕方で適用されうる、と考えています。[10]

アンソニー・C・シセルトン（Anthony C. Thiselton）

The First Epistle to the Corinthians: A Commentary on the Greek Text

33b-34節 翻訳について判断を下すことは、とてつもなく難しくなります。なぜならそれは、コリントの読者たちが σ ι γ ά τ ω σ α ν（彼女たちは黙っていなさい。静かにしていなさい。話すのをやめなさい。口をはさんではならない）や λ α λ εῖ ν（語る、今述べたような仕方で語る、彼女たちがしているような仕方で語る）といった語を、著者と受取人の双方に知られていた状況の文脈に沿って解釈し理解するだろう、というパウロの前提と切り離せないほど結びついている

からです。ここでは、語彙上の語の選択だけに基づいた「抽象化された」訳出は、実際に文脈上の理解に反してしまうかもしれません。

多くの人は、34-35節はコリントのスローガン、あるいはコリントの神学の一片であり、パウロはそれを引用したうえで退けているのだと論じています。そのような見解は突飛なものではありません。パウロは6章12節、7章1節、10章23節で、そしておそらくほかの箇所でも（たとえば8章1-6節で）、まさにそうしているように思われるからです。

パウロは、自分が退けるコリントの見解を引用しているのでしょうか。

D・W・オーデル＝スコット（D. W. Odell-Scott）は、1983年の論文においても、1987年のジェローム・マーフィー＝オコナー（Jerome Murphy-O'Connor）へのさらなる応答においても、おそらく最もこの見解と結びつけられている人物です。しかし、マヌス（Manus）、フラナガン（Flanagan）とスナイダー（Snyder）、そしてアリソン（Allison）も、この見解のさまざまな変形を提示しています（下記参照）。オーデル＝スコットは、36節の冒頭にある鍵となる不変化詞ἢ（「それとも」）の中に、コリントのあるグループが34-35節のことばで表明している保守的で家父長的な支配に対する、決定的な修辞的反論を見ています。「それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか」（36節）。オーデル＝スコットによれば、これは34-35節に対する強い反駁と理解することができ、したがってこのテキストは、公の集会で語る女性たちの権限を力強く支持していることになります。

(d) 私たちはウィザリントンとともに、ここで問題にされている「語ること」は、預言者たちのことばを吟味あるいは評価する活動を指していると考えます。とりわけ、預言者の神学、あるいはその生活ぶりについてさえ、公の場で鋭い質問をすることによってです。このことは、妻たちが、預言のメッセージを告げているという主張の真正性を支えたり損なったりする発言やふるまいについて、自分の夫を問い詰める場合には、特に微妙で問題の多いものとなったでしょう。そしてそれは、なぜパウロがある種の質問を家庭のために取っておくのかを容易に説明するでしょう。その場合、女性たちは、(i) 公の場で自分の夫を裁く者としてふるまうことになり、(ii) 礼拝を、もしかすると私的な関心を伴う長い討論の場に変えてしまう危険を冒し、(iii) 会衆が互いに熱心に話しかけ合う代わりに、静かに神に聞くべきであるという、抑制され控えめな発言の倫理に逆らい、そして (iv) 神の御霊の創造的な働きに先立っていた混乱に対して、創造と世界における神の働きの秩序に対する畏敬の感覚を乱すことになるでしょう。

ポール・エリス（Paul Ellis）

『沈黙の女王』（Kindleの位置No. 1319-1323）

10. 女性は教会で黙っているべきでしょうか。

私は、女性たちが静かにしている教会を想像してみます。彼女たちは歌いません。聖書を朗読しません。公の祈りにも加わりません。友人たちにあいさつもしませんし、隣の人のほうを向いて「こんにちは」と言うこともしません。牧師が「アーメンをもらえますか」と尋ねても、彼女たちは応えません。その代わりに、黙ったままでいるのです。私はそのような教会を一つも知りま

せん。それなのに、これが使徒パウロの理想であるように見えます。彼は「女たちは教会で黙っていなさい」と言ったのですから。

ギリシア人は自分たちの女性が黙っていることを好みました。ユダヤ人のラビや賢者たちも同様でした。

しかし、パウロはどうでしょうか。この使徒は「あなたがたはみな、預言することができます」とか「私はあなたがたがみな異言で語ることを願います」と言わなかったでしょうか。コリント人たちに「あなたがたが集まるときには、それぞれが賛美、ことば、異言、解き明かしを持ってくることができます」と言わなかったでしょうか。あなたがたの半分が黙っていなければならないのに、どうしてあなたがたのそれぞれが賛美やことばを持ち寄ることができるでしょうか。女性たちが黙っていなければならないのに、どうしてすべての人が預言できるでしょうか。

この問いについて、聖書は水晶のように明らかです。

女性が教会で語ることができることを示している聖書箇所：

使徒1:14、2:4,17-18、4:31、21:9、ローマ12:6、16:1,3,6,12、コリント第一12:7,11,27、14:5,26-27,29,31,39、コリント第二5:17、ヘブル5:12、ペテロ第一2:9、4:10-11

女性はそれができないことを示唆している聖書箇所：コリント第一14:34

新約聖書は、女性たちが発言し、教会の共同生活に十分に加わるようにという励ましに満ちています。そして、パウロほどこの太鼓を大きく打ち鳴らした人はいませんでした。それなら、なぜ彼は突然口調を変えて、コリントの女性たちに黙っているよう言うのでしょうか。彼はそうしていません。彼のことばを文脈の中で読んでみてください。そうすれば、彼がそのようなことは何も言っていないことに気づくでしょう。

文脈の解明

これは、文脈がすべてを明らかにする聖書箇所の一つです。コリントの教会には二種類の女性たちがいました。ある人たちはギリシア人で、ほかの人たちはユダヤ人でした。アリストテレス（Aristotle）やほかの人々のおかげで、ギリシアの女性たちは市民法によって公の集会で語ることを禁じられており、パウロが言及していたのはまさにこの法律でした。女性は黙っているべきだと言っていたのは、彼ではなくギリシアの当局だったのです。しかし、コリントの教会にはユダヤ人の女性たちもいましたから、パウロがユダヤの律法を暗示していた可能性もあります。彼は、後にタルムードに成文化されたラビの教えに言及していたのかもしれません。パウロ――女が集会で語るのは恥ずべきことです。タルムード――女が男たちの間で自分の声を響かせるのは恥である。ラビたちによれば、理想的な女性は静かで目立たない女性でした。会堂では、男性たちが話を引き受けている間、彼女は静かに座っていました。女性は黙っていなければならないと言ったのは誰でしょうか。ユダヤ人とギリシア人がそう言ったのです。しかしパウロは、そのようなことを一度も言いませんでした。

パウロは、女性が教会で黙っているべきだとは一度も言いませんでした。そう言ったのはコリント人たちです。上の箇所は引用です。パウロがそれを引用しているのですから、それはかぎかっこ

の中に置かれるべきです。彼は、彼らが言ったこと――ギリシアとユダヤの法が定めているように、女性には語ることが許されるべきではない――を繰り返し、それから自分の答えを述べます。「何ですって？神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。」言い換えればこうです。「気は確かですか。女性たちに黙るよう命じるとき、あなたは御父の心から語っていると思っているのですか。自分は神から聞いたと思っているのですか。」会衆の半分が黙っているべきだというとんでもない提案は、パウロを怒らせました。彼が自分の答えを叫んでいるのが、ほとんど聞こえてくるほどです。少なくとも、英語の聖書が彼を正しく訳していれば、聞こえてくるでしょう。パウロの答えがさまざまな聖書にどのように現れているか、注目してください。

NIV：それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。

AKJV：何ですって？神のことばはあなたから出たのですか。

パウロは「何ですって？！」と爆発します。しかし、いくつかの聖書はこの重要な語を省いています。私たちはパウロの憤りの熱さを感じ取らなければなりません。彼は自分が耳にしていることが信じられないのです。女性は黙っているべきだと考えているのなら、コリント人たちはそろって正気を失っています。

パウロの憤りは、「The Source New Testament」（アン・ナイランド〔Ann Nyland〕）の翻訳に見事に表現されています。「まったくのたわごとです！神のことばはあなたがたから出たとでもいうのですか。まったくのナンセンスです！それが届いたのはあなたがただけだというのですか。」

トーマス・シルマッハー（Thomas Schirrmacher）

伝統的に、教会の集会における女性への沈黙の命令[11]と理解されてきたコリント人への手紙第一14章34-35節の節も、コリント人の立場の引用あるいは描写として理解されてきました。その理由は、一つには、これらの節がその少し前の「あなたがたはみな、一人ずつ順番に預言することができる」（コリント第一14:31）という言明に合わないように見え、またほかの箇所では女性たちに預言することと祈ることが許されている（コリント第一11:13、11:5参照）からであり、二つ目には、それに続く節が、男性たちに対する反駁と戒めとして理解できるからです。「それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。」（コリント第一14:36）そうだとすれば、テキスト全体は次のように訳されなければならないでしょう。

「神は無秩序の［神］ではなく、平和の［神］だからです。聖徒たちのすべての教会において［そうであるように］。

あなたがたの女たちは教会で黙っていなさい。彼女たちには［あなたがたによって］語ることが許されておらず、律法も言っているように、従うべきだからです。もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。女が教会で語るのは恥ずべきことだからです。

それとも、神のことばはあなたがた［男たち、あるいはコリント人たち］から出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。」（コリント第一14:33-36）

［私は、コリント人への手紙第一14章33節後半「聖徒たちのすべての教会においてそうであるように」を、14章33節前半に結びつけました。ダニエル・C・アリケア（Daniel C. Arichea）ほかの人々とともに、私は、14章33節後半はいずれにせよ、14章34節前半ではなく、その前の文に属するはずだと考えます。そうでなければ、「すべての教会において」と「教会において」という表現（14:33b、14:34a）が、同じ文の中に二度出てくることになってしまうからです。[12] 彼は、多くの聖書翻訳がこのように見てきたことを指摘しています。現代の時代精神の影響を受けたという「疑いのない」英語のKing James Version（KJV）もそうです。］

引用説の主張者を何人か、手短に紹介しましょう[13]。ニール・M・フラナガン（Neal M. Flanagan）とエドウィナ・ハンター・スナイダー（Edwina Hunter Snyder）にとって、その際に本質的な役割を果たしているのは、**パウロがこの節で男性形で書いているということです。もしパウロがコリント人への手紙第一14章36節で本当に女性たちに語りかけていたのなら、彼は女性形で彼女たちに語りかけなければならなかったのではないでしょうか。**[14]

ダニエル・C・アリケアとクリス・ウカチュク・マヌス（Chris Ukachukwu Manus）は、コリント人への手紙第一14章36節の「エー」（ἢ）が、その前に述べられていることへの強い反論を導入していることを示しました（たとえばコリント第一11:22）。[15]

ロバート・W・アリソン（Robert W. Allison）は、さらに、コリント人への手紙第一14章34節における律法への訴えという問題に取り組みました。彼は次の結論に至っています。旧約聖書の律法には女性に対する沈黙の要求は含まれていないが、コリント人への手紙第一14章34節の結論は、創世記3章16節についてのラビの釈義[16]にまったく一致している。この釈義は、私たちがはじめにタルムードによってすでに知ったものであり、コリント人への手紙第一11章2-16節にも反映しているが、イエスとパウロが旧約聖書から引き出した教えとは矛盾している、というのです。

ジョイス・ハーパー（Joyce Harper）とジョン・A・アンダーソン（John A. Anderson）は、律法への訴えはタルムードにおける女性の全面的な発言禁止に対応しており、ここで律法に訴えているのはパウロではなく、不当にも自分たちの律法解釈に訴えているユダヤ人教師たちなのだ、と考えています[17]。彼らはタルムードを次のことばで引用しています。

「女が男たちの間で自分の声を聞かせるのは恥である。」[18]

S・アーレン（S. Aalen）は、「許されていない」という言い回しがラビの定式であり[19]、ラビたちはそれによって物事をそのつど許可したり禁止したりしたのだ、と指摘することで、同じ見方を根拠づけようとしました。

ギルバート・ビレジキアン（Gilbert Bilezikian）は、コリント人への手紙第一14章34-35節がコリント人の引用であることを支持する論拠として、とりわけ次のものを挙げています[20]。1）主題の唐突な転換[21]、2）そうでなければ生じてしまう、コリント第一11:2-16との矛盾[22]、3）すべての人が礼拝に参加し（コリント第一14:31）、すべての人が賜物を熱心に求めるべきだ（コリント第一14:39）という文脈[23]、4）パウロは決して律法に訴えないということ[24] ——これは確かにこのままでは通用しない主張であり、次の論拠とも調和させることができません。5）女性の沈黙についての旧約聖書の言明は存在しないということ[25]、6）コリント第一14:36のギリシア語の「エ

ー」が強い反論を導入しており[26]、コリント人への手紙第一にはその例が数多くあること（コリント第一6:1-2、6:9、6:16、6:19、9:6、9:8、10:22、11:13、14:36）[27]、7）コリント第一14:35の女性形から、コリント第一14:36の二人称男性形への唐突な転換[28]、そして最後に、8）コリント人への手紙第一に、似たような引用が数多く存在すること（彼によれば、コリント第一1:12、3:4、6:12＝10:23、6:13、6:18、7:1、8:1、8:4、8:8）[29]。

C・H・タルバート（C. H. Talbert）は、コリント人への手紙第一14章についての引用説[30]の根拠を、同じように要約しています。

「二つの論拠が、この理解を蓋然性の高いものにしている。第一に、36節で『だけ』（monous）と訳されている語は男性複数形である。これは『あなたがた男たちだけ』のような言い換えを必要とする。もし14:34-35がパウロの命令であるなら、男性形の呼びかけは場違いである。しかし、もし14:34-35がコリントの共同体の中の男性グループの主張であるなら、男性形の呼びかけは意味をなす。第二に、14:34-35は、ガラテヤ3:27-28とコリント第一11:2-16におけるパウロの立場とあまりにも強く矛盾しているので、それらを調和させようとするどんな試みも歪曲に至らざるをえず、たいていは矛盾を取り除くために挿入説に至る。しかし、14:34-35をコリント人の主張として、14:36をパウロの憤慨した答えとして理解するなら、理解可能な一貫性が得られる……」[31]

ほかの著者たちは、これらの困難のゆえに、コリント人への手紙第一14章34-36節、あるいはその一部を、あっさりとパウロ的でないもの、後の挿入と見なしてきました[32]。挿入という想定には、コリント人への手紙第一11章2-16節の場合の事情とは異なり、実際の歴史的な手がかりがあります。[33] もっとも、私の考えでは、それは挿入説の根拠としては十分ではありません。そのためたとえば、ジェローム・マーフィー＝オコナーは、ある研究の中で、コリント人への手紙第一について提案されているすべての挿入（すなわちコリント第一2:6-16、4:6、6:14、11:3-16、15:31-32、15:44-48）を退けながら、残念なことにコリント第一14:34-35についてだけは、やはり挿入を想定しているのです。

コリント人への手紙第一14章34-35節の挿入は、つまり、新約聖書のいくつかの古い写本、とりわけ「D」（ベザ写本〔意図されているのはクラロモンタヌス写本〕）**において、また一般に西方写本伝承全体において、沈黙の命令である34-35節が40節の後に挿入されている[34]ことによって根拠づけられています。** ゴードン・D・フィー（Gordon D. Fee）は、新約聖書のほかのどこにも――はるかに長いヨハネ8章とマルコ16章のテキストを除けば――そのような段落が単純に複数の場所に見いだされる例はなく、このことは、そのテキストが最初は欄外にあったと考える場合にのみ説明がつく、と指摘しています[35]。

しかし、コリント人への手紙第一14章34-36節に「反対して」持ち出される根拠のいくつかは、私の考えでは、後からの付加という意味でのパウロ的でない性格を必ずしも示すものではなく、パウロがコリント人を引用している、あるいは彼らの見解を描写しているという意味での「パウロ的でない」性格によっても説明できます。ジェローム・マーフィー＝オコナーが、引用と注記（グロッサ）を二つの解決策として並べ、それから注記のほうを選んでいるのは偶然ではありません[36]。

コリント人への手紙第一14章34-35節が、コリント人の意見の描写としてではなく明確な命令として理解される場合でも、「黙る」は、この章全体と同じように、異言と預言、あるいは預言を判断することに関わっているのであって、語ること一般に関わっているのではないでしょう[37]。パウロが預言者たちに黙るよう求めるとき（コリント第一14:30）、それを一般的な発言禁止と理解する人は誰もいません。その人の預言を終えることと理解するのです。

テラン・ウィリアムズ（Terran Williams）

『Wie Gott Frauen sieht: Das Ende des Patriarchats』（『神は女性をどう見ておられるか――家父長制の終わり』）（124頁）。英語版のKindle版。ドイツ語版『Wie Gott Frauen sieht』は、2026年にペーパーバックとKindle電子書籍として刊行されました。

不明瞭な聖書箇所

教会は、聖書についての私たちの解釈を問い直し、ますます大きな明確さと確信に至り続けなければなりませんが、その一方で、この箇所がなお答えよりも多くの問いを投げかけていることを認めるのは大切です。最も説得力のある見解でさえ、確かではありません。ですから謙遜が求められます。もし私たちが、神のことばを軽んじることを恐れて最も保守的な解釈（見解1）を選ぶなら、女性たちが完全に口を閉ざすということは、彼女たちが歌ってもいけないということをも意味するはずです。歌うことは、パウロによって語ることの一種として挙げられているからです。保守主義の立場に立ちながら、女性たちに禁じるのは預言を吟味することや説教することだけだとするのは、私にはかなり恣意的で一貫性に欠けるように思われます。一貫性と言えば、もし保守的なアプローチを取るのなら、本当に一貫して、すべての女性に、次の教会の集会のためにかぶり物を用意しておくよう指示すべきでしょう！尊敬すべき学者たちがこの箇所を研究してこれほど多くの異なる立場に行き着いているのですから、この箇所が不明瞭であるということには、きっと私たち全員が同意できるでしょう。したがって、この箇所は――どんな良い解釈の方法に従っても――教理上の結論や、世界中のすべての教会の実践における普遍的な命令の土台となるべきではありません。

コリント人への手紙第一11章も14章も、女性が教会や社会で指導的な役割を担うこと、夫のパートナーとしてそばに立つこと、あるいは男性に向けて説教をすることの可能性を排除してはいません。しかも、まさに同じ節が、補完主義者たちによって自分たちの立場を擁護するために持ち出されてきたにもかかわらず、なのです。

シンシア・ロング・ウェストフォール（Cynthia Long Westfall）

Paul and Gender: Reclaiming the Apostle’s Vision for Men and Women in Christ（239頁）. Baker Publishing Group. Kindle版。

7.3.4 1世紀の女性たちとその会話のスタイル

なぜパウロは、よりによって女性たちにこの原則に対する違反の責任を負わせたのでしょうか。周知のとおり、ほかの人が話している間に同じようにしゃべっていた男性たちに、なぜ彼は語りかけなかったのでしょうか。その答えは、多くの点で性別によって分けられていた文化の中で、

家庭でだけでなくほかの場面でも女性たちが集まったときの、女性たちの典型的なふるまいにあります。キリスト者たちは、共同の食事を中心に組織された小さく親密な家の教会で集まっていたことを思い起こしてください。そこでは女性たちは、霊的な賜物とは関係なく、食事の準備や配膳、片づけに追われていました。それだけでもう、女性たちが自然と声が大きくなり、仕事を楽にし、働きながら楽しむために互いに話をしがちな環境が生まれます。しかし、それを越えても、女性たちは公の場で集まると、周囲の妨げになることがありました。クリュソストモス（Chrysostom）は女性たちに語りかけ、まさにこの問題を取り上げました。

当時、女性たちはそのような教えに従って黙っていた。ところが今、彼女たちの間には大きな騒音があり、多くの叫び声やおしゃべりがある。しかも、この場所［大聖堂］ほどそれがひどい所はどこにもない。ここでは、彼女たちがみな、市場や浴場にいるときよりも多くしゃべっているのが見られる。まるで息抜きのためにここに来ているかのように、彼女たちはみな、実りのない事柄について語り合うのに忙しい。こうしてすべてが混乱しており、彼女たちは、静かにしていなければ何一つ有益なことを学べないということが、わかっていないようである。というのも、私たちの話［説教］がおしゃべりと戦わなければならず、だれも語られていることに注意を払わないなら、それが彼女たちにとって何の益になりえようか。

ケネス・ベイリー（Kenneth Bailey）は、エジプト、レバノン、エルサレム、キプロスで過ごした40年間に経験した似たような体験を、公の礼拝における女性たちのふるまいについても、小グループで女性たちを教えたときの個人的な経験についても述べています。彼はいくつかの要因を描いています［……］。

7.3.5 コリント人への手紙第一12-14章の結びとしての、コリント人への手紙第一14章36-40節の機能 パウロは突然、鋭い修辞的問いを伴う、より論争的な口調に切り替えます。多くの人は、それらの問いが女性たちに向けられ、コリント人への手紙第一14章34-35節の結びの役割を果たしていると考えています。しかし、その際に注意すべきことが二つあります。36-40節は一つのまとまりを成しており、そのまとまりは、異言、預言、そして品位をもって秩序正しく行うことに関わる要約によって、明らかに14章を締めくくっています（37節、39-40節）。その前の、御霊の賜物と愛という主題が、14章のすべての議論の文脈を成しているので、この部分はコリント人への手紙第一12-14章の結びとしても機能しているのです。

パウロは14章で一連のグループに鋭く向き合い、彼らを正してきました。そして36節で、男性複数形の「あなたがた」（ὑμῶν, ὑμᾶς）によって彼ら全員に語りかけています。ですから、36節の彼の鋭い修辞的問いは女性たちだけに向けられているのではなく、彼は、たった今正したばかりのすべてのコリント人に語りかけているのです。彼は、異言、預言、そして全員が同時に話さないことについて自分が述べたすべてのことに対して、異論が出るかもしれないと見込んでいます。

7.3.6 まとめ

礼拝の間は語らないようにという、女性たちに対するパウロの指示（コリント第一14:34-35）は、女性の奉仕と指導のために尽力するすべての人にとって、深刻な難題と見なされることがよくあります。しかし、女性に対する沈黙を絶対的なものと理解すべきだという見解を取る学者は

ごくわずかです。問いはこうです。沈黙の種類は、どのような文脈で理解されるべきなのか。あるいは、女性は語るべきではないと言ったとき、パウロは何を意味していたのか。

むしろ、家の教会における礼拝の状況という文脈、手紙の中での文脈、そして女性たちの文化という文脈こそが、テキストの意味を見定めるために最も重要です。これらの文脈は、パウロが女性たちに、祈りと、御霊の賜物の正当な行使に参加することを期待していることを示しています。しかしそのうえで、彼は礼拝中の無秩序と混乱につながる特定の問題を取り上げています。異言を語る人々や預言者たちへの指示と同じように、パウロは女性たちに、礼拝中にほかの人と同時に話すのではなく、静かに、自制しているよう指示しています。それは、あらゆる伝統の発言の倫理において、行動の規範とされていることです。パウロは男性たちに、家で自分の妻を教えるよう指示しています。それは、彼女たちが、礼拝中に互いに話したり、夫とささやき合ったりすることによって自分の質問への答えを得なければならない、ということにならないためです。

フィリップ・B・ペイン（Philip B. Payne）

2022年10月17日、Twitterにて

今日は、コリント人への手紙第一14章34-35節がパウロ以後の付加であることを示す、いくつかの追加的な写本上の証拠についてお話しし、それが私の考えでは「どのように」本文に付け加えられたのかを説明したいと思います。これらの節の一つの特徴は、初期の写本において二つの異なる場所に現れることです。1/12

たいていの写本では、この段落は33節の後に続いています。おそらくあなたの聖書でもそうでしょう。しかし、西方教会の現存する「すべての」写本では、34-35節の段落は40節の後に続いています。二つの非西方写本を除けば、この段落は33節の後にあります。2/12

これは、福音派の中でおそらく最も有名な本文研究者であるゴードン・フィー（Gordon Fee）が、34-35節はパウロのものではない付加だと考えている重要な理由です。他の教会がそれを33節の後に置いていたのに、どうして西方教会は300年もの間、一致して34-35節を40節の後に置くことができたのでしょうか。3/12

三つの可能性があります。

1. それはもともと33節の後に続いていたが、40節の後に移された。
2. それはもともと40節の後に続いていたが、33節の後に移された。
3. だれかがそれを欄外に書き、後の写字生たちが、自分たちが正しいと考えた場所、つまり33節の後か40節の後に、それを本文に挿入した。4/12

パウロ書簡のどの写本においても、これほど長い段落が、はっきりした理由もなく、これほど離れた場所に移された例はありません。このことは、可能性1と2を前例のないものとし、したがって極めてありそうにないものとしています。5/12

しかし写字生たちは、欄外に見つけた語を本文に挿入することが時々ありました。原文を正しく再構成できるようにするためには、学者たちはこうした証拠を精査し、非常に古い写本を比較し

なければなりません。（だからこそ初期の写本はとても重要なのです！）6/12

34-35節が二つの異なる場所に現れる理由について、知られている写字生の慣行に合致する説明はただ一つしかありません。本文伝承の初期の段階で、だれかが（おそらくテモテへの手紙第一2章の語彙の影響を受けて）このテキストを説明的な注記として欄外に書き加えたのです。7/12

もしかするとその人は、自分がパウロの明白で本当の意図だと考えたものをはっきりさせたかったのかもしれません――読者が手紙の残りの部分をもとに、女性は教会で語ることができると思い込まないように。8/12

この写本を書き写した後の写字生たちは、これらの文はもともと誤って書き落とされ、写本はそれらの文を欄外に書くことによって訂正されたのだと考えました。欄外は、ページを書き終えた後でそれらを書き加えることのできる唯一の場所だったからです。9/12

28節と30節の沈黙の命令に気づいたある写字生は、新しい沈黙の命令が収まる最初の場所（33節の後）にその注記を挿入しました。この写本は非西方の写字生たちによって書き写されました。10/12

別の写字生は、それは本文の論理的な区切りである40節の後のほうがよく合うと考えました。この写本は西方の写字生たちによって書き写されました。これらは、この部分で意味のある挿入箇所としては唯一の二つです。11/12

重要な注意：これは、パウロ書簡のほかのどの写本にも見られない一度限りのケースですから、ほかのテキストの真正性を損なうものではありません。12/12

コリント人への手紙第一14章におけるパウロの議論の思考の流れと構造は、（写本の証拠やほかの内的証拠と合わせて）コリント人への手紙第一14章34-35節がパウロに由来するものではないことを示す手がかりを私たちに与えてくれます。34節にある二つの典型的でない言い回し、「律法も言っているように」と「教会において」についても同じことが言えます。1/13

テキストを読むと、34-35節がまるで何もないところから出てくるように見えること、そしてこれらの節がないほうが、直感的にテキストがよりよく流れることに気づかれるかもしれません。しかし、34-35節がもたらす構造上の問題は、それよりもさらに深いものです。2/13

コリント人への手紙第一14章1-25節は、異言が解き明かされない限り、預言は異言よりも人を築き上げるという、一貫した議論です。26-40節は、1-25節の上に築かれた、首尾一貫した構造上のまとまりであり、徳を高めるための異言・預言についての一連の指示を列挙しています。3/13

これらの指示を結びつけている原則は、礼拝の集まりにおいて混乱ではなく秩序が必要だということです。26-40節の文学的構造はキアスム（交差配列）です。キアスムとは、左右対称の文学形式です。4/13

キアスム構造では、最初の言明が最後の言明と平行し、二番目の言明が最後から二番目の言明と平行する、というようになっています。重要なのは、そのような段落の頂点が中央にあるということです。5/13

コリント人への手紙第一14章26-40節では、頂点はこうです。「神は無秩序の神ではなく、平和の神です。聖徒たちのすべての教会においてそうであるように。」この頂点の主題は、文学的構造の始まりと終わりに密接に結びついています。テキストの対称性は34-35節によって中断されています。6/13

34-35節で女性に対する無制限の沈黙を導入することは、文学的構造にとって無関係です。なぜならそれは、37-39節前半がしているように、それまでの預言という主題を繰り返して要約するのではなく、頂点の後に新しい要素を持ち込んでいるからです。7/13

34-35節は頂点ではなく、この段落の導入や結びと関連する主題にも言及しておらず、段落のキアスム構造の中に対応するテキストも持っていません。これらの節は、パウロの論理的な思考の流れの中で場違いであるだけでなく、それ以外の点では一貫している構造を打ち破ってもいます。8/13

さらに、34節の文法は、二つの本質的な点でパウロらしく聞こえません。

- 「彼女たちは語ることを許されておらず、律法も言っているように、従わなければならない」は、まったくパウロらしく聞こえません。パウロが「律法が言っているように」を用いるときには、必ず該当する律法を引用しています。9/13
- しかも、パウロがここで旧約聖書をはっきりと引用していないというだけでなく、女性の沈黙や服従を命じる旧約聖書の律法も存在しません。この段落は、女性たちに沈黙・服従を定めているユダヤの口伝律法か、あるいは公の集会で黙っているよう女性たちに定めていたギリシアの法律を指しているのかもしれません。10/13

しかしパウロは、ユダヤの口伝律法やギリシア・ローマの法律を「律法」と呼ぶことは決してありませんし、ましてやそのような規定をキリスト者の礼拝のための規則にすることはありません。彼は、キリスト者の礼拝のための規則を立てるために、旧約聖書の律法に訴えることさえしていません。11/13

2）最後に、コリント人への手紙第一にも第二にも、ほかのどの命令においても、ある部類の人々が「教会において」と呼びかけられている例はありません。この言い回しは、手紙が本来の宛先だけでなく、すべての教会に配布されるようになった後の時代に、よりよく合っています。12/13

明日は、コリント人への手紙第一14章34-35節についての一般的な平等主義の読み方――すなわち、パウロが36-38節でだれか別の人を論駁するために、その人を引用しているという読み方――の長所と短所について論じます。13/13

パウロはコリント人への手紙第一14章34-35節で、14章36-38節でその人を論駁できるように、だれか別の人を引用しているのでしょうか。これは、私が尊敬する多くの人々によって主張されている、一般的な平等主義の読み方です。この解釈には多くの長所がありますが、私は、証拠はそれに反していると思います。1/7

長所：

- 14:34-35と、コリント人への手紙第一の残りの部分（特に11章と14章の残りの部分）との間の矛盾を解消する
- 「律法」への言及が、紛れもなくパウロ的でないように見える理由を説明する
- 14:36-38のテキストは、偽りの預言を論駁するのによく合っている。2/7

弱点：

- パウロが論駁しているほかのコリント人の引用は、これほど長くはまったくない
- 36-38節には、彼が34-35節を論駁することを必要とするものは何もない
- なぜ西方本文のすべての写本が34-35節を40節の後に置いているのかを説明しない
- それでもやはり、パウロの議論の流れ・構造を中断している 3/7

この解釈の一つの変形によれば、パウロ自身（あるいはむしろ彼の助手）が、自分のことばが女性は黙るべきだという格言を論駁していることを示すために、34-35節を36-38節の横の欄外に書いたのだといいます。後に写字生たちは、これは本文に属するものだと考えました。4/7

これによって、いくつかの異論、とりわけ流れ・構造に関する異論と、これらの節が写本の中で二つの場所に現れるという事実に関する異論には、十分に答えられます。私は、証拠は、34-35節が初期の写字生によって欄外に書かれた挿入であることを示していると考えます。5/7

しかし、34-35節をパウロがコリント人に書いた元の手紙の一部と見なすすべての解釈の中では、パウロが、36-38節がそれを論駁していることを示すために、コリント人の偽りの預言を欄外に書いた、という解釈が最も信頼に足るものです。6/7

いずれにせよ、これらの読み方は、パウロが同じ手紙の中で、ごく近い箇所で根本的に自己矛盾しているという考えや、コリント人への手紙第一11章を意味の通るものとしながら、同時に14章34-35節をパウロの命令だと信じるのに十分な解釈上の体操ができる、という考えよりも、はるかに信頼に足るものです。7/7

ゴードン・D・フィー（Gordon D. Fee）

c. 女性たちの沈黙について（14:34-35）

この注解では、ここで説明する理由から、これらの節の扱いを意図的に40節の後に置いています。たいていの写本（P46 Ａ Ｂ Ｋ Ψ 0243 33 81 1739 Majを含む）は、これらの節をここに置いています。Ｄ Ｆ Ｇ 88* ａ ｂ ｄ ｆ ｇ アンブロジアステル セドゥリウス・スコトゥスでは、これらの節は40節の後に見られます。つまり西方伝承全体（すなわちギリシアより西）においてです。もしこれらの文が本当にこの手紙の中でパウロに由来するのなら、新約聖書全体の約1200年にわたる写本伝承の中で、この規模の移動はこれが唯一ということになります。この伝承の歴史のほかのどこにも、ギリシア語においても他の訳においても、これに少しでも匹敵するようなものはまったくありません。実際、新約聖書全体でこの種の「移動」としてほかにあるのは、いくつかの初期の写本における、マタイの福音書5章4-5節の最初の二つの至福の教えの入れ替えだけです。この

事実それ自体が、どの新約学者にも、このテキストの真正性について深刻な疑いを抱かせるはずです。この段落に現れる、際立ってパウロ的でない表現をそれに加えるなら、なおさらです。以下の議論に加えて、特にP. B. Payne, Man and Woman, One in Christ: An Exegetical and Theological Study of Paul's Letters (Grand Rapids, 2009), 217-67における、この問題についての徹底した、バランスの取れた論述を参照してください。E・J・エップ（E. J. Epp）が述べたように、それは「綿密に表現され、説得力をもって論証され、永続的な意義を持つ」ものです。別の見解を持つ人々は、今や同じような仕方で応答し、しばしば見られる防御的で拒絶的な態度を捨てなければなりません。

このように、テキストそのものの釈義は、本文上の問題と一致して、このテキストは真正ではないという結論に至ります。とりわけ、その多くの部分が、パウロがより大きな文脈の中で論じてきたことと矛盾しているのですから！もしそうなら、このテキストは後のキリスト者たちにとって確かに拘束力を持ちません。もしそうでないとしても、その真正性についてのかなりの疑いは、集会において女性がそのように語ることが恥とはならない文化の中で、これを永遠の禁止として用いないようにという警告となるべきです。「祈りや預言をするすべての女」（11:5）についての、それ以前の事実に即した言明に照らせば、なおさらです――それは「声に出して」、しかも集められた神の民という文脈の中で、ということしか意味しえないのです。

解釈学的に疑わしく思われ、それでいて非常に多くの文献の暗黙の言外の意味となっているのは、預言と異言についての周囲の段落全体が、優先されるべき解釈学上の理由から、現代の（たいていは西洋の）教会には適用できないとして暗に否定される一方で、この唯一の、そしておそらく真正でない段落が、あらゆる時代、あらゆる状況のためのことばとして選び出されている、ということです。自発的に声に出して祈ったり預言したりすることは、「礼儀正しい」西洋文化の中のたいていの教会では、実際にはまったく禁じられています。私たちはみな、堕落した人間であるがゆえに、そのようなことをしがちなのです。[38]

フィリップ・J・アボット（Philip J. Abbott）

フィリップ・J・アボットの修士論文（Master of Arts）、ペパーダイン大学（Pepperdine University）、2015年5月

全文はこちら：Bringing Order to 1 Cor 14:34-35 | Philip Abbott - Academia.edu

コリント人への手紙第一14章34-35節に秩序をもたらす

結論

多くの人が、コリント第一14:34-35はパウロのコリント人への手紙の本文に入り込んだパウロ以外の者による挿入だと主張していますが、この説はありそうにありません。これらの節は、一部の学者たちが主張するような、パウロにとって異質な男性優越主義的態度を示してはいません。むしろパウロはこれらの節で、コリントの女性たちに、トーラーの根底にある秩序の原則に従うよう求めています。この論拠を支えているのは、女性たちは会衆の前で自分の夫を告発すべきで

はないというパウロの指示です。そのようなふるまいは、礼拝に満ちているべき秩序ある雰囲気を損なうのです。

しかしこの段落は、パウロが取り上げた特定の状況についての知識を前提としているため、何世紀にもわたって誤解されてきました。パウロはこれらの節で、世界中の、時代を超えた教会の実践のための指示を与えたのではなく、コリントのキリスト者の小さなグループの秩序ある礼拝を乱していた、ある特定の問題を解決しようとしていたのです。しかし残念なことに、多くの人は、ベン・ウィザリントン（Ben Witherington）が述べたことを理解していません。「誤りを正すためにある人が言うことは、特定のテーマについてのその人の見解の完全な、あるいは最終的な説明と見なすことはできない」。

これらの節に明白な女性蔑視を見る人々がいるにもかかわらず、使徒教父たち（ローマのクレメンス〔Clement of Rome〕のような男性優越主義者でさえ）が、女性たちを黙らせるためにこの段落を引用しなかった（あるいはそもそも引用しなかった）ことは示唆的です。この事実から、一部の人々は、この段落は後の本文への挿入だったという誤った結論を引き出しました。彼らは、初期のキリスト者たちがこれらの節に言及していないことが、これらの節が後から挿入されたことの証拠だと論じています。しかし、アレクサンドリアのクレメンス（Clement of Alexandria）はこの段落を知っており、それを両性にとっての礼拝の秩序についての指示と理解していました。使徒教父たちもおそらく同じように考えていたでしょう。そのうえ、使徒教父たちの時代の後になって初めて本文に入った挿入が、コリント人への手紙第一の現存するすべての写本に現れるということは、極めてありそうにありません。

女性たちを教会で黙らせるためにコリント第一14:34-35に訴えた最初の例として知られているのは、ラテン教父テルトゥリアヌス（Tertullian、紀元160-220年）です。彼と、女性たちを黙らせるためにこの段落を引用した後の西方教父たちが、この段落が移動されている西方型の本文を用いていることは示唆的です。これはまず偶然ではないでしょう。

本文の移動は、おそらく2世紀に起こりました。当時、写本は放縦に手を加えられ、教会はローマ世界の中で自らの地位を確立しようとしていました。西方のキリスト者たちは、キリスト教のエクレシアをギリシア・ローマのエクレシアと調和させようとしました。彼らは、教会がその実践と社会性において国家を模倣することを望んだのです。そのうえ、キリスト者たちは、ガレノス（Galen）のようなローマの哲学者たちのテキストに対する批判的な取り組み方の影響を受けました。このことが多くの人を、自分たちの教会的な課題を支えるためにテキストを解釈し、変更するよう促しました。彼らは、テキストの教えに自分を合わせる代わりに、文書を自分たちの考えに合うように変えようとしたのです。

コリント第一14:34-35の移動は、おそらく紀元2世紀後半、西方のキリスト者たちがローマの司教エレウテルス（Eleutherus、彼は東方のキリスト者でした）に、モンタノス主義を断罪するよう説得しようとしていたときに起こりました。

当初エレウテルスはモンタノス派の運動を容認し、この分派への祝福を記した書簡を公にしました。しかし、モンタノス派の正統でない権威の主張と不適切なふるまいのために、この司教は結局、西方のキリスト者たちに説得されて自分の祝福を撤回し、この分派を断罪しました。モンタ

ノス派の運動をめぐるこの論争のただ中で、西方本文の写字生たちが、女性の預言の断罪に対する使徒的な支持を得るために、西方本文に手を加えた可能性は高いでしょう。女性の預言は、モンタノス主義において、その有名な女預言者たちのゆえに大きな役割を果たしていたのです。自分たちの目的を達成するために、西方の写字生たちはおそらく、コリント第一14:34-35を本文の数節後ろに移し、秩序ある礼拝という文脈から切り離したのでしょう。この節の巧妙な移動によって、読者たちがこの段落を、女性は教会で黙っていなければならないという普遍的な定めとして受け取る可能性が高まりました。

ここで一つはっきりさせておかなければなりません。この段落が女性蔑視的に理解されるためには移動されなければならない、というわけではありません。しかし移動は、テキストを秩序ある礼拝という文脈から引き離し、テキストの一見女性蔑視的な調子を際立たせます。移動された段落の潜在的に反女性的なメッセージは、モンタノス主義との戦いにおいて、西方のキリスト者たちの助けとなったのかもしれません。

モンタノス派の論争と、2世紀のローマにおける本文伝承の「大きく腐敗した基盤」が、西方本文の背景を成しています。この非常に変わりやすい本文形態は、その言い換え、本来の読みからの数多くの逸脱、そして本文の改変で知られています。西方本文で特に目立つのは、明らかに女性蔑視的な意図をうかがわせる女性蔑視的な変更です。西方本文の作り手たちが、教会についての自分たちの男性優越主義的な構想を推し進めるために、新約聖書に手を加えようとしたことは明らかです。残念なことに、彼らはそれにおおむね成功しました。彼らの読みの多くを退けながらも、その女性蔑視的なレトリックには説得されてしまったオリゲネス（Origen）のような人々においてさえそうでした。

まとめると、モンタノス派の論争と、女性蔑視的な読みを伴う西方本文の発展とは、どちらも2世紀に起こりました。これらの同時代の要因は、互いに影響し合ったに違いありません。西方の本文の女性蔑視的な読みは、西方のキリスト教のイデオロギーを脅かしていた運動（モンタノス主義）への反応であった可能性が非常に高いように思われます。自分たちの立場を守るために、これらの西方のキリスト者たちは、特にモンタノス派の逸脱した権威の主張に直面して、権威ある使徒的テキストが自分たちの考え方を支持するようにしておくことが非常に有利だと考えたのです。不幸なことに、コリント第一14:34-35における挑発的でないパウロの秩序への訴えも、キリスト者の女性たちも、彼らの編集上の策略の犠牲となりました。この段落はいったん移動されると、キリスト者の女性たちとその霊的な賜物にとっての障害となり、沈黙の命令となったのです。

秩序をもたらす試み

コリント第一14:34-35については、驚くほど大量の文献が書かれてきました。とりわけ、この段落では性別に関わる問題が扱われているため、多くの人が、そのメッセージとそれを取り巻く本文の状況に大きな関心を寄せています。パウロのコリント人への手紙の中にあるこの要求の、潜在的に女性蔑視的な性格を理解しようとする多くの人にとって、今日のキリスト教における女性の役割という問題がかかっているのです。

コリント第一14:34-35を扱う文献の量と多様さにもかかわらず、この移動を含んでいる写本がほとんど注目されてこなかったことは驚くべきことです。解釈者たちが、コリント第一14:34-35が移動されているテキストの性格や起源を調べることはまれです。その代わりに、多くの人は、この段落がいくつかの写本では移動されていると述べるだけで、14:34-35はおそらく挿入だと主張しています。

この論文の題名は「コリント第一14:34-35に秩序をもたらす」です。その目的は、コリント第一14:34-35の執筆につながった社会的環境、その文学的文脈、西方の本文におけるその移動、そして女性に対する沈黙の命令としてのその後の使用を明らかにすることです。コリント第一14:34-35についての研究の現在の無秩序な状態は、大部分、これらの要因が軽視されてきたことに起因しています。

本研究は、コリント第一14:34-35のメッセージと歴史を明らかにしようと試みてきましたが、同時に、新しい研究の道につながるかもしれない、いくつかの新しいテーマと問いも提起しました。第一に、女性の抑圧のほかに、どのような教会の実践が、手を加えられたテキストによって影響を受けてきたのでしょうか。コリント第一14:34-35の移動が、ある特定の教会の実践を正当化するための唯一の編集上の介入でないことは確かです。本文批評は通常、新約聖書の原文を明らかにするのに役立ちます。しかし、本文批評は、現代のキリスト教を形づくってきた社会的な目的について何を語ることができるでしょうか。第二に、本研究は、古代キリスト教において沈黙させられた女性たちの声を発見しようとする、すでに広がっている運動に加わるものです。これらの初期の信者たちは誰であり、何を語らなければならなかったのでしょうか。第三に、本研究は、読者が自分自身の解釈学上の実践を見直すよう促すことを意図しています。モンタノス主義と戦った西方の教父たちのように、私たちもまた、どの程度聖書を歪めているのでしょうか。現代の世界において聖なるテキストに物理的に手を加えることはありそうにありませんが、ほとんどすべてのキリスト者が、ある程度、聖書を文脈から引き離し、それを自分の個人的な目的を正当化するために用いるという罪を犯しています。結局のところ、新約聖書の読者として、私たちは、個人的な課題という目隠しを外し、聖書にそれ自身で語らせることによって、自分自身の解釈を評価しなければなりません。

ドン・カーソン（Don Carson）

このリンクから全文をダウンロードできます。ここでは抜粋だけを引用します。

6. "Silent in the Churches": On the Role of Women in 1 Corinthians 14:33b-36 | Bible.org

コリント人への手紙第一14章33節後半-36節の解釈は、決して簡単ではありません。難しさの核心は、パウロがコリント人への手紙第一11章2-16節では、一定の制限つきではあっても、女性たちに祈ることと預言することを十分に認めているのに、ここでは、テキストを一読したところ、彼が命じる沈黙が絶対的なものになっているように見える、という点にあります。提示されている解決策は、悪霊につかれたある事例における悪霊たちのように、レギオンです。私にできるのは、そのうちのいくつかを列挙し、私の懸念を一つか二つ述べたうえで、文脈的にも釈義的にも最も確かだと私が考える解釈に向かうことだけです。

HJR：その後に続くテキストで、カーソンは本文批評上の問いやほかの問いを取り上げていますが、長くなるのでここでは再現しません。最後の彼の説明だけを引用します。

IV. 文脈によって決定される（カーソンの）解釈

もう一つの解釈が、さまざまな著者たちによって提示されており、それに対して持ち出される異論にも答えています。それは別の箇所で詳しく擁護されてきました。ここではその概略しか示すことができません。パウロはコリントの教会に対して、提示された預言を注意深く吟味するよう求めたばかりです。女性たちは、もちろんそのような預言に加わってかまいません。それは11章で確認されました。しかし、パウロがここで言おうとしているのは、彼女たちはそのような預言の口頭での判断に加わってはならない、ということです。それはどの教会でも許されていません。この文脈において、彼女たちは語ってはならないのです――「律法も言っているように」。この「律法」への訴えをコリント人の立場の特徴とする見解に明らかに沿って、エヴァンズ（Evans）は、これをパウロ自身による律法への訴えと解することは、パウロにとって「奇妙に典型的でない」ように響く、と考えています。これはかなり奇妙な評価です。パウロはこの章ですでに一度「律法」に訴えており（14:21参照）、それによって旧約聖書の諸文書を意味しているのですから。この言い回しでパウロが言及しているのは、多くの人が考えるように創世記3章16節ではなく、おそらく創世記2章20節後半-24節における創造の秩序でしょう。パウロは、女性の役割を論じるときに、ほかに二度、この節にはっきりと言及しているからです（コリント第一11:8-9、テモテ第一2:13）。創世記2章の段落は、もちろん沈黙を命じてはいません。しかしそれは、男性が先に造られ、女性が男性のために造られたので、二人が担う役割について一種の型が定められたことを示しています。パウロはこの創造の秩序から、女性は男性に従うべきである――あるいは少なくとも、妻は夫に従うべきである――ということを読み取っています。コリントにおける預言の判断という文脈では、妻たちがそれに加わるなら、そのような従属は保たれえませんでした。預言を語った最初の夫が、問題を引き起こすことになったでしょう。

より広い意味では、パウロは、女性が男性に対して、教会によって認められた教える職務を行使することを退けた（テモテ第一2:11以下）、そして預言を注意深く吟味することはこの教える働きに含まれる、という見解を取ることができます。これは、女性が学ぶべきではないという意味ではありません。彼女たちは、家に帰ってから、これらの預言のさまざまな側面について自分の夫に尋ねるべきなのです。なぜコリント人たちは、すべての教会の慣行（33節後半）だけでなく、聖書そのもの（34節）をも無視しなければならないのでしょうか。彼らは自分たちが受けた啓示にあまりにも夢中になって、それを聖書と使徒的伝承の中にある真正な伝承に対抗させようとまでするのでしょうか。そして、もし自分たちは御霊の霊感のもとでこの伝承を解釈しているにすぎないと思っているのなら、すべての教会が同じテキストと同じ福音を、自分たちとはまったく異なる教会の実践へと移しているのを見て、不安にならないのでしょうか。神のことばが届いたのは、あなたがただけなのですか（36節後半参照）。

この解釈について、いくつかの結びのコメントが役に立つかもしれません。第一に、この解釈は14章の流れに合っています。この章の後半でも、重点はなお異言と預言にありますが、それは、これらの恵みの賜物を用いる際に教会が守らなければならない秩序と、さらに密接に結びついて

います。33節後半-36節は、この説明によく合っています。直前の節は預言者たちの判断を扱っています。これらの節（33節後半-36節）は、その議論をさらに精密にしているのです。コリント人への手紙第一12-14章の全体的な主題は、14章の結びの節が示しているように、放棄されてはいません。これらの論争の多い節について、議論の流れにこれほどよく合うほかの解釈はありません。

第二に、この解釈は、テキストの流れに関してだけでなく、テキストの構造に関しても意味をなします。14章は、異言と預言の意義についての議論によって支配されています。この章の大部分は、ここでの私たちには関わりがありません。しかし26節以下は、明らかに、集会においてこれら二つの賜物を秩序づけるための実際的な指針を扱っています。26節はかなり一般的です。27-28節は、異言を語る人々に対する実際的な制限を扱っています。29節でパウロは預言に向かい、こう書いています。「預言する者も、二人か三人が話し、ほかの者たちは語られたことを注意深く吟味しなさい。」この節の二つの部分は、その後別々に扱われます。前半（「預言する者も、二人か三人が話し」）は30-33節前半で扱われ、そこでは預言を語ることについての制限が問題になっています。後半（「ほかの者たちは語られたことを注意深く吟味しなさい」）は33節後半-36節で扱われ、そこでは預言の判断についての制限が問題になっているのです。

第三に、これに対して持ち出されてきた主な異論は、パウロが女性たちに預言することを許しておきながら、その後で預言を評価することを禁じるのは一貫性を欠くように見える、というものです。しかしこの異論は、そのような預言が、旧約聖書の偉大な記述預言者たちと同じ権威の地位を持っていないこと（その権威がすぐに認められたかどうかにかかわらず）を考慮すれば、ほとんど重みを持ちません。私は別の箇所で、新約聖書における「預言」は極めて幅の広い範疇であり、異教の預言者たちの働き（テトス1:12）から旧約聖書の正典的預言にまで及ぶことを詳しく論じました。一般の教会生活において、それは御霊によって与えられた発言として認められていましたが、細部に至るまで神的権威を保証するものではありませんでした。そのため、判断を必要としただけでなく（コリント第一14:29）、必然的に、使徒パウロが代表する真理の財産よりも低い権威しか持っていなかったのです（14:37-38）。ですから、ある意味では、パウロが教えを預言の上に置くことはまったく適切なのです。とりわけ、教えが交渉の余地のない使徒的財産の一部と見なされ、それが部分的には、教会に与えられた預言を会衆が吟味することを可能にする試金石の一つとして機能する場合には、そして何よりも、預言そのものが、使徒的財産とは異なり、教会による判断に服する場合にはそうです。もちろんこれは、ある特定の教師の発言が吟味される必要がないという意味ではありません。私は、預言は判断されなければならないが教えはその必要がない、と言っているのではありません。新約聖書には、教会に教師と教えを判断する責任を引き受けるよう励ます箇所があまりにも多くあります（テモテ第一1:3、6:3-5、テトス1:9-14、ヘブル13:9、ペテロ第二2:1など）。しかしそれは、預言がそのような判断を免れることはできないということを意味し、また、使徒的教えの集成、すなわち交渉の余地のない特定の内容が存在し、それがさらなる教えにとっても預言にとっても基準として機能しうる、ということを前提としているのです。

第四に、これは、キリストにある男性と女性の関係について聖書が語らなければならないことのすべてではありません。たとえば私は、キリストが教会を愛されたように自分の妻を愛せよとい

う夫たちへの命令――無制限の自己献身によって特徴づけられる、極めて高い基準――については何も述べていません。また、パウロがキリスト者の女性たちに期待している多くの事柄も列挙していません。とりわけ私は、ギリシアのエクレシア、すなわち公の集会では、女性たちが語ることはまったく許されていなかったという事実に、紙幅を割きませんでした。それとは対照的に、キリスト教のエクレシアでは、女性たちは御霊に支えられて、語るよう励まされていました。この意味で、パウロはコリントの社会的慣習にとらわれてはいませんでした。彼自身の考えでは、福音は女性たちを特定の文化的制約から本当に解放したのです。しかしそれは、それによって役割のすべての違いが取り除かれたという意味ではありません。私は、より広い新約聖書の土台に立って、なお存続する異なる役割は、パウロにとって、この造られた秩序の中での生活の一部なのだ、と論じる用意があります。それは「すでに」と「まだ」の間の緊張の中で――終末論的な御霊の賜物と、人がめとることも嫁ぐこともなくなる万物の完成との間の時において――のことです。

そして第五に、もしこの解釈が正しく、男性と女性の間に守られるべきいくつかの役割の違いがあるのなら、この教えは私たちを奴隷にするためではなく、私たちの益のためにあることを認識することが大切です。これは私がもっと詳しく取り上げたいテーマですが、ここではこれ以上述べません。

Copyright 1997 Council on Biblical Manhood and Womanhood (CBMW). 無断転載を禁じます。

HJRの論評：10年以上前にカーソンの本を見つけたとき、それは宝物を発見したようなものでした。神のことばへの忠実さと結びついた彼の思考の鋭さ、そして思考の深さには、今でも感銘を受けます。私は彼を、はじめに触れたウィリアム・ケリーとよく比べます。実際、理由はともあれ、彼はケリーの弱点も共有しているのです。

カーソンは、この二つの節をその文脈の中で解釈するにあたって、パウロが言及しているかもしれない文化的背景をまったく持ち出さずに済ませることに成功しています。彼は実際に首尾一貫した解釈を示しています。ただしそれは、沈黙を絶対的なものとするのではなく、（たとえばウィザリントンと同じように）預言の判断に限定するものです。主な論拠は創造の秩序です。律法は、男性が先に造られ、女性が彼の助け手として造られたという事実を指している、というのです。それが構造的・階層的な秩序と役割分担を生み出し、その中で女性は男性に従属している。これが、彼女が男性を教えるべきではない理由だ、というわけです。預言の判断は、既知の使徒的教えに基づき、それによって行われます。（ここで一つの問いが生じます。カーソンは、女性が預言してよいことを認めています。それなら、彼女は自分自身の預言を判断してよいのでしょうか。その場合、彼女が「教える」のは男性ではなく、女性です。）

この解釈は非常に筋が通っているように見えますが、私は次の点を考慮していただきたいと思いますし、次のような異論を持っています。

34節は、絶対的な沈黙の命令として理解することもできます。たとえそれが、コリント人への手紙第一11章5節と14章全体に矛盾し、そのため意味をなさないとしてもです。

カーソンの解釈は、一つの前提に基づいています。その前提がなければ、彼はこの解釈に至らないでしょう。すなわち、創造に基づく、つまり神のみこころによる、男性に対する女性の従属が存在する、という前提です。もしそうでなければ、彼はこの二つの節を、彼がしているようには解釈できないでしょう。

ここで見解が分かれます。創世記2章からは、直接的にも間接的にも、男性と女性の間のそのような地位上の違いを読み取ることはできません。むしろその反対です！

コリント人への手紙第一11章からも、それを導き出すことはできません。ここでもむしろその反対です。この章の核心となる言明は次のとおりです（コリント第一11:11-12）。

11 とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。12 女が男から出たように、同様に、男も女によって生まれるからです。しかし、すべては神から出ています。

男性がかしらであることは、彼の権威を示しているのではなく、この節の事実を示しています。すなわち、女性は男性から取られた、あるいは男性から生じたのであり、彼女は助け手として彼のそばに置かれたのであって、従属しているのではなく、同じ目線で対等なのです。

テモテへの手紙第一2章からなら、不平等を導き出すことができるかもしれません。カーソンがコリント人への手紙第一14章の二つの節を決して簡単ではないと言うのなら、このテキストについてはなおさらそう言えます。

11 女は、よく従う心をもって、静かに学びなさい。12 私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。むしろ、静かにしていなさい。13 アダムが初めに造られ、それからエバが造られたからです。14 そして、アダムはだまされませんでしたが、女はだまされて過ちを犯したのです。

テモテへの手紙第一が示しているように、エペソの教会には明らかに深刻な問題がありました。とりわけ、そこには、ここで求められていることのまさに反対のことをしていた、ある特定の女性がいたようです。彼女はまず学ぶのではなく、思い上がった仕方で教えていました。しかもおそらく、偽りの教えを教えていたのです。

そのため彼女は、自分の夫にとっても、彼女が教えていたほかのどの男性にとっても、助けではありませんでした。ここでの「支配する」とは、教える権威のことではなく、健全な権威や神のみこころにかなう権威のことでもありません。それはむしろ、権威を自分のものとして奪い取ることを意味しています。今では英語の聖書翻訳にもそのような訳が見られるようになっています。

アダムが先に造られたことは、権威を生み出しはしません。動物たちも彼より先に造られました。エペソのこの女性の例として、パウロはだまされたエバを挙げています。それによって彼は、この女性に起こったこと、そして最終的にはどの女性にも、どの男性にも起こりうることを描いているのです。誘惑されうるのは、すべての人です。

アダムは、エバがまだいなかったときに命令を受けました。彼はもっとよく彼女を教えるべきでしたし、彼女ももしかすると、もっとよく教えを受け入れるべきだったのでしょう。

ここから女性に対する一般的な教えることの禁止を導き出すことは、控えめに言っても説得力がなく、女性たちが教えていたことを暗に示しているほかのテキスト（プリスキラなど）と矛盾します。

最後に、カーソンが「恥ずべき」という語をどのように説明するのかは、未解決のままです。では、女性が男性の預言を判断することは恥ずべきことなのでしょうか。そして、女性の預言を判断する場合もそうなのでしょうか。神の前での恥なのでしょうか、それとも文化的文脈にとっての恥なのでしょうか。

エックハルト・J・シュナーベル（Eckhard J. Schnabel）

Schnabel, E. J., Der erste Brief des Paulus an die Korinther

Historisch-Theologische Auslegung Neues Testament, SCM R. Brockhaus/Brunnen Verlag, Witten/Gießen, 第4版 2018

34 女たちは教会の集会において黙っていなさいという指示は、ある人々によって、女性は公の礼拝において発言によって参加することがまったく許されない、という意味に理解されています。ほかの人々は、この言明をあまりにも問題が多いと考え、パウロがこの指示を出したとは思えないとし、その結果、34-35節はパウロのものではない注記（グロッサ）として取り除かれることになります。

第一の立場は、古代教会から宗教改革者たちに至るまで主張されてきました。その際、ルター（Luther）、シュペーナー（Spener）、ツィンツェンドルフ（Zinzendorf）その他の人々は、たとえば男性がその場にいない状況などには例外を認めていました。いくつかのキリスト者のグループや教派は、今日に至るまでこの立場を取っており、たとえば女性を聖書朗読への参加や聖餐への参加から締め出しています。34-35節を真正なものと考える解釈者たちの中には、これらの言明の中に、パウロの女性嫌悪的な態度と、聖書全体の男性優越主義の証拠を見る人々もいます。

多くの解釈者は、いわゆるmulier-taceat（女は黙れ）の段落を、パウロのものではない注記、あるいは挿入として取り除いています——34-35節か、33節後半-35節か、33節後半-36節のいずれかです。この資料批評上の操作のために、本文批評上の根拠と文献批評上の根拠が主張されています。写本上の所見についての議論は、上の「本文批評上の注」を参照してください。通常の基準を当てはめるなら、これらの節が手紙の本来の本文に属していたことに疑いの余地はありえません。文献批評上の根拠は、次のものに関わっています。1．34-35節が思考の流れを中断しているという論拠、2．異言と預言、そして教会の徳を高めるためのそれらの貢献が語られている文脈を指摘し、34-35節ではそのいずれについても語られていないとすること、3．パウロ的でないとされる言い回し、4．**34-35節と11章5節の間の矛盾。これは決定的な論拠と見なされ、「明白」と呼ばれ、しばしば「どうしても解消できない」という判断と結びつけられています**。示唆的なのは、34-35節の言明は、たとえパウロに由来するとしても、具体的な勧告的指示に必要な納得のいく根拠づけが欠けているので、「神学的正当性」を持たない、という主張です。これらの異論には、釈義を進める中で答えていきます。

明らかにある文書の本来の本文に属しているテキストを注記として取り除くことは、常に窮余の策です。神学的立場も、ポリティカル・コレクトネスも、文献上の真正性の問いに十分な信頼性をもって答えることのできる基準ではありません。釈義家は、自分が解釈しなければならないテキストを自分で作り出すのではなく、テキストを目の前に見いだし、できる限りそれを説明しなければなりません。著者の似たような言明との比較や、注意深い文脈分析によって見いだせると期待される解決策を探し求めることは、歴史家にとって当然のことです。**難しいテキストの場合には、もっともらしくはあっても、もしかすると完全には満足のいかない説明で満足しなければならないこともあります。 難しいテキストを除去することは最後の手段（ultima ratio）であり、多くの（保守的な人々だけではない）釈義家の判断によれば、34-35節の場合には不必要です。**

34-35節をパウロのテキストとして説明しようとするいくつかの提案は、説得力がありません。

1. 11章5節と14章34-35節の言明は、コリントとの文通の異なる段階を反映している。沈黙の命令は後の手紙に属しており、その中でパウロは、より新しい情報に基づいて、コリントの熱狂を抑えるためにより厳しい措置を取らざるをえないと感じた、というもの。問題の多い分割仮説はさておき、この説明は、11章16節と14章33節後半におけるほかの教会への言及のゆえに成り立ちません。

2. 34-35節のテキストはパウロによって書かれたが、彼の意見としてではなく、男性優越主義者たちが女性に語ることを禁じようとしていたコリント人の手紙からの**引用として**書かれた。彼は36節でこの立場を退けている、というもの。**テキストの文言の中には、34-35節が引用であり、36節がパウロのコメントであることを読者に知らせるような手がかりは何もありません。**

3. パウロは11章5節で女性の参加を譲歩として認めているが、それは不本意ながらであり、かぶり物あるいは髪型の問題との関連においてである。14章34-35節で私たちは彼の本当の意見を聞く、というもの。しかし、11章5節が譲歩であるということは、文言からも文脈からも確かめることができません。

4. 11章5節で問題になっているのは私的な家庭礼拝であり、14章34-35節で問題になっているのは公の礼拝である、というもの。しかし11章で問題になっているのは一貫して教会の集会であり、教会は当時、家々で集まっていました。つまり、家の集会と教会の集会の区別は存在しなかったのです。

5. 11章5節では、公に預言することを許されている独身の女性たちが語られているのに対し、14章34-35節では既婚の女性たちが語られている、というもの。どちらも、テキストから必然的に出てくるものではない想定であり、とりわけ11章5節に関しては説得力がありません。

6. 宗教改革者たちや敬虔主義者たちのもとでは、11章5節では公に祈り、預言することを許された職務を担う女性たちが語られており、14章34-35節では教会の職務を持たない女性たちが語られている、という説明がしばしば見られます。そのような区別は、テキストの中に認められず、1世紀のキリスト者の教会にとっても説得力がありません。

7. パウロはラビの伝統に従っている。それによれば、女性たちは礼拝において公式の機能を担うことも、学びの家で質問することも許されていなかった、というもの。関連するラビ文献の年代決定の問題はさておき、この説明も根拠が十分ではありません。パウロはコリント人への手紙第一のどこでも、公式の機能と非公式の機能とを区別していないからです。

8. パウロは14章34-35節で、女性たちによる妨げとなる**割り込みの発言や割り込みの質問**を禁じているのであって、御霊によって引き起こされる女性たちの祈りや預言を禁じているのではない、というもの。この説明は、33節後半から礼拝の秩序についての別の問題が扱われていることを前提としていますが、それはテキストの中で示されていません。**また、割り込んで話す男性たちも十分に想像できるのに、なぜパウロが割り込んで話す女性たちについてだけ語っているのかも明らかになりません。**

9. より説得力があるのは、パウロが教会における女性たちの異なる役割について語っており、それが二つの社会的経験を反映している、という提案です。11章5節では礼拝における祈りと預言が問題になっており、14章34-35節では男性たちの協議と教えをめぐる話し合いが問題になっている、というのです。E・シュテーゲマン（E. Stegemann）とW・シュテーゲマン（W. Stegemann）によるこの説明は、**男性の名誉の観念と女性の恥とが役割を果たしている文化的慣習が関わっていること**を正しく認識しています。しかし、「礼拝の儀式」と「協議」の区別には説得力がありません。そのうえ、「教えをめぐる話し合い」と説明されるこれらの「協議」は、恥の原因と同じくらい、ぼんやりしたままです。**34-35節を11章の文脈の中で理解するための鍵は、次の点を指摘することです。1．権威について。34節でパウロは従うことについて語り、11章2-12節では女性の「かしら」としての男性について語っています。2．女性たちが「家で」尋ねることのできる男性たちとの関係について（35節）。3．恥について（αἰσχρός、35節）。34-35節で問題になっているのは、明らかに、文化的な問題が役割を果たしている事柄であり、そこでは、女性と、彼女に対して責任を負う男性――夫、父親、あるいは後見人――との関係、そして公の場でのふるまいと「家での」ふるまいの違いが決定的だったのです。** 直前の文脈では預言的な発言の判断が問題になっており（29-33節）、後に続く文脈でも、37節で同じように預言者たちが言及されています。**ですから、次の説明が最も説得力があります。コリントの教会では、女性たちが、預言を吟味し判断する過程に加わっていた（29節）。** 彼女たち自身が預言的な発言のカリスマを持っていた可能性はありますが、再構成のためにはそれは必要ではありません。こうした判断が進められる中で、女性たちが、自分の夫、父親、あるいは後見人によって伝えられた預言について判断を下す場合がありました。**家長（pater familias）を批判的に問いただすことは、夫あるいは父親の権威に対する侮辱（αἰσχρός）として、また家の秩序、ひいては教会の秩序を損なうものとして感じられたでしょう。パウロは女性たちに、自分の夫、父親、あるいは後見人の預言について持っている質問は家で尋ねるよう指示しています。それは、家のためにも教会のためにも品位を保つためです。**

この解釈に対してよく持ち出される異論は、そうしたことはすべて、テキストにそれほどはっきりとは書かれていない、という指摘です。それは正しいのですが、**前提とされている想定は、テキストの中にはっきりした手がかり（女性、男性、家、恥）を持っており、歴史的にも文化的にも**

説得力があります。 W・シュラーゲ（W. Schrage）の唯一の異論、すなわち「なぜほかならぬ29節後半が念頭に置かれているのか、また、なぜ預言する能力がその預言を判断する可能性をも含まないとされるのかは、ほとんど根拠づけられない」というものは、根拠が十分ではありません。それは、同時代の社会において決定的な意味を持っていた、女性の公のふるまいについての基準を考慮に入れていないのです。[39]

女性たちは**従いなさい**（ἀλλὰ ὑποτασσέσθωσαν）。逆接の接続詞ἀλλά は、**女性たちの沈黙が、女性たちが自分の夫に従うことと関係しており、したがって「無条件に」あるいは「一般的に」意図されているのではない**ことを明らかにしています。

律法も言っているように（καθὼς καὶ ὁ νόμος λέγει）という言い回しは、多くの人によって創世記3章16節（「あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる」）に関連づけられています。しかしそれは難しいことです。そこでは女性の沈黙についても、女性の服従についても語られていないからです。民数記12章1-15節も、関連テキストとして提案されてきました。預言の賜物を受けていたミリアムは、モーセの権威に疑問を呈したとき神に罰せられましたが、同じくモーセに疑問を呈したアロンは罰せられませんでした。ラビの釈義は、女性たちが公の礼拝の集会で語らなかったという事実について、申命記22章16節（「そして娘の父は長老たちに言いなさい」）を根拠としていました。Sifre Deut 22,16 §235 (117b)には、こう言われています。「ここから、女には男の場所で（あるいは、男の代わりに）語る権利がないことが導かれる」。より説得力があるのは、パウロが一般的に創造の秩序（創世記2章）を指し示している、という説明です。

問題になっているのは、語ること（λαλεῖν）一般ではなく、「恥」をもたらす（αἰσχρόν ἐστιν）ような語り方、すなわち、ふさわしくない、恥ずべき、スキャンダラスな語り方です。11章5節でパウロは、頭に何もかぶらずに祈り、それによって自分の「かしら」を辱める、すなわち自分の夫（あるいは男性）に恥をもたらす女性たちについて語っていました。ここにも同じ文化的文脈があります。女性は、教会の集会という公の場において、夫（あるいは男性）の名誉を傷つけ、そうして彼に恥をもたらしてはならないのです。

女性が礼拝で祈ったり預言したりしても、彼女は夫に恥をもたらしません。しかし、彼女が批判的な質問によって夫の預言的な発言の真正性を吟味するなら、彼女は確かに夫に恥をもたらします――反対尋問は常に気まずく屈辱的な事柄であり、とりわけそれが否定的な結果に終わる場合にはそうです。ですから、妻たちはこの過程に加わるべきではないのです。

HJRの論評：シュナーベルの仕事に、彼がまだ挙げていないこと、考え抜いていないことを付け加えられることはめったにありません。彼の注解書は大きな財産です。ここで挙げたすべての専門家において、論拠の重みづけが異なり、そのため結論も異なっています。彼の説明は説得力がありますが、彼自身が認めているように、テキストからそれほど直接には出てきません。それはもしかすると、あらゆる説明の試みの中で最良のものかもしれません。このテキストが――この手紙のほかのいくつかの箇所と同じように――引用であるという可能性を、彼は説得力のある根拠なしに退けています。これらの節と周囲との矛盾、そしてその真正性への疑いについての扱い

が、私には不十分に思えます。いずれにせよ、彼にとっては、どのようにひねり回しても、これが全面的な沈黙の命令ではありえないことは明らかなのです。

まとめと個人的な結論

この二つの節の解釈については、四つの主な立場（とそのさまざまな変形）があります。

- 礼拝における女性の絶対的な沈黙
- 条件つきの、あるいは状況に応じた沈黙、または（男性にもまったく同じように求められている）ふさわしい参加――ある人々による制限：教えてはならず、そのため預言の判断もしてはならない
- パウロが論駁するために持ち出している引用である。
- 後からの挿入であり、本来パウロのものではない。

これらの変形のどれ一つとして、100％確かでも、問題がないわけでもありません！内容の点では、私はこれまでの寄稿に何も付け加えることができません。私は、引用か注記（グロッサ）、つまりパウロのものではない挿入のほうに傾いています。私の主な理由はこうです。

34節は、私の考えでは絶対的な沈黙の命令です。女性たちは質問することさえ許されていませんでした（35節）。質問することさえ許されていなかったのなら、それは私にとって、絶対的な沈黙を意味します。

しかしそれは、14章の文脈においても、手紙全体の文脈においても、ありえないことです。とりわけコリント人への手紙第一11章5節は、原則的な言明です。それは、集まりの中でも外でも、一般的な実践を描いています。その背景には、男性にも女性にも与えられる御霊の賜物と、万人祭司（もっとも、コリント人への手紙はこれをはっきりとは扱っていませんが）があります。それはまた、新約聖書全体においてもありえないことです。イエスが女性たちにどのように接したかが、それに反しています。パウロが女性たちを同労者として持っていたこと、そして彼が彼女たちの奉仕をどのように描いているかも、それに反しています。

言及されている律法は見つかりません――創世記2章あるいは3章との関連づけは非常にあいまいであり、それ自体がすでに家父長的な方向への解釈です。このようにして、両性の関係は対称的にではなく、非対称的・階層的に定められ、それによって従うことと沈黙が根拠づけられているのです。最初の人間たちの関係を対等なものと解釈するなら、それらの根拠づけは崩れ去ります。新約聖書における従うことは常に相互的なものであり、神の国とその教会においては、決して階層的な違いによって根拠づけられることはありません。キリストにあって、そうした違いは取り除かれています――世とその関係の中においてではなく、すでに新しい創造を表している教会においてです。ですから、創世記2章と3章について的を外している人は、パウロのテキストをうまく解釈することができないでしょう。

- もしそれが挿入であるなら、それは私には、良い種の間に蒔かれ、終わりまで育つ偽りの種、あるいは毒麦のように思われます。この二つの節の影響史は、私の考えでは大惨事です。沈黙する女性たちは、まさにあの古い蛇が望むものです――これらのことばが何を意味しうるのか

を突き止めるための、何百万時間もの研究と争いと同じようにです。神はそのようなことを許すことがおできになるのでしょうか。神は、私たちが理解できないもっと多くのことを許しておられます！

- 引用としてなら、確かに意味が通ります。それはパウロのことばでも考えでもないからです。しかしその場合でも、この引用はこの箇所にうまく合わないと私は思います。
- もしそれがパウロのことばであるなら、彼が絶対的な沈黙を意味していたはずはありません。その場合、私は、（夫の）預言を判断することの禁止を、直接の文脈における最良の説明と見なすでしょう。

「時は尽き、だれもが当惑して見つめる。

幕は閉じ、すべての問いは開かれたまま。」（ベルトルト・ブレヒト〔Bertolt Brecht〕『セチュアンの善人』〔Der gute Mensch von Sezuan〕を自由に改変。同じテーマについてのエルヴィン・シュミット〔Erwin Schmidt〕の文章に見つけたもの。）

もう一度ブレザレン運動について

個々の抜粋を読んだ人は、絶対的な沈黙の命令を主張し、実践し、擁護してきたのが、ほかならぬブレザレン運動であることに気づくでしょう。私自身、この運動の中で、いわゆる「閉鎖派（エクスクルーシブ）」の流れの中で育ちました。40歳になって初めて、引っ越しを機に、穏健なキリスト者の教会（ケンプテン）に移りました。それまでは、私自身がこのブレザレン版の見解を主張していました。とはいえ正直に言うと、物心ついたころからずっと、それは私には疑わしく思えていました。私がフェミニストだからではありません。私の心は、それに対して一度も心からの「はい」を見いだすことができなかったのです。そして「ブレザレン」の外にいるキリスト者たちに対して、私はそれを本当に説得力のある形で根拠づけることが一度もできませんでした。聖書に忠実で神のことばを愛していることを私が知っているほかの釈義家たちを読むと、彼らはこの見解を取っていないことに気づきます。なぜでしょうか。別の問い方をすれば、ブレザレン運動の兄弟たちは、この沈黙の命令のどこに、それほど特別で、それほど擁護する価値のあるものを見いだしているのでしょうか。私が思うに、なぜこれが姉妹たち、つまりその場にいる人々の50％に当てはまるべきなのかを、極めて徹底的に吟味しなければならないはずです。二つの短い文が、これほど広範囲に、しかも教会に不利な形で解釈されるのなら、なおさらです。そして、この運動がそれをほとんど自分たちの独自の特徴の一つのように扱い、それによって自分たちの分離さえ根拠づけているのなら、なおさらです。

さて、姉妹たちに対して、礼拝の集会で祈り、預言するようにという積極的な命令、要請は存在しません。この沈黙からの論証[40]を、そのように自分なりに解釈することはできます。しかし私は、まったく同じように、こう言うこともできるでしょう。それはあまりにも当然の決まりであり、使徒的文書によって裏づけられていた（これもまた沈黙からの論証ですが）ので、そのような要請はまったく必要なかったのだ、と。

次の人々とその賜物と奉仕、そして次の出来事は、先入観なしに見るなら、公に語ることなしには――そして集会の中で語ることなしにも――考えることができません。

使徒2:17-18：神は言われる。終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。18 その日わたしは、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。

使徒21:8-9：翌日そこを出発して、カイサリアに行き、あの七人の一人である伝道者ピリポの家に入って、そこに滞在した。9 この人には、預言をする未婚の娘が四人いた。

預言（つまり、神のほうから、神のために語ること）は、パウロにとって教会の集まりの本質的な構成要素です。「ですから、私の兄弟たち、**預言する**ことを熱心に求めなさい。また、異言で語ることを禁じてはいけません」（コリント第一14:39）。使徒の働き2章は、まさにこの集会・教会の始まりです。この教会のために、またこの教会の中で、すでに旧約聖書で予告されていたとおり、預言することが起こるのです。あの四人の娘たちは、と私は問います、どこで預言したのでしょうか。家ででしょうか。しかし、だれのためにでしょうか。彼女たちは神託のように訪問を受けたのでしょうか。まずありえないでしょう。市場ででしょうか。おそらく違います。集まりの中ででしょうか。それが最もありそうなことです。パウロは預言することをそこに位置づけているのですから。

ローマ16:1：ケンクレアにある教会の奉仕者（diakonos）で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。

教会が集まるときに何も言うことを許されずに、ある教会の奉仕者であるということを、どうして考えることができるでしょうか。

ローマ16:12：主にあって労苦しているツルパイナとツルポサによろしく。主にあって非常に労苦した愛するペルシスによろしく。

教会が集まるときに何も言わずに主にあって労苦するということを、どうして無理なく考えることができるでしょうか。

ピリピ4:2-3：ユウオディアに勧め、シンティケに勧めます。主にあって同じ思いになってください。3 そうです、真の協力者よ、あなたにもお願いします。彼女たちを助けてあげてください。この人たちは、福音のために私とともに戦ったのです……

礼拝で何も言うことを許されずに、どうして福音のためにともに戦うことができるでしょうか。二人の女性は、ピリピの教会の指導者だったように思われます。そうでなければ、なぜほかならぬ彼女たちの不一致が、教会全体にとっての危険と見なされたのでしょうか。もし彼女たちが、集まった教会の中で一度も何も言わなかったのなら、こうしたことはすべて理解できませんし、想像もできません。

コロサイ4:15：ラオディキアの兄弟たちに、また、ニンファと彼女の家にある教会に、よろしく伝えてください。

ニンファは自分の家に教会を持っていました。彼女はもてなす側として家を提供していました。もしかすると、彼女か彼女の夫が裕福だったからかもしれません。彼女が礼拝の中で一度も声を上げなかったということを、先入観なしに想像できるでしょうか。

さて、これらのテキストすべてを――ほかにもまだありますが――ただコリント人への手紙第一14章34-35節というレンズだけを通して説明することもできます。そうすれば、別の結論に至ります。そうすると、この二つの節に、ここに挙げたほかのすべてのテキストに対する解釈の主導権を与えることになるでしょう。しかし、この決定は誤っています。それは、ほかのすべてのテキストのより大きな重みを押し切ってしまうからです。それは注意深い比較考量と比較ではなく、残念ながら恣意的な決めつけです。とりわけ、この沈黙の命令は、ほかのただ一つの聖書箇所によっても明確に支持されていないからです。

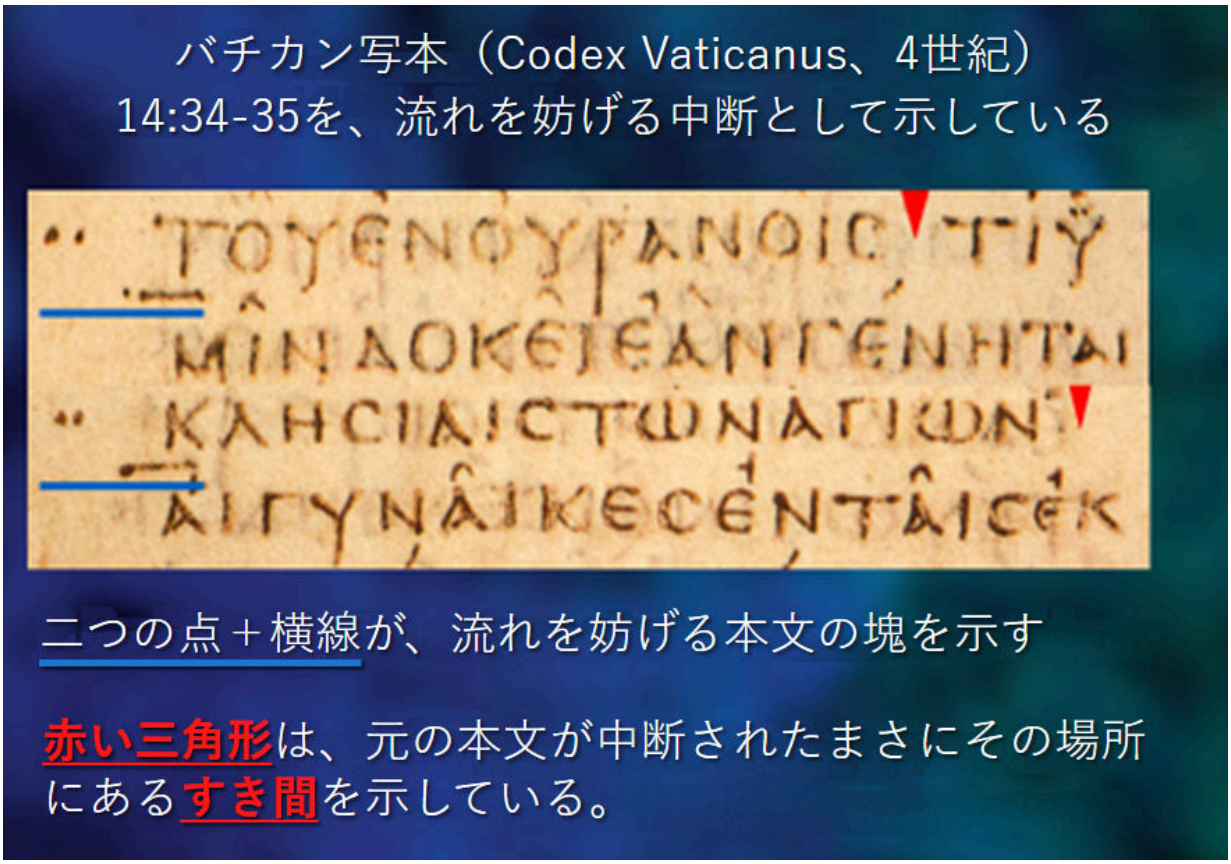
しかも、ほかならぬブレザレン運動が、信者の万人祭司を擁護していました。それがこの運動の特徴であり、また強みでもありました。しかし、賛美と感謝のいけにえがささげられるときに、どうして姉妹たちを忘れることができたのか、まさにその大いなる聖書知識のゆえに、私には理解できません。姉妹たちも一緒に歌い、心の中で静かに一緒に祈ることによって霊的ないけにえをささげているのだ、というのは、間に合わせのなだめにすぎません。御霊は、女性を通しても男性を通しても自由に働かれます。それとも、御霊は集会において男性の中でだけ働かれるのでしょうか。

Hans-Jörg Ronsdorf、アウクスブルク、2022年11月1日

その後、本文研究から新しい事実が私に知られるようになりました。それらは、上で述べた私の推測を強く裏づけているように思われます。すなわち、この二つの節はパウロに由来するものではなく、したがって効力を持たない、ということです。私の本『Frauen, vergebt uns!』（『女性たちよ、私たちを赦してください！』）の第4版から、該当するテキストをここに転載します。

第4版の序文で示唆したとおり、本書のこの6.2.8節は加筆されました。古い写本に関わる、（少なくとも私にとっては）新しい知見があるからです。フィリップ・バートン・ペイン（Philip Barton Payne）はこのテーマに集中的に取り組み、ほかの何人かの本文研究者たちと同じように、次のような目立った点があることを認識しました。いくつかの写本では、34節と35節は私たちの聖書と同じ場所にありますが、ほかの写本では40節の後にあるのです。比較的長いテキストが移動されたことになります。これは非常に異例なことであり、次のような推測を可能にします。これらの節は後から挿入されたのだ、と。それらは欄外に書かれており、通常、次の写字生が、それらが以前に書き落とされたのかもしれないと考えて、本文に挿入しました。どこに挿入するかは、その写字生が決めたのです。

この説は、4世紀の最も大部で最も重要な写本の一つであるバチカン写本（Codex Vaticanus）における発見によって裏づけられています。そこでは、これらの節が実際に挿入として印をつけられているのです。



画像出典：Biblioteca Apostolica Vaticana

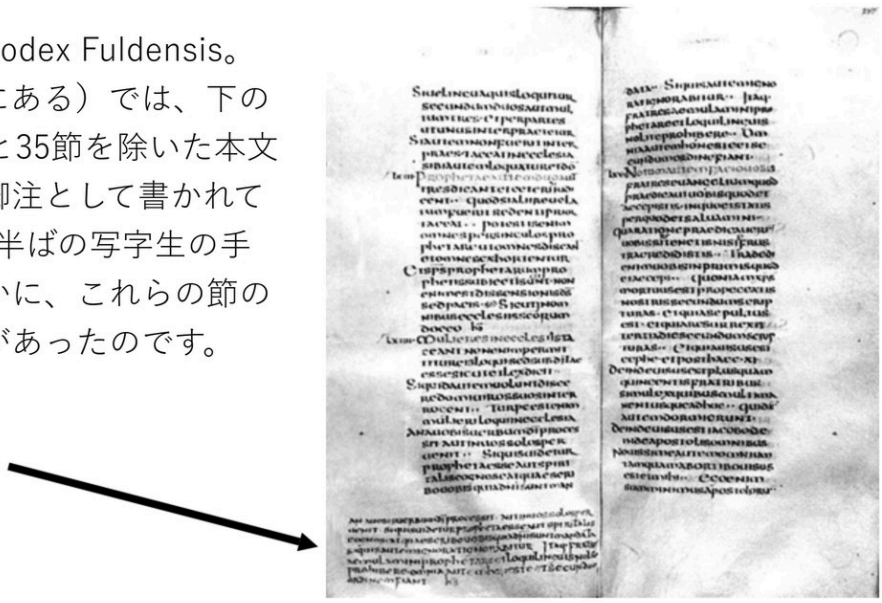
これについて、この問題について画期的な研究をしたフィリップ・B・ペイン（Philip B. Payne）のことばを引用します。「写本から導かれる七つの理由と、これらの節のことばから導かれる九つの理由が、私と多くの人々に、これらの節はパウロの元の手紙にはなく、後から付け加えられたのだと確信させています。ここでは三つだけをまとめておきます。第一に、これらの節の明白な意味は、『すべての人』が教え、預言することができるというこの章の言明と、また女性たちが預言するという11章5節の確認と矛盾しています。第二に、パウロ書簡の写本には、これに少しでも近い長さのテキストの段落で、（異なる写本において）これほど互いに離れた二つの異なる場所に、明白な理由もなく置かれているものはほかにありません。

第三に、最古の聖書が、これらの節を後の真正でない付加として印をつけています。第一に、これらの節はこの章のほかの多くの言明と矛盾しています。矛盾を避けるために、多くの人は、パウロが黙らせているのは妨げとなるおしゃべりだけだとか、1962年に初めて提案されたように、預言を判断することだけだ、と言います。しかしこれらの解釈は、この段落で三度も強調して繰り返されている、無制限の沈黙の要求に合いません。もし34節が預言の判断だけを禁じているのなら、それは35節が禁じている発言をも許していることになります。結局のところ、何かを学びたいという願いから質問をすることは、預言を判断することとはまったく別のことであり、それが妨げとなることはまれです。これらの解釈は、パウロが自分がたった今書いたことに矛盾する、という結果になってしまいます。第二に、これらの節は、すべての『西方』ギリシア語写本では40節の後に続いていますが、ほかのたいていの写本では33節の後に続いています。ここにあるのは、6世紀の有名な『西方』写本Dです。この画像の最初の完全な段落は14章の終わりです。次の

段落が34節と35節です。最後の部分で15章が始まります。34節と35節が置かれている二つの異なる場所は、だれかがそれらを欄外に書き、後の写字生たちがそれらを33節の後か40節の後のどちらかに挿入したことを示唆しています。説明させてください。

聖書の原文を確定するための基本原則は、『ほかのテキストの成立を最もよく説明するテキストが、最も原文である可能性が高い』というものです。パウロの手紙のどの写本も、明白な理由もなく、大きなテキストのまとまりをこれほど遠くまで移動させてはいませんし、初期の読者のだれ一人として、このテキストの位置を批判しませんでした。しかし、写字生たちが欄外のテキストを本文に書き写すことはよくありました。たとえば4世紀のバチカン写本には、マタイの福音書の本文の欄外に古いテキストが書かれている箇所が20あります。そのうち3つを除くすべてが、その後の事実上すべての写本の本文に含まれています。ギリシア人は、女性は公の集会で静かにしているべきだと固く信じていました。ですから、紀元200年より前のいつか、ある読者が、これらの節が表している『よく知られた、あるいは一般的な知恵』を欄外に書き加えたとしても、ほとんど驚くには当たりません。これらの節が置かれている二つの場所について、知られている写字生の慣行に合致する唯一の説明は、だれかがこの二つの節をまず写本の欄外に書き、後の写字生たちがそれらを33節の後か40節の後のどちらかに挿入した、というものです。常識に従えば、ありふれたこと――欄外のテキストを本文に挿入すること――のほうが、ほかに一つも例が知られていないほど異例なこと――明白な理由もなく、これほど多くのテキストをこれほど遠くまで移動させること――よりも、起こりやすいのです。第三に、その正確さで広く称賛されている私たちの最古の聖書、バチカン写本は、教会で女性たちを黙らせるこれらの節を、真正でない、誤った中断として印をつけています。確かに、34-35節は、現存するすべての写本のどこか（つまり33節の後か40節の後）に出てきます。これは極めて早い時期の挿入を必要とします。しかし、それらを真正でないと印をつけているのはバチカン写本だけではありません。ウィクトル司教（Bishop Victor）は、フルダ写本（Codex Fuldensis）の下の欄外に、これらの節を省いた訂正テキストを書かせました。また非西方本文の写本88は、これらの節を33節の後では省いていますが、40節の後に、それらが33節の後に続くべきことを示す記号をつけて挿入しています。これらの節はウィクトルのコリント人への手紙第一の本文証拠には出てこないのですから、『これらの節はコリント人への手紙第一のすべての本文証拠に出てくる』というダン・ウォレス（Dan Wallace）の主張は正しくありません（https://bible.org/article/textual-problem-1-corinthians-1434-35）。本文学者たちは、同じ一つの写本の中の異なるテキストに、異なる写本記号を割り当てます。14章34-35節の段落は、これらの別々の写本記号によって区別されるすべてのテキストに出てくるわけではありません。**14章34-35節のテキストがすべての写本によって『支持されている』というのは正しくありません。**」

フルダ写本（Codex Fuldensis。原本はフルダにある）では、下の欄外に、34節と35節を除いた本文が訂正または脚注として書かれています。6世紀半ばの写字生の手元には、明らかに、これらの節のないテキストがあったのです。



フルダ写本（F）はウルガタ訳の写本で、新約聖書の正典23書のテキストと、ディアテッサロン、そしてラオディキア人への手紙を含んでいます。それは新約聖書の年代の確かな写本の中で最も古いものの一つであり、重要な学者であるカプアの司教ウィクトル（Victor of Capua）によって編集されたことが知られている唯一の初期の新約聖書写本です。それはウルガタ訳のテキストの二番目に重要な証拠であり、ディアテッサロンの完全なテキストの最も重要で最も古い証拠です。この写本は、コリント人への手紙第一14章34-35節のテキストの真正性をめぐる議論において、最も重要とは言わないまでも、重要な証拠です。それは541-546年にカプアで、ウィクトル司教の委託によって書かれ、彼自身によって点検され、訂正されました。黙示録の終わりには、ウィクトル自身が書いた546年5月2日という日付があります。ウィクトルは写本のテキストを二度目に点検したので、二つ目の日付――547年4月12日――もあります。

「有名なローマ・カトリックの学者ジョセフ・A・フィッツマイヤー（Joseph A. Fitzmyer）は、『今日の解釈者の大多数』が、このテキスト［14:34-35］は後の付加であるという結論に至っていると述べています。本文学者のキム・ヘインズ＝アイツェン（Kim Haines-Eitzen）は、これを『今日のほとんどすべての学者』について確認しています。おそらく最も評価の高い福音派の本文研究者であるゴードン・フィーは、これらの節はパウロの手紙にはなく、写本の欄外に付け加えられ、後の写字生たちによって33節の後か40節の後のどちらかに挿入されたのだと論じています。私の本Man and Woman, One in Christ, 226-227は、コリント第一14:34-35はパウロの元の手紙にはなかったという結論に至っている55の研究を挙げています。227-53頁では七つの外的理由が、253-65頁では九つの内的理由が、このテキストがパウロに由来しないことを示すものとして挙げられており、265-67頁では注記説に対する異論に答えています。全体として、私の考えでは、本文批評上の証拠は、これが注記であり、おそらく紀元197年より前にある読者によって書かれたものであることを強く支持しています。」

最終的な評価

このテーマに非常に集中的に取り組んだもう一人の著者、アンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett）の本Men and Women in Christから引用します。「読者の中には、34-35節を削除するの

はあまりにも好都合すぎると感じる人もいるかもしれません。それは理解できることです。私たちは、聖書から難しいテキストを削除しようという提案に対しては極めて懐疑的であるよう、正しく教えられています。ここで私たちが扱っているのが、内的証拠だけに基づいた非真正性の論拠ではないことを強調しておくことが大切です。もしこれらの節の問題が、文脈と一致しないこと、旧約聖書の内容に関して明らかな誤りを含んでいること、そして満足のいく意味を与える解釈上の解決策が見つかっていないこと、という事実に限られるのなら、私たちはそれらを本文に残し、自分たちの限界を認め、将来の新しい光を待ち望むでしょう。しかしここでは、外的な徴候も説明されなければなりません。これらのことばが異なる写本で異なる場所に見られるのは、どうしてなのでしょうか。何かがうまくいかなかったのですが、それは何だったのでしょうか。これまで見てきたように、外的証拠のこの特徴に対する最もありそうな解決は、34-35節がパウロに由来するのではなく、本文に取り込まれた初期の欄外注に由来する、ということです。

このことは、フルダ写本におけるウィクトル司教の注記によって、さらに裏づけられます。その注記は、この二つの節がまったく欠けているテキストが存在したことを示しています。そして、バチカン写本からの証拠についてのペインの見解が正しいなら、それはさらなる裏づけとなります。外的証拠と内的証拠を合わせるなら、この二つの節を退ける論拠は明白です。それらを削除することは、イデオロギー的な策略ではありません。証拠に従うということなのです。原則として、これは、ほかの付加（たとえばマルコの福音書の結び、ヨハネ5:3-4、使徒24:6-7）を退けることと何ら変わりません。それらは本文に現れ、しばらくの間私たちの聖書に収められていましたが、入手できる証拠を吟味した結果、やはりおそらく真正ではないという結論に至ったときに取り除かれたのです。少なくとも、私たちの聖書には、たとえば次のような脚注があるべきです。写本上の手がかりは、34節と35節がパウロに由来しない後の付加である可能性を示しており、したがって省かれるべきである、と。より良いのは、34-35節を斜体にするか脚注に移し、写本間の食い違いの性質から、それらの真正性が疑わしいと推測される、という説明を添えることでしょう。『主のおしえは完全で、たましいを生き返らせる』（詩篇19:7）。私はここで、これを真正性の基準として提案しているのではありません。しかし、もし読者の中に、コリント第一14:34-35から自分のたましいがあまり生き返らされなかったことに罪悪感を覚えてきた人がいるなら、その人は今、ほっと息をつくことができるかもしれません。これらの節は、もしかするとそもそも聖書に属していないのかもしれないのです。」

この章を次のように締めくくらせてください。私はこの本を書いたとき、すでにこの見方を知っていましたが、このテキストに疑問を呈する勇気はありませんでした。しかし今や、事実関係は、この二つの節を神の霊感されたことばとして理解することがほとんど不可能であるようになっています。このことは、はっきりとした違いを生みます。なぜでしょうか。（引用説を除く）すべての説明の試みは、これが絶対的な沈黙の命令であるという点で挫折するからです。どの解釈においても、説明の試みはこの要求の明確さと衝突します。しかしこの要求はパウロに由来するのではなく、世俗的な考え方に対応するものなのです。何と悲劇的なことでしょう！女性たちのために尽力する人々は、フェミニズムだ、世に迎合しているのだと非難されるのですから。敵、すなわち反対者であり、かき乱す者である存在が、聖書の中に何かを密かに持ち込むことに成功し、それがあらゆる世紀にわたって、教会の女性たちと教会全体に致命的な結果をもたらしてきた、

ということがありうるのでしょうか。私たちは、このような悲劇的な状況からどのように抜け出すことができるでしょうか。この誤った想定は、今日に至るまで、どれほど重大なものなのでしょうか。

ここで、最終的にはっきりと立場を取り、事実に向き合わなければなりません。

神が私たちをあわれんでくださいますように！

この章の終わりに、34節と35節を除いたコリント人への手紙のテキストを読み、それがどれほど筋の通った、意味の通るものとしてそこに立っているかを確かめてください。

「あなたがたはみな、一人ずつ順番に預言することができるからです。それは、すべての人が学び、すべての人が励まされるためです。そして、預言者たちの霊は預言者たちに服従します。神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです。聖徒たちのすべての集会においてそうであるように。それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。もしだれかが、自分は預言者である、あるいは霊の人であると思うなら、私があなたがたに書いていることが主の命令であることを認めなさい。しかし、もしだれかが無知であるなら、その人は無知のままでいなさい。ですから、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また、異言で語ることを妨げてはいけません。ただ、すべてのことを品位をもって、秩序正しく行いなさい。」（コリント第一14:31-33,36-40）

イエスの教会の集会において、女性に対する沈黙の命令はかつてもなかったし、今もありません！ギリシア語の知識がなくても、引用説がなくても、そこにたどり着くことができます。多くの女性たちを同労者として持ち、その名前を挙げ、彼女たちを頼りにし、彼女たちが福音のためにともに戦った、その使徒が、彼女たちの口を封じたなどということが、本当にありうるのでしょうか。

最後に私は問います。姉妹たちが黙っていることに最も大きな関心を持っているのはだれでしょうか。キリストのからだの半分が口を閉ざすことに、だれが関心を持っているのでしょうか。集まりの中で女性たちが男性たちを補わないことに、だれが関心を持っているのでしょうか。それは、あの古い蛇、反対者であり破壊者であり、偽りの父であり、初めから人殺しである者です。女性に対する彼の敵意だけが、このような目くらましの理由でありえます。このことについて、指導と教えの任にある男性たちは、いつかその責任を負わなければならないでしょう。

Hans-Jörg Ronsdorf

アウクスブルク、2023年9月22日

注

1. Kelly, W., Einführende Vorträge zum Neuen Testament, XV, Faithlife, Bellingham, WA 2022, 11.
2. Grant, F. W., The numerical Bible; being a revised translation of the Holy Scriptures with expository notes: arranged, divided, and briefly characterized according to the principles of their numerical structure: Acts to 2 Corinthians (Study Text), Loizeaux Brothers, Neptune, NJ 1901, 523.
3. Hole, F. B., Grundzüge des Neuen Testaments, Christliche Schriftenverbreitung, Hückeswagen 1989, 972–973.

4. MacDonald, W., Kommentar zum Neuen Testament, Christliche Literatur-Verbreitung, Bielefeld 2018, 第7版, 761–762.
5. Strack, H. L. - Billerbeck, P., Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung Oskar Beck, München 1922–1926, 第3巻, 467.
6. Strack, H. L. - Billerbeck, P., Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung Oskar Beck, München 1922–1926, 第3巻, 469.
7. Henry, M., Matthew Henry's commentary on the whole Bible: complete and unabridged in one volume, Hendrickson, Peabody 1994, 2271.
8. Schlatter, A., Die Korintherbriefe: Ausgelegt für Bibelleser, VI, Schlatters Erläuterungen zum Neuen Testament, Evangelische Verlagsanstalt, Berlin 1954（第2版）, 154–155.
9. Morris, L., 1 Corinthians: an introduction and commentary, VII, Tyndale New Testament Commentaries, InterVarsity Press, Downers Grove, IL 1985, 192–194.
10. Ciampa, R. E. - Rosner, B. S., 「1 Corinthians」, in Commentary on the New Testament use of the Old Testament, Baker Academic; Apollos, Grand Rapids, MI; Nottingham, UK 2007, 743.
11. 伝統的な見解の徹底した擁護は、Archibald Robertson, Alfred Plummer. A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle of St Paul to the Corinthians. 前掲書 324-328頁、および——引用説にも反対して——Arthur Rowe. 「Silence and the Christian Women of Corinth: An Examination of 1 Corinthians 14:33b-36」. Communio viatorum (Ecumenical Institute of the Comenius Faculty, Prag) 33 (1990) 1-2: 41-84 に見られます。
12. Daniel C. Arichea. 「The Silence of Women in the Church」. Bible Translator 46 (1995) 101-112、特に102-104頁。
13. 年代順に、コリント第一14:34-36についての引用説の主張者として——私の知る限り——次の人々を挙げることができます。Jessie Penn-Lewis. The Magna Charta of Woman. The Overcomer Book Room: Bournemouth (GB), 1919（下記の1975年の復刻版を参照）; Katharine Bushnell. God's Word to Women. 自費出版: Oakland (CA, USA), 刊行年不明（1918年頃）; 同 1930, 段落189-215 Katharine Bushnell. 101 Questions Answered: A Woman's Catechism - God's Word to Women. Lowes Ltd.: Southport (GB), 刊行年不明（1930年頃; 72頁）. 23-26頁; John A. Anderson. Women's Warfare and Ministry: What Saith the Scriptures? David Waldie: Stonehaven (GB), 1933. 20-26頁; Katharine Bushnell. Was sagt Gott der Frau. Berlin, 1936. 約130頁; Katharine Bushnell. The Badge of Guilt and Shame. Southport (GB) 刊行年不明; Ernestine von Trott zu Solz. Die Stellung der Frau nach der Bibel. Landheim Salem e. V.: Asendorf, 刊行年不明. 47頁. 33-37頁; J. C. Hurd. The Origin of I Corinthians. Seabury: New York, 1965. 186-195頁; Joyce Harper. Women and the Gospel. C. B. R. F. Occasional Paper 5. Christian Brethren Research Fellowship: Pinner (GB), 1974. 14-19＋8-9頁; Jessie Penn-Lewis. The Magna Charta of Woman. Bethany House Publ.: Minneapolis, 1975（1919年版の復刻）. 103頁. 21-34頁; Walter C. Kaiser, Jr. 「Paul, Women, and the Church」. Worldwide Challenge 3 (1976) Sept: 9-12; Neal M. Flanagan, Edwina Hunter Snyder. 「Did Paul put down women in 1Cor 14: 34-36?」. Biblical Theology Bulletin (New York) 11 (1981) 10-12; David W. Odell-Scott. 「Let the Women Speak in Church: An Egalitarian Interpretation of I Cor. 14.33b-36」. Biblical Theology Bulletin 13 (1983) 90-93; C. H. Talbert. 「Paul's Understanding of the Holy Spirit: The Evidence of 1 Corinthians 12-14」. Perspectives in Religious Studies 11 (1984) 95-108、特に105-107頁; Chris Ukachukwu Manus. 「The Subordination of the Women in the Church: 1 Co 14:33b-36 Reconsidered」. Revue Africaine de Théologie 8 (1984) 16 (Oct) 183-195; David W. Odell-Scott. 「In Defense of an Egalitarian Interpretation of 1 Cor 14.34-36」. Biblical Theology Bulletin 17 (1987) 3: 100-103; Robert W. Allison. 「Let Women be Silent in the Churches (1Cor. 14. 33b-36) What Did Paul Really Say, and What Did it Mean」. Journal for the Study of the NT 32 (1988) 27-60; Gilbert Bilezikian. Beyond Sex Roles: A Guide for the Study of Female Roles in the Bible. Baker Book House: Grand Rapids (MI), ²1989. 144-153頁; Daniel C. Arichea. 「The Silence of Women in the Church」. Bible Translator 46 (1995) 101-112; 引用説を一つの可能性として検討しているのは: Jerome Murphy-O'Connor. 「Interpolations in 1 Corinthians」. Catholic Biblical Quarterly 48 (1986) 81-94、特に91頁。
14. Neal M. Flanagan, Edwina Hunter Snyder. 「Did Paul put down women in 1Cor 14: 34-36?」. 前掲書 10＋12頁。
15. Daniel C. Arichea. 「The Silence of Women in the Church」. 前掲書 109頁、および Chris Ukachukwu Manus. 「The Subordination of the Women in the Church: 1 Co 14:33b-36 Reconsidered」. 前掲書 189頁。

16. Robert W. Allison. 「Let Women be Silent in the Churches (1Cor. 14. 33b-36)」. 前掲書 44-45頁。Archibald Robertson, Alfred Plummer. A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle of St Paul to the Corinthians. 前掲書 325頁、および Daniel C. Arichea. 「The Silence of Women in the Church」. 前掲書 も、このテキストを創世記3:16に関連づけていますが、パウロが創世記3:16をそのように理解した（あるいは誤解した）のだと考えています。
17. Joyce Harper. Women and the Gospel. C. B. R. F. Occasional Paper 5. Christian Brethren Research Fellowship: Pinner (GB), 1974. 14-15頁; John A. Anderson. Women's Warfare and Ministry: What Saith the Scriptures? David Waldie: Stonehaven (GB), 1933. 20-26頁。
18. Joyce Harper. Women and the Gospel. 前掲書 14頁（タルムードのメギラー篇より）。
19. S. Aalen. 「A Rabbinic Formula in I Cor. 14,34」. 513-525頁, 所収: F. L. Cross（編）. Studia Evangelica II. Texte und Untersuchungen zur Geschichte der altchristlichen Literatur 87. Akademie-Verlag: (Ost-)Berlin, 1964.
20. Gilbert Bilezikian. Beyond Sex Roles: A Guide for the Study of Female Roles in the Bible. Baker Book House: Grand Rapids (MI), ²1989. 144-153頁。
21. 同書 145頁。
22. 同書。
23. 同書 147頁。
24. 同書 149頁。
25. 同書。
26. 同書 151頁。
27. 同書 248-249頁。
28. 同書 151-152頁。
29. 同書 248頁。
30. C. H. Talbert. 「Paul's Understanding of the Holy Spirit」. 前掲書 105頁。「Montgomery translation of the New Testament, early in the century」に依拠しており、また David W. Odell-Scott. 「Let the Women Speak in Church」. 前掲書、および Neal M. Flanagan, Edwina Hunter Snyder. 「Did Paul put down women in 1Cor 14: 34-36?」. 前掲書 にも依拠しています。
31. C. H. Talbert. 「Paul's Understanding of the Holy Spirit」. 前掲書 106頁。
32. 最も詳しいのは Gottfried Fitzer. 'Das Weib schweige in der Gemeinde': Über den unpaulinischen Charakter der mulier-taceat-Verse in 1. Korinther 14. Theologische Existenz Heute 110. C. Kaiser: München, 1963; 福音派の領域では: Gordon D. Fee. The First Epistle to the Corinthians. 前掲書 699-707頁（これに反対するものとして D. A. Carson. 「'Silent in the Churches': On the Role of Women in 1Corinthians 14:33b-36」. 140-153頁, 所収: John Piper, Wayne Grudem（編）. Recovering Biblical Manhood and Womanhood. Crossway Books: Wheaton (IL), 1991. 141-145頁）; そのほか: Jerome Murphy-O'Connor. 「Interpolations in 1 Corinthians」. Catholic Biblical Quarterly 48 (1986) 81-94、特に90-92頁; Elizabeth Schüssler Fiorenza. Zu ihrem Gedächtnis. Chr. Kaiser: München, Grünewald: Mainz, 1988. 287-291頁; G. W. Trompf. 「On Attitudes Toward Women in Paul and Paulinist Literature: 1 Corinthians 11: 3-16 and Its Context」. The Catholic Biblical Quarterly 42 (1980) 196-215; Karl Hermann Schelkle. 「'Denn wie das Weib aus dem Mann ist, so auch der Mann aus dem Weib' (1Kor 11,12): Zur Gleichberechtigung der Frau im Neuen Testament」. Diakonia 15 (1984) 85-90、特に87頁; Hans Conzelmann. Der erste Brief an die Korinther. Kritisch-exegetischer Kommentar über das Neue Testament 5. ¹²1981（新版²1981）. 当該箇所; （コンツェルマンに反対しているのは: C. K. Barrett. A Commentary on The First Epistle to the Corinthians. A & C Black: London, 1968. 333頁、および Mary Evans. Women in the Bible. The Paternoster Press: Exeter, 1983. 95-96頁）。
33. 西方本文のすべての重要な証拠において、コリント第一14:34-35はコリント第一14:40の後に置かれています。このことは、保守的な福音派の解釈者 Gordon D. Fee. The First Epistle to the Corinthians. 前掲書 699-707頁 の見解によっても、これらの節が後から付け加えられたということによってしか説明できません。34-35節の後代の成立を示すさらなる本文批評上の根拠を、最近 Philip B. Payne. 「Fuldensis, Sigla for Variants in Vaticanus, and 1 Cor 14.34-5」. New Testament Studies 41 (1995) 240-262 が挙げています。そこから生じたこの雑誌での議論も参照してください。たとえば反対の立場として Curt Niccum. 「The Voice of the Manuscripts on the Silence of Women: The External Evidence for 1Cor 14.34-5」. New Testament Studies 43 (1997) 242-255、また D. W. Bryce. 「As in All the Churches of the Saints」. Lutheran Theological Journal 31 (1997) 31-39 も参照してください。

34. Gottfried Fitzer. ‘Das Weib schweige in der Gemeinde’. 前掲書 6-7頁; Gordon D. Fee. The First Epistle to the Corinthians. 前掲書 699-701頁。
35. 同書 700頁。
36. Jerome Murphy-O’Connor. 「Interpolations in 1 Corinthians」. Catholic Biblical Quarterly 48 (1986) 81-94、特に90-92頁; 同様に Jerome Murphy-O’Connor. 1 Corinthians. New Testament Message 10. M. Glazier: Wilmington (DE), 1979. 133頁。
37. たとえば Robert W. Allison. 「Let Women be Silent in the Churches (1Cor. 14. 33b-36): What Did Paul Really Say, and What Did it Mean」. Journal for the Study of the NT 32 (1988) 27-60、特に35-39頁 がそうです。
38. Fee, G. D., The First Epistle to the Corinthians, edd. N. B. Stonehouse - F. F. Bruce - G. D. Fee - J. B. Green, The New International Commentary on the New Testament, William B. Eerdmans Publishing Company, Grand Rapids, MI; Cambridge, U.K. 2014, Revised Edition, 780.
39. Schnabel, E. J., Der erste Brief des Paulus an die Korinther, edd. G. Maier - H.-W. Neudorfer - R. Riesner - E. J. Schnabel, Historisch-Theologische Auslegung Neues Testament, SCM R. Brockhaus/Brunnen Verlag, Witten/Gießen 2018, 第4版, 842–845.
40. 論理学と歴史学において、沈黙からの推論はArgumentum e silentio（ラテン語）と呼ばれます。ある事実や出来事が現実のものでなかったことが、そうでなければ確実にそれへの言及が期待されるはずの文脈で、それが言及されていないことから推論されるのです。